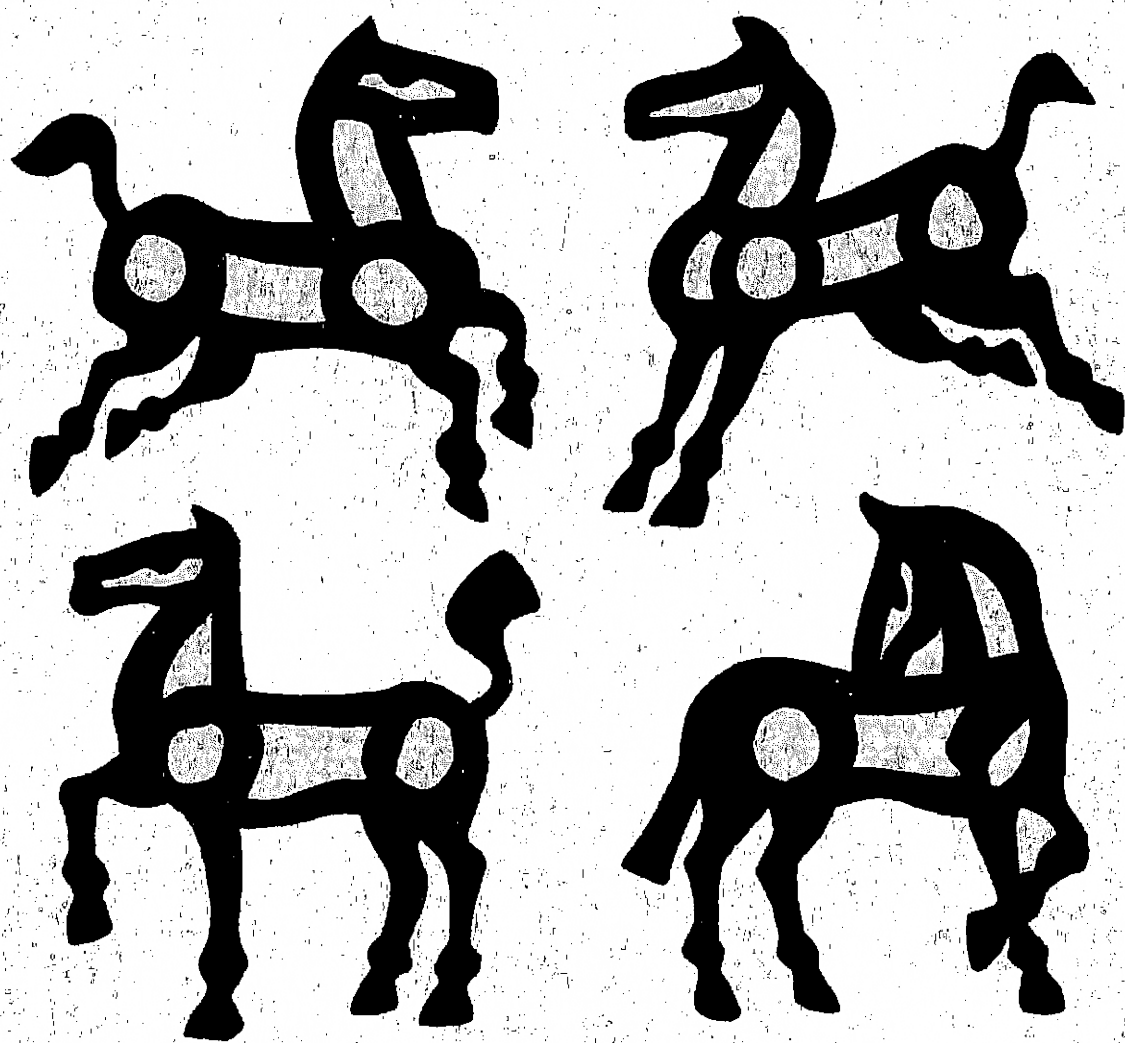
部報

昭和39年度



北海道大学馬術部

純喫茶

トリコロール

（二階）

お化粧は

資生堂

北大正門前（北8・西4）進藤札幌店

TEL 71－9259

☆新しい事務機・事務用品・文具と印刷

★どんな事務機・事務用品でも

★どんな文具印刷でも

まず御照会下さい

心から御満足いただけるように私どもはいつも
つとめております

株式会社 そ 染谷商会

本　店　札幌市豊平5条10丁目　電話 (81) 7156・7157
(81) 0623
第一支店　染谷紙店　札幌市豊平3条8丁目　(81) 8552
第二支店　染谷豊平文具　札幌市豊平3条4丁目　(81) 8456

目　　次

表紙デザイン　　井上克彦

1　北大馬術部讃歌

2　巻頭言 …… 部長　半沢道郎 …… 1

3　無事是名馬 …… 監督　岡田光夫 …… 2

4　反省と今後の方針 …… 主将　小栗紀彦 …… 3

5　馬術部生活に思うこと …… 八木正己 …… 5

6　戦績及び行事報告 …… 記録係 …… 9

7　学生自馬大会観戦記 …… 近藤喜十郎 …… 18

8　各馬調教報告

　北颯号調教記録 …… 野田行文 …… 22

　北翔号について …… 高橋昭夫 …… 25

　北晟号調教日誌 …… 小栗紀彦 …… 29

　北彗号調教について …… 加藤孝志 …… 31

　北涼号調教経過 …… 黒沢道雄 …… 33

　北瑛号その後 …… 八木正己 …… 34

9　T君への手紙 …… 鎌田正人 …… 36

10　馬術部後援会の発足について

11　今計報告

12　マネージングあれこれ …… 近藤喜十郎 …… 40

13　飼育係から …… 高橋昭夫 …… 41

14　作業について …… 高野文彰 …… 42

15　随　想

　不　具 …… 大木誠示 …… 44

　馬術部雑感 …… 御坊田賢一 …… 47

　ケムリのピン詰 …… 菅野　弘 …… 49

　腹ふくるるわざ …… 横田　馨 …… 51

　無　題 …… K・K …… 52

　馬（アオ）の死 …… 加藤孝志 …… 53

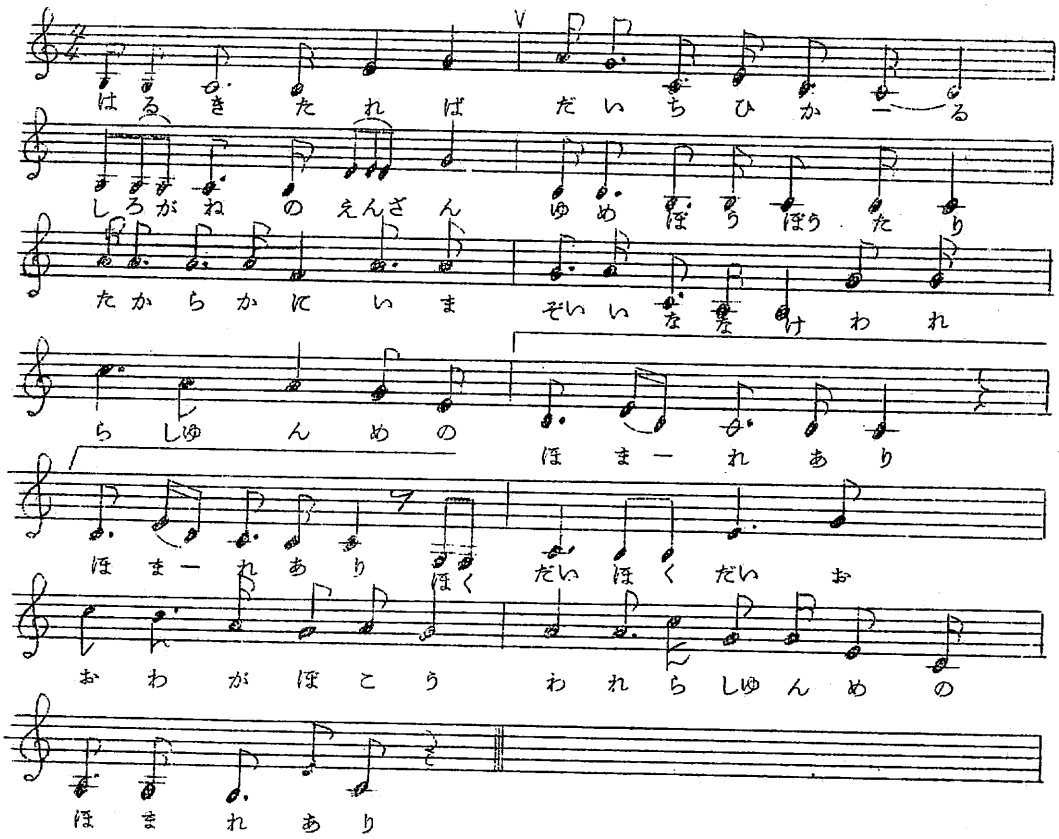
16　馬場馬術入門 …… 滝沢南海雄 …… 56

17　後援会員及び現役部員名簿

18　編集後期

北大馬術部讃歌

作詩　三浦清一郎
作曲　滝沢南海雄



北大馬術部讃歌

一、春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫々たり
高らかに　今ぞ晰け！
われら駿馬のほまれあり

二、時来たれば　旗をかざせ
青雲の旅路に　意気軒昂たり
高らかに　今ぞ晰け！
われら駿馬のほまれあり

三、雲流れて　旅路遥か
青春の孤杖　泥濘はばめど
凛然と　進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり

北大！　北大！　おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり

巻頭言「所感」

部長　半沢道郎

わが馬術部にはある雰囲気があり、風格がある。何がそれを作り、誰がそれを作つたのか、人間に人格があるように人間の集まりである団体にも風格が備わるものと思われる。個人の人格とは違つて団体の風格は過去、現在を通じて多くの人々の人格の所産であり、集成である。伝統は過去にその団体に影響を及ぼした人々の人格の歴史的集積であつて、現在の馬術部の風格はその伝統を背景として現部員が形成しているものである。従つてその発現は現部員の栄光であると共に、その光栄の責任は現部員が負うべきものであると思う。難かしい哲学めいた人格論は別として、私の言いたいことは結局部員一人一人の日常の言行が、即ち一人一人の人格が現在および将来いろいろの影響を部に及ぼすから、部員諸君はそういうことを良く考えて行動して欲しいということである。この事は部員諸君に対してだけではなく、先輩であり顧問教官である自分にとつて諸君以上に責任があると自覚している。

大学の課外活動の目的が、団体生活の中にあつて人間性を高めることにあり、特にスポーツ団体は更にスポーツマン精神を培養することによつて人格を陶冶し、心身を鍛練することに存在の意義がある。人格は精神であるから物質を離れて陶冶することができる筈で課外活動の中にはそういうことのできる部もある。然し馬術部は馬という生物を通して活動することにより目的を達するのであるから単に精神活動だけでは完全な活動ができないわけで、特別な物と多額の費用が必要であるところに、他の部とは違つた困難があり、その困難と闘うところに広い修養練成の場があると思う。

私の入つた馬術部の前身の北大乗馬会を創設された諸先輩も、戦後部を復活して下さつた諸兄も、馬に乗りたい一心から多くの困難を突破して、部の基礎を築かれたのであり、私共の活動の根源はやはり馬に乗ることにあると思う。然し唯馬に乗つて馬術を修得して心身を鍛えることが目的であれば部に入らないで乗馬クラブに通つてもよいわけである。戦前自馬を持たずに軍隊の支援によつて活動していた馬術部と、現在自馬を持つて活動している馬術部とは、その内容は全く違つたもので、今の部では馬に乗るために、馬を持ち馬を飼育し、馬を調教することが寧ろ重要な活動であつて、それが満足にできて初めて馬術練習ができ、大会に出場し、試合に勝つことができるのである。自馬繋養の夢が実現して十年、愛馬と共に幾多の困難と闘かつて来た先輩の努力が輝かしい成果を生み、学内にも信望を受け日本の馬術界にも貢献することができたのであると思う。

昨今の馬術部には特に物質の面に困難な問題が多く、熱心な部員諸君に多大の苦労をかけていることは私の力の足りないことで誠に相済まないと思つている。何時の時代にも責任者として部を主導する主将や役員の苦労は並大低のことではなく、切角高い理想を掲げてその実現に情熱を燃やし努力をしても、余りに大きな現実との隔りに、時にはその理想が藻抜けの殻となつて意気消沈することも再々であつたと思う。然しそれは理想が悪いのでは無く殻が悪いのであつて、殻を悪くしている現実を改善することが重要である。

然し多くの困難も諸君の先輩が成し就げたように、熱意と努力と精進によつて今直ぐでは無いとしても、何時かは解決されて、諸君が担つた一時代に諸君の人格が反映し、それが将来の部の強い支柱となると信じている。融和した団結の力を発揮して困難を打破し、各自の人間性を高めると共に更に高く輝かしい馬術部の風格を作つて下さることを期待して筆を擱く。

無事是名馬

監督　岡田光夫

標題の言葉は私が学生の頃「優駿」だつたと思うがなんでも競馬関係の雑誌に出ていたものである。その意味はどんなに高い代価を払つて買つた馬でも又どんなに早く走れる馬でも故障が多いと云うことはその馬の価値を零に等しいものにしてしまう。故障がなく毎日々々が無事である馬を本当の名馬と云うのだと云うことである。特に競走馬ともなれば先天的に前躯の弱いもの後躯の弱いもの等遺伝的な故障の多いものが往々にして生れ勝ちである。その様な素質があるのを考えに入れずに調教を進めた結果その無理がたゝつて可惜名馬がはなやかなデビューに反し淋しく競走場裡から消え去つてしまう例が非常に多い。又故障の中には飼養管理が悪くて起るものもある。そのいゝ例が馬同士の蹴合い、転倒打撲による後遺症である。これらの中には一旦治癒したかの様に見えて又再発すると云う厄介なものが多い。一旦故障になると調教はむしろ後もどりしてしまうし或る一定の程度以上に高度の要求が出来なくなつてしまう。アメリカの様に故障を起した馬は廃馬にしてしまつて丈夫な馬に取り変えてしまう様な国柄ならばいざ知らず、日本の現状ではこの様な事は望むべくもない。むしろ故障の多い馬をなんとか仕上げ大レースに勝利を博し、例えそれが最后になつて競走場裡を去らなければならなくなつてもそれまでの関係者の努力が大いに賞賛される有様である。例えて云えばボンコツ車を大事に大事に整備して使つている様なものであつて、もしもこれらの努力を金額に換算したら莫大なものとなつていてもこれにあまり気が付いていない様に思われる。要するにアメリカの様に労力費の高い国情が、手間のかゝる馬などはさつさとあきらめて新しい馬を求めるのだと思う。現在部で飼つている馬も非常に故障が多い。その度に苦心して治療に当つている部員諸君の御苦労には常々敬意を表しているが、その努力が報いられないのはなんとも御気の毒に思えてならない。戦争でも損害の多い負け戦さの戦場にいくら兵力を注ぎこんでも無駄なのは、昨今のベトコンとアメリカの関係を見ても明らかである。私は馬に故障を起させない注意深い管理が必要であるし、もしも重大な故障が起つたらあきらめるべきであるとも言いたい。今まで学校で繁養されていた馬の事を考えると先づ無事是名馬と云い得るものは北嶺号であり北斗号であつた様に思われる。最近私が非常に期待し、多くの人達に乗りやすい馬として親しまれた北嶺号の故障が悪化し将来を期待出来ない様に聞かされ正に暗然たる気持になつている。彼女は私が乗りやすい馬である事に見込みをつけて購入をすゝめた馬で、部員諸君の中には或は悍威に乏しいとか鈍感であると云つた批判もあつたかと思うが、私は誰が乗つても素直にのびやかな姿勢で障碍を飛越している彼女の姿が目に焼きついている。彼女にして購入以来の度重なる故障さえなかつたら北大の名馬として有名になつたであろう。私は現在繁養されている馬が部員諸君の行き届いた管理の下に故障なくと云うよりもむしろ故障を起させずに仕上がり一頭の

抜きん出た馬よりも全部の馬が平均した力を発揮する様こい願つてやまない。それには先づ調教の段階をふむこと、このことを忘れないでいただきたいと思う。

反省と今後の方針

主将　小栗紀彦

昨今の成績はすでに諸兄御存知の通り。ここでこれを冷静に反省し、今後の活動に充分活用せねばならない。

北飄号＝恩田兄、野田兄の努力、その恵まれた能力及び環境等により、一昨年秋の対競馬場自馬戦より安定した力をつけ、昨年の活躍は我々に大きな希望をもたらした。しかし昨秋の学生自馬大は「ヘモ」（麻痺性筋色素尿症）のため体調が完全でなく、失権の憂目をみた。今後我々は飼育管理上充分注意し、再び「ヘモ」のため苦杯をなめることのないようにしなければならない。

北翔号＝鎌田牧場より帰つてから、彼女は実にすばらしい。その軽快な動き、旺盛な前進意欲、柔軟さ、これらは神血アラブの彼女にとつては当然であるかもしれないが、学生自馬大二十三位、これにあまんずるわけではないが、北飄、北瓔、北翔中最も心配していた彼女のみが残つたという事は責任者高橋の熱意と努力によるものであり、今後の成長は大いに期待出来るという事である。

北瓔号＝肩の故障、心臓、消化器の欠陥等で不調ではあつたが、国体予戦の活躍は自馬の順調な発展のきざしと思われた。しかし、去年の夏に受けた後肢の傷が致命的で、道大、学生自馬大で充分活躍出来なかつた。今後他馬同様使用し、それに耐えない場合は新馬と入れ替える予定。我々の不注意を彼女のみに負わせるのは全く申し訳ないが。

北曩号、北葬号＝これら新馬は理想に向い着実に一歩一歩前進し、諸兄の期待に応えるべく努力する。

北涼号＝黒沢、加藤（正）の執念ともいうべき熱意を尊重し最後の努力を注ぐつもりである。しかし部の現状より、他部員の練習に使用せぬということは出来ないので、再調教と一般練習とを両立させるべく、彼らに協力したい。

北揚号、朝清号＝これらは部員の基礎技術の習得、練習に使いたい。北瓔号も事情の許す限り一般練習に使用する。

札幌地区馬術大会（自馬）を四月二十九日、六月二十七日、九月二十六日に予定しており、又毎月一度の割で部内記録会を行なう。これらの競技会に責任者及び主将の状況判断により、各部員が割り当てられた馬で参加する事により調教程度及び部員の技術向上を計り公式自馬大会の指針としたい。同好会会員の方々とも相談し、自馬競技会への参加を決定して行きたい。

貸与馬競技での無様なる敗北は弁解の余地がない。確かに貸与馬競技は変則的である。しかしそれ以前に我々の技術の不足故である。いかなる馬であろうとも、原則をもつてすれば かならず御せるはずである。わずかな力で最も有効に運動させる事が原則であるから、どの様な癖馬でも、強力且、適確な扶助を使える騎手と我々がなつておつたならば、勝利の女神は我々に

微笑んでくれたはずである。部員の大多数の希望は種々の癖馬が出て来る、貸与馬競技は出来るだけ少なくした方が望ましいが、学生馬術界の現状より、廃止することは困難であり、四年間の部活動に於ては貸与馬競技会に参加する事も全く意義のない事でもない。又容金面その他で一度に自馬競技会に振替える事もむずかしい等の理由より、比較的容易に自馬大に変られるものは変え、他は今後除々にという事である。しかし、我々は自馬競技会をふやすべく積極的努力をする。我々が主催している全日本女子学生馬術大会は賛否両論が百出したが、今迄諸先輩が築き上げてきたこの全日本大会を我々も続けて行こうということになつた。　これに伴う種々の問題も未熟ではあるが我々も最大の努力をもつて解決していくつもりである。

最も重要な問題は我々自身の基礎体力及び柔軟性の不足、致命的ともいえる御術の未熟さをいかにして解決するかである。北場、北巽、朝清で基礎技術の向上を計り、割り当てられた馬で上級生が個人的に指導する。基礎の出来ている馬がほとんどいない現在、変則的な形の練習馬を置く以外にうまい方法はみあたらない。しかしそれらの責任者はそれらの馬の状態が下向線をたどらない、いや、向上するように努力をしなければならない。数年後に部馬がそろい、どの馬も一般練習に使えるようになるまでは、練習馬に乗る時はあくまで正確且強力な扶助操作の把握、平衡感覚の確立、柔軟性その他いわゆる原則にそつた御術を練習すべきであり、変則的な乗り方を練習すべきではない。貸与馬競技に於て変則的な乗り方をして勝つても全く意味がない。又馬術書よりの知識、すぐれた馬に乗れるあらゆる機会を積極的にとらえてアドバイス、我々自身の経験等について話し合う研究会を時間の許す限り多く開かねばならない。

基礎体力も競技に必要なものは作つておくべきであり、競技会に於て、真青になり息を切らしているようじや、はずかしい。計画性あるトレーニングを行なう。黙々と雪上で行なうトレーニングは競技会に於て最後に物を言う体力と精神力の養成に大なる効果ありと信ずる。三月の名古屋方面を中心とする遠征はマネージャーの近藤の努力で実現する。この機会を我々が共の中の蛙的にならず広い視野を持つために大いに利用したい。

我々は学生である。本分はあくまで真理の追求及び人間性の練磨であると思う。その課外活動としての部の在り方を充分考え、決してその境を脱すべきではない。しかし各自差はあろうが、馬なり、馬術部なり、馬術なりに魅力を感じて在部している諸兄にとつてその活動に費やす時間内に於ては少なくとも、若き熱と力で必死の努力をすべきである。部活動に於ては必然的に存在する規律を守り、自己に対しては厳しく、愛馬達にはやさしくあつてほしい。又一人一人が活動を支えている事を各自自覚した上、大いに自分の意見を主張してほしい。しかし我部は馬を飼つている等、特殊な条件とそれにともなう危険とがあるため、より経験の長い上級生の意見は聞くべきである。

最後になりましたが、昨秋諸先輩、その他の方々により、後援会が発足した事を我々部員一同深く感謝致しております。

今後の我々の活動に多大な御協力と御指導をお願い致します。

馬術部生活に思うこと

八木正己

現在、部は経済的には毎度の事ですが、対外的にも難かしい時期を迎えている。自馬競技への切り換え、貸与馬競技を減らす、そのために完全自馬制の実施が行われ、自馬の管理が、部員数を自馬数で制る様な具合になつて来ている。これは当然の結果ですが、これによつて、部員内でも色々不満が出て来ている。即ち能力のある自馬を持てるか否か、或いは技術的にどうか等々。これに加えて部員外の同好会員が先輩は理として随分と数が増え、ざつと数えて、二、三十人いるようです。自馬制切り換えに伴う練習馬不足、昭和二十九年入所以来、昭和三十四年頃より初つた自馬の入れ換えによる新馬の増加、現在全くの新馬が二頭、競技甲馬三頭、廃馬一頭と残るは二頭だけであり、また場所との関係で借馬も入れ換えることが思う様に出来ない。こういうわけで現在の部馬に乗る場合、関係者以外皆誰もが多かれ少なかれ不満を持つている状態である。

最大の原因は、乗馬人数に対して馬の数が少ないことであるが、（今後、同好会でも何頭かの馬をもつ様な体制を考えたら良いと思いますが、）一つには、新馬調教歴が浅いため、それに関する認識が不充分であるため、馬を調教する場合、最初の一、二年はどうしても一人か二人位の人でやらなければならないのですが　当部で自馬を持つたのが昭和二十九年以来であり（既調教馬）、新馬調教が開始されたのは昭和三十五年頃からであり、もうすでに満五年は終ているが、当初二、三年は、或いは現在でも、これといつて一本筋の通つた調教方法に関する認識が欠けていたように思う。従つて各部員の新馬調教における実際についての認識不足より生じる目先の不平不満は仕方がなかつたかもしれない。しかし、これからは、新馬調教に当らない部員であつても、それをよく認識するようにすれば自然部内における不満もなくなり、楽しく部活動をできると云えると思う。大部分の不満は、馬に自由に乗れないため生じるものと思う。確かに今までの部員も現在の部員も馬に乗りたくて入部して来た。けれども、既七分に乗り三分という言葉があることをまた、時々部員の中に〃僕は馬に接しているだけで楽しい〃と云う部員がいることを充分味わつて考える必要がある。これは部員だけでなく、同好会の若い方々にとつても同じです。単に馬に乗る目的だけで入部或いは入会したのならば、やめた方が良いでしょう。五分でもよいから馬を可愛いがり世話をする気持で、できたら乗るのは二の次という位の気持で入つて欲しいと思います。馬に乗れないからと云つて不満があつたら、何故自分は入部したのだろうとまず考えてみるとよい。納得がゆかなければ話し合う。部の役員も部員も沢山いることを忘れないで常に全体に注意を配らなければならない。

とにかく、八頭しかいないのだから、技術的なこともあつて誰にも充分にというわけにはいかないし、どんな馬でも乗らなければしようがない。

さらに不満の原因として、現在の自馬の練習、競技等による

分割がはつきりしておらず、また、自馬責任制が誤つた解釈により誤つた方向に傾いているためであるように思う。一つの団体としての馬術部であるから、当然、自馬制を行う場合競技馬の他に、誰でも、何時でも（といつても、決められた時間に）引き出せる馬匹を、今の部員数なら少くとも三頭は用意しておかなければならないということである。

練習馬の自馬責任に当つたものは、何の目的がなくて、無関心になるという人がいるけれど、これこそ、自馬責任制の誤解である。自馬責任ということは、少くとも当部のような団体にあつては、まずその馬匹の馬体管理者であるということ、その馬に乗る人の指導者であるということ。さらにその馬の調教がくずれないように常に見守るということがその主要なものでなければならず、最後の調教のくずれを防ぐというところは、極言すると、積み木をやつているような積りになれば良いわけである。勿論、調教程度の向上を計ることは非常に良いと思いますが、それによつて、練習馬的性格を失つた、かと云つて競技馬でもないと云つた中途半端な存在とならないように、その馬の能力、部における要求等（練習における）を考え合わせて、個人的な望みも、断つべきときは断ち、区切りは明確にしなければいけない。それでこそ自馬制の意味が出てくる。練習馬無き馬術クラブは増々弱くなる。一、二年の時に乗る時間が少ないことは大きな問題である。

人間である以上、技術的個人差は当然出てくるし、競技においては、下積みとなる者が当然でてくる。（或いは自馬配分においても）けれどもここで面白くないと思うことは、何かを忘れてはいませんかということになる。皆が楽しくやれるためには、技術的に下手で、部であまり良い条件になくても、馬を可愛いがり楽しく過せるように適度に馬に乗れ、出来るだけ競技にも出られるような環境をつくるように常に気を配らなければいけない。従つてそういう人達も、馬に接触するのが大きな目的で入部したのだから、そういう方向に自分から持つてゆくことにより、うまく調和をとることができると思う。とにかく愛馬精神を忘れてはいけないし、それでは馬公達にはずかしい。特に馬術部では、馬を愛することによつて一つに結びつけられるし、馬を愛することが少なくなるとその結びつきも反撥し始める。

最後に一言、はつきりと認識してほしいことは、当然のことですが、馬術部というのは大学の課外活動としての一つのスポーツクラブであるということである。大学の講義には勿論「馬術」なんてないし四年間以上いても単位はくれない。即ち大学生活の一部である。その割合は個人差がありますが、このサークルに入るか入らないかは自由である。講義時間として大学の時間割に組まれていないのだから、ときには無理をしなければいけないのも当然である。好きで入部したのだから、無理が出来ないと云うのなら（度合いにもよるけれども）本当に好きではなかつたのですから、結論は入部しなければ良かつたことになります。とは云つても実際は仲々複雑ですが、少くとも、そのくらいの覚悟をして入部して来いということはできる。学問に差しつかえあれば何時でも、その損失は補える。突発的な問題は別でしようが、とにかく馬術部は大学の課外活動であると

いうことを常に自覚していて欲しいと思います。特に新入の方々は、そうすれば思い切って楽しく馬術部生活を送ることができるでしょう。何だか総まりなく、書いてきましたが、一年多く馬術部と大学に居て馬術部の裏も表も真中も、嫌という程見て来ましたが、何かのお役に立てばと一筆した次第です。

お酒飲みたし　おチョコなし
ビール飲みたし　グラスなし
カクテルしたし　器具はなし

酒類の御相談は

沢田商店

正門前

TEL 71−0824

ジンギス汗専門店

義経

宴会、コンパにご利用下さい

本店　北18条西5丁目　T(71)6801
支店　北7条西5丁目　T(71)2359

雑穀飼料商

渡部商店

札幌競馬場前（北13西18）
TEL（北局）71－7034

馬具・鞄製造販売修理

中野馬具店

札幌市北13条東1丁目石狩通
TEL ③－7876

乗馬用ズボン専門店

松田屋

田辺洋服店

札幌市豊平四条六丁目平岸通り
TEL 81－7341

札幌競馬
道営競馬御用達
乗馬連盟

戦績及び行事報告

4月10日　　新入生勧誘のためのパレード

4月18日19日　　国体予選（於北大）

○一般自馬複合競技

八木、野田共に馬場で点を稼ぎ、障碍でも見事な飛越ぶりで他を圧倒した。

選手名	八木	野田	湯藤
馬名	北瓔	北飄	鳥華
所属	北大	北大	帯畜大
馬場得点	109	105.3	98.7
障碍減点	0	8	14
計	109	97.3	84.7
序列	1	2	3

北大出場選手(馬)
八木（北瓔）
野田（北飄）
滝沢（北翔）

○一般自馬中障碍飛越競技

出場21選手中満点の4名でバラージュを行つた。

1位　帯畜大　湯藤（鳥華）　減点0（24秒）

2位　北大　野田（北飄）　〃　0（29秒）

3位　帯畜大　都築（碧雲）　〃　4（22秒）

4位　帯畜大　前田（ブラントモア）　失権

北大出場選手（馬）

野田（北飄）　八木（北瓔）　滝沢（北翔）　大木（北凉）

○六段飛越競技

1位　帯畜大　丸田（雲霧）　　3位　帯畜大　湯藤（竹若）

2位　〃　都築（碧雲）　　4位　北大　野田（北飄）

○一般貸与馬中障碍飛越競技

北大から出場の全チームが準決勝に残り、決勝も北大チームの間で争われ、結局北大Bが優勝した。

〔北大関係の部詳細〕

準決勝

馬名	北大A	北大C	酪C
立山	市川—179	小山—0	—239
北凉	小栗—219	黒沢—219	—239
計	—398	—219	—478

準決勝

馬名	北大B	北大同	酪A
大雪	山村—10.25	田中—179	—179
朝清	加藤—129	岡田—179	—179
計	—139.25	—358	—358

決　　勝

北大B	馬名	北大C
山村—12.5	洋孝	黒沢—17.75
三浦— 7	秀峰	高橋— 7.5
加藤— 0	立山	小山— 4
—19.5	計	—29.25

北大出場選手

北大A	市川、	小栗、	高野
北大B	三浦、	山村、	加藤
北大C	小山、	黒沢、	高橋
北大同	岡田、	田中、	田中

※　国体予選の結果、北大からは自馬競技に八木（北瑛）、野田（北顎）、貸与馬競技に北大Bチームが国体に出場することになつた。

4月22日～27日　　新入生講習会

5月　9日　　道馬連主催初心者講習会（於北大）

5月26日～30日　　三年目対象強化練習

5月20日　28日　　春期部内競技会

6月　7日～10日　　国民体育大会（於新潟）

○一般自馬中障碍飛越競技　　野田（北顎）6位　　八木（北瑛）失権

○一般自馬総合競技　　野田（北顎）スチープルで失権

八木（北瑛）スチープルで失権

○六段飛越競技　　野田（北顎）　　130cmで失権

○一般貸与馬中障碍飛越競技

2位　　北海道チーム（田中＝札鉄、加藤、山村）

6月29日　　新馬（ナカカゼ＝北葦）入厩

7月　5日　　道馬連主催初心者講習会（於北大）

7月　9日～15日　　七帝戦のための強化練習

7月18日～20日　　国立七大学体育大会（於京大）

これまでと試合形式が変り、等式上の試合となつた。10頭の馬に計15鞍騎乗し、その総減点によつて順位を決定したのであるが、当面の敵がわからず、とまどつた感があつた。北大は滝沢の健闘が光つたが、あとは生彩なく、ことにマイコの経路違反による減点が大きく響いて3位に終つた。

馬名	北　大	東北大	東　大	名　大	京　大	九　大
サワラビ	—0（小栗）	—100.5	—12.25	—23.75	—3	—3
	—3（高野）	—3	—86.5	—0	—7	—0
サザナミ	—246.5（萩原）	—246.5	—240.5	—260.5	—266.5	—246.5
	—260.5（近藤）	—246.5	—257.5	—277.5	—277.5	—250.5
マイコ	—220.5（大木）	—217.5	—9	—101.5	—237.5	—244.5
	—277.5（加藤）	—237.5	—106.5	—100.5	—237.5	—237.5
ジルダ	—7（滝沢）	—190.5	—81.5	—226.5	—86.5	—180.5
	—9.25（滝沢）	—94.5	—3.5	—86.5	—80.5	—0
銀　春	—277.5（大木）	—277.5	—266.5	—260.5	—266.5	—277.5
	—277.5（滝沢）	—266.5	—237.5	—237.5	—237.5	—277.5
豊　藤	—9（松六）	—0	—0	—0	—0	—0
サターン	—0（萩原）	—9.75	—3	—3	—3	—7
鳳　鳴	—3（加藤）	—4	—8	—12	—0	—0
高　嶺	—196.5（萩原）	—200.5	—84.5	—186.5	—92.5	—106.5
四　明	—237.5（小栗）	—226.5	—240.5	—220.5	—90.5	—246.5
総減点	—1934.75	—2321.25	—1637.25	—1996.75	—1886.	—2077.5

1位東大、2位京大、3位北大、4位名大、5位九大、6位東北大

7月19日～25日　　二年目対象合宿

8月1日2日　　招待全日本女子学生馬術大会（於北大）

○団　体　戦　　参加7校12チームで行われたが、北大は2チームとも準決勝で敗れた。

〔決　勝　戦〕　　岐阜大（—337）　熊本大（—457）　帯畜大（—447）

1位　岐阜大　　2位　熊本大　　3位　帯畜大

北大出場選手　　北大A　牧、八木、　　北大B　大堀、仙波

〔北大関係の部詳細〕

・予選第1試合

北大A		馬　名	熊大B
八木	—225.5	立　山	—227.5
牧	—0	北　楊	—137.5
	—225.5	計	—365.0

・予選第4試合

	北大B	馬　名	岐　大
仙　波	—0	山　透	—201.5
大　堀	—227.5	北　涼	—141.5
	—227.5	計	—343.0

準決勝第１試合

北大 B		馬名	熊大 A
大堀	—227.5	立山	—17.5
仙波	—219.5	北楊	—10
	—447.0	計	—81.0

準決勝第３試合

北大 A		馬名	岐大
八木	—207.5	キング	—187.5
牧	—219.5	アネップ	—207.5
	—427	計	—343.0

○個人戦　　１位岡田（名大）　　２位八木（北大）　　３位稲田（熊大）

北大出場選手　　牧、八木、大堀、仙波、小木曾

８月５日～１１日　　１年目対象合宿

８月２０日　　対中央競馬界獣医親善試合（於北大）

馬名	北大 A	北大 B	中・競
北涼	小栗 —21.25	半沢 —25.25	—59.0
北楊	大谷 —24.75	水野 —59	—17.5
朝清	高野 —33	生田 —69	—65.0
北榆	近藤 —23	八木 —10	—71.0
北瓔	山村 —2.75	吉川 —165.0	—9.5
計	—104.75	—328.25	—218

８月２７日　　対中央競馬会獣医親善試合（於北大）

馬名	北大	光星高	中・競
北涼	黒沢 —115	—179.0	—4
朝清	河合 —68	—42	—177
洋孝	八木沢 —3	—4	—3
北楊	大谷 —63	—4	—103
立山	加藤 —183	—235	—219
キング	山村 —115.5	—4	—3
キング	近藤 —30.5	—3	—18.25
計	—577.0	—471	—529.25

９月１２日１３日　　北海道馬術大会

○一般自馬複合競技

選手名	鎌田	田中	鍋谷	吉井	合田	鎌田
馬名	セントベル	洋孝	竹若	鳥華	旭峯	北翔
所属	北大同	札鉄	畜大	畜大	旭乗	（オープン）
馬場得点	150	122.66	103.33	103	81	161.33
障害減点	—6	—21	—6	—6	—12	—14.5
計	144	101.66	97.33	97	69	146.83
序列	1	2	3	4	5	

北大出場選手（馬）　近藤（北檢）　野田（北飄）　大木（北瑛）

○一般自馬中障碍飛越競技

1位　帯乗　大沢（碧雲）　2位　帯大　飯島（碧雲）　3位　帯大　鍋谷（竹若）

北大出場選手（馬）

八木沢（北檢）、河合（朝清）、首藤（北楊）、加藤正（北檢）、黒沢（北凉）、魚住（朝清）、大谷（北楊）、山村（北瑛）、野田（北飄）、東沢（朝清）、加藤孝（北凉）、高野（北飄）、田中（北檢）、増田（北楊）、

○一般自馬六段飛越競技

1位　畜大　飯島（碧雲）　2位　畜大　鍋谷（竹若）　3位　北大　野田（北飄）

○婦人小障碍飛越競技

1位　畜大　森本（碧雲）　2位　北大　八木（北瑛）　3位　畜大　平野（竹若）

○一般貸与馬中障碍飛越競技

1位　札鉄　田中　2位　北大　大木　3位　北大　加藤正

北大出場選手

田中、加藤孝、魚住、高野、荒木、八木沢、大木、大谷、河合、山村、井上、嶺城、東沢、黒沢、首藤、増田、加藤正、近藤、

○大障碍飛越競技（数字は減点）

1位　畜大　鍋谷（竹若）　—0　　4位　畜大　飯島（碧雲）　—10

2位　北同　鎌田（セントベル）—3　　5位　北大　野田（北飄）　—10.5

3位　札乗　岩坪（山透）　—9

9月27日　北檢号離厩式

10月4日　北海道国体選手権（於北大）

1位　酪農大、2位札幌乗馬クラブ　なお、この試合に北大からの参加チームなし。

10月8日　北檢号函館へ去る。

10月11日　三大学対抗戦（於岩大）

	北大	岩大	東北	
北大	＼	×	○	1勝1敗
岩大	○	＼	×	1勝1敗
東北大	×	○	＼	1勝1敗

〔北大関係の部詳細〕

第2試合

北大		馬名	東北大
高野	—0	岩風	—8
山村	—18 1.5	明道	—14
高橋	—17 7.5	雪雲	—17 4.5
河合	—0	中雲	—4
黒沢	—13	月光	—18 9.5
	—36 2.0	計	—39 0.0

第3試合

北大		馬名	岩大
黒沢	—6	岩風	—0
山村	—20 7.5	明道	—6 6.5
高野	—17 7.5	雪雲	—20 7.5
加藤	—6	中雲	—0
河合	—7	月光	—4 7.5
	—40 4.5	計	—32 1.5

オープン戦（対岩手大）

北大		馬名	岩大
黒沢	−0	岩風	−3
高橋	−23.75	明道	−15.25
高野	−65.5	雪雲	−151.5
加藤	−3	中雲	−0
河合	−6	月光	−14
	−98.25	計	−183.75

10月28日〜31日　王決予戦のための強化練習

11月2日3日　東北北海道学生馬術選手権大会（於畜大）

○予選トーナメント

○帯畜大ー岩大、

○北大ー岩医大、

○酪農大ー福島大ー東北大

この結果、畜大、北大、酪農大および敗者復活戦に勝ち残った福島大が決勝リーグに進出

〔北大関係の部詳細〕

北大		馬名	岩医大
小栗	−4	竹若	−22
野田	−0	岸花	−160
大木	−149	晴若	−165
八木	−35.5	舟蓮	−155
加藤孝	−5.75	モア	−109
荻原	−4	雲翔	−115
	−198.25	計	−725

道内唯一の専門店

バッチ・メダル・徽章・カップ・楯

株式会社　札幌メダル商会

札幌市南4西3（ススキノ停留所前）

Tel（札幌）23〜1299，24〜0594，25〜8711

◦決勝リーグ

	畜大	北大	酪農	福島	
帯畜大	＼	○	○	○	3勝0敗
北　大	×	＼	○	○	2勝1敗
酪農大	×	×	＼	○	1勝2敗
福島大	×	×	×	＼	0勝3敗

北大は決勝リーグ第1試合で畜大に敗れ、王決進出ならず。

〔北大関係の部詳細〕

◦決勝リーグ第1試合

北　大		馬　名	帯畜大
加　藤	−117	モ　ア	−8
荻　原	−0	雲　霧	−0
大　木	−105	晴　若	−87
小　栗	−0	岸　花	−123
八　木	−7	舟　政	−8
野　田	−5.5	セイホウ	−1
	−234.5	計	−227

◦決勝リーグ第4試合

北　大		馬　名	酪農大
加　藤	−0	竹　若	−0
小　栗	−4.5	岸　花	−0
八　木	−69	晴　若	−77
大　木	−12	勇　勝	−15.5
野　田	−0	モ　ア	−0
荻　原	−4	雲　霧	−0
	−89.5	計	−92.5

◦決勝リーグ第5試合

北　大		馬　名	福島大
八　木	−38.5	厚　内	−12
加　藤	−4	竹　若	−0
大　木	−8	勇　勝	−155
小　栗	−0	岸　花	−0
野　田	−0	広　風	−0
荻　原	−16	船　政	−0
	−66.5	計	−167

※ この大会で野田は最優秀選手に選ばれた。

11月8日　　第1回札幌地区馬術大会（於北大）

自馬の試合の充実を目標とする小栗主将の方針により北大が主催して開催した。

◦一般自馬複合馬術

選手名	野　田	高　橋	中　島
馬　名	北　飄	北　翔	デイリ
所　属	北　大	北　大	酪農大
馬場減点	−78.67	−88	−106.33
障碍減点	−8	−0	−0
総減点	−86.67	−88	−106.33
序　列	1	2	3

北大出場選手

野　田（北　飄）
高　橋（北　翔）
八　木（北　瓔）

○一般自馬中障碍飛越競技

1位　光星高　清水（山透）

2位　酪農大　中島（デイリー）

3位　北　大　高橋（北翔）

北大出場選手（馬）

大谷（北楊）、河合（朝霞）、黒沢（北涼）、高橋（北翔）、野田（北飄）、八木（北瑛）、田中（朝霞）

○小障碍飛越競技

1位　北　大　小栗（北晨）、

2位　酪農大　福島（アネツブ）

北大出場選手（馬）

小栗（北晨）、大堀（朝霞）、仙波（北楊）、八木（北涼）

○大障碍飛越競技

1位　北　大　野田（北飄）

2位　札　乗　岩坪（山透）

○六段飛越競技

1位　北　大　野田（北飄）

2位　北　大　黒沢（北涼）

3位　札　乗　岩坪（山透）

11月9日～12日　　女子戦のための強化練習

11月14日15日　　関東北女子戦（於福島）

○団体戦

1位福島A、　2位青山A、　3位成城B

北大出場選手

北大A　八木、仙波

北大B　大堀、小木曽

○個人戦

1位高山（東農）、2位砂金（福島）

北大出場選手

八木、大堀、仙波、小木曽

11月22日23日　　全日本学生自馬競技大会

（於馬事公苑）

選手名	調教審査	持久力	全力審査	減点計	序列
高橋（北翔）	−81.83	−134	−23	−238.83	23
野田（北飄）	−76.67	失権			
八木（北瑛）	−97.34	失権			

11月25日26日　　学生選手権（於馬事公苑）

野田　馬場で失権

12月8日～12日　一年目対象強化練習

12月15日　街乗始まる。

12月17日　対東北大学定期戦（於仙台）

今シーズン最後の対外試合であり、敗け続きの空気を一掃すべく戦つたが、シニア、ジュニア戦ともに敗退した。シニア戦は一喰、四喰われと完敗。ジュニアでは大谷が手痛い経路違反をしでかして敗れた。

○シニア戦

北大		馬名	東北大
黒沢	−37	杜川	−33
高野	−7	杜勇	−84.5
小栗	−115	拓龍	−33
近藤	−18	ロシ	−0
山村	−167.5	杜駿	−147.5
	−344.5	計	−298.0

○ジュニア戦

北大		馬名	東北大
多田	−6	杜勇	−0
池田	−3	杜川	−4
大谷	−151.5	拓龍	−3
増田	−107.5	杜駿	−151.5
首藤	−3	ロシ	−0
	−271	計	−159.5

（文責在大谷）

世界のコーヒーが
味わえるスタンド

最も優れたコーヒーと和洋菓子

パーラー　石田屋

札幌市北3条西3丁目　TEL㉒1872
㉒7776

学生自馬大会観戦記

三年目　近藤　喜十郎

昨年は何がなんでもオリンピックを中心にして回転したので春に国体があつたり、全日本が中止されたりした。その例にもれず毎年国体後に行なわれて学生自馬が十一月●東京で行われることになつた。我部では自馬の大会としてこの試合と国体を毎年大きな目標に置いているので力を入れてきた。それに例年国体、全日本と同時期に開催されていたが、今年は独立してあるし、馬も好調だ。うまく行けば相当な所まで行くのではないかと部員のだれもが期待してむかえた試合であつた。北瑛の八木さん、北瑛は国体予選で優勝しているし、スタミナに少し欠けるかもしれないが何とか出来るのではないか。北鵬の野田さん、道大会以来すつかり安定してきてどんな障碍もきらうことなく、落すことなく飛んでいる。馬場調教も一番出来上がつている。それに野田さんも八木さん同様最後の試合と張り切つている。個人上位入賞も有力だ。北翔の高橋君、この夏に人馬とも2ケ月間日高の鎌田先輩の所に行きすばらしくなつた。その結果は道大会複合をみても明らかである。きつと期待に応えてくれるだろう。このような期待を背に十四日晩秋の桑園の駅を離れていつた。

馬は道中何ら事故もなく東京に着いたが、着いて数歩あるいたところで北鵬に「へも」が出た。足をひきずつて完全に前進気勢がなくなる病気だ。この間もやつたことがあり再発が心配されていたがよりによつてこんな時に出るとは。思わぬ事故であつた。

試合の行なわれたのは馬事公苑である。ここは北大にとつては森本先輩が名馬北嶺号で一m七〇の壁をやぶつて優勝した所だし、マグニフィシエントセブンのあの見事な王決での勝ちつぷりの余音が残つている所だ。

試合の予想などをプログラムで見てみるとまず四連覇を見指す岡山大、そして地元という有利さと昨年二位の実積をもつ学習院大、そして関西の雄、京大が筆頭とされている。みるべき馬としても明旗（明治）、オーストラリアより輸入した慶龍（慶応）、マンダレー（早大）、地方ではロシナンテ（東北）など今年は豊富な様だ。

二二日は快晴、青空の下の白い馬場サクが印象的だ。北大の出場順番は北翔（七）、北鵬（三一）、北瑛（六一）である。高橋君なんとか馬場をすませスチーブルにむかう。馬場では常歩がうまくゆかなかつたと云う。得点は㈠八一。八三。あまりよくはない。東京勢の平均が㈠七〇点前後だから一〇点ぐらい悪かつたわけだ。スチーブルは一周一一〇〇mの練習コースを二回まわり、そのあと人り組んだ経路に入つてゆく様になつている。経路は非常に複雑で地図の上では仲々おぼえられない。五・五Kmの中に障碍が三七個。各障碍の前後一〇mに白線が引いてある。この区域外では経路をあやまつてもよい事になつたらしい。予定では全コースで経路違反をとる事にしていたらしいが主将会議で地方から強い反対意見が出てやつと変更されたという。馬事公苑を知らない地方勢にとつては全く不利なコースだ。「コースをまちがえずに帰つてこれるかなあー」と心配顔の高橋君だつたが係員の「

スタート」の声にいさんで飛び出していつた。北翔は元気に走つている。二周の競馬コースを終えて複雑なコースの中に姿をかくす。「まちがわないで帰るだろうか。」と帯広の選手と話し合う。時々姿をみせるがまたすぐ林の中に入つていつてしまう。見ている方も一体今、第何障碍を飛んでいるのか皆目わからない。それでも全身汗びつしよりの北翔がゴールにあらわれる。何とか走り切つたらしい。高橋君の言によれば「途中何度もわからなくなり立ちどまつたり、もどつたりした。いや、何とか帰れてほつとしたよ。」と重荷をおろした安ど感で顔を染めながら話す。減点は㈠一三四点、これで第一の難関を突破したわけだ。これを聞いた野田さん「よし、増点をもらうぞ。」と勇んでまず馬場審査に向かう。馬場では北飄落ち着いていて㈠七六・六七を取る。北飄にしては少しからい点の様だ。けれど馬場のハンデイなどすぐ野外騎乗で取れるだろう。現在まで増点をもらつた馬は学院院の誉桜だけだ。北飄も非常に落ち着いている。ヒツカケルときの様に目をむき鼻の穴を大きくはしていない。よしいけるぞと皆で激励する。競馬コース一周を二分ぐらいでまわつている。これならば増点は確実だ。第一三のナワノレンをくぐり左に回転して土管をとぶ。一五はひくい単一だつたがそれも何なく飛んで行つた。第一六は固定で電柱ぐらいの太さの丸太が三本しつかりと山形にしてあり下が一m程掘つてあるのだつた。見るからにがんじようで馬をとおすまいとがんばつている。第一五からの距離はほとんどなく一〇mぐらいだ。北飄第一五を飛んで少し左に回転し向かつたがその前で足をふんばり飛ぼうとしない。応援している一同あおくなつた。野田さん再三拍車をぶちこんだが遂に行こうとしなかつた。一同あぜんとする。あんなによく飛ぶ北飄が止まるなんて信じられない。けれど結果は目で見た通りだ。残念という言葉で終わるにはあまりにもおしかつた。午後北翼号が出場する。馬場では時々馬が反抗して八木さんは消耗していた。得点はその為㈠九七・三四と北翼では最底の点だ。スチーブルでは元気よく二周まわつて複雑なコースに入つてくる。不規則な息づかいが手にとるように聞えた。第一三のナワノレンをくぐり土管に向かう。ピタリと止まる。八木さん二回目は拍車を入れて飛ばす。第十五は単一バー一m。一番簡単と思われるのだ。ところがもう力がつきたのか前肢が上がらない。八木さん、脚にはさみこみ拍車を入れ馬をぶつけるが全く肢が上がらない。前に出てゆく気はあるが肢が上がらないのだ。最後は八木さんの必死の頑と赤くなつた拍車の挑戦を受けたがやはり駄目だつた。もう北翼には力がのこつてなかつたらしい。後で八木さんが述懐していたが、長い間の故障でスタミナがすつかりなくなつていたのが突然無理なことを強いられても当然駄目なものだ。この日はやはり経路複雑なため経路違反による失権が多く、残つて余力審査に行く馬は二〇数頭しかいたかつた。特に地方勢に多く僚友帯広も広風、ブラントモアが経路違反で失権してしまつて残つたのは竹名だけになつてしまつた。昨年は三位に入つたのに残念だつた。岩手大学も桐駒を始め三頭全部失権した。第一日の結果では予想外の事として優勝候補の岡山大が二頭しか残らず団体を組めなくなつた。やはり学習院が強く五頭のうち四頭が第二日目に向かつた。

二日目も秋晴れのいい天気で風もない。余力審査の障害個数は十二、三個で程度としても一m二〇くらいが最高でそんなに難か

しくはない。経路も急回転などなく簡単だ。北大の唯一の望み北翔号は勇んで出場する。スタート前大きく駈足の輪乗りから第一に向かう。飛んだとたんに高橋君の体があおられる。彼は少しかたくなつているのかなと思つた。第二、第三と進むに従つてだんだんスピードがついてくる。全く障碍をきらわず、大きなゴムまりがはねている様だ。高橋君は必死になつてしがみついているという表現がピッタリの感じだ。第六を飛んで帽子がとび、彼の表情がはつきりわかる。途中で何を思つたかまきのりをはじめた。顔を見ると不安げな表情をしている。「経路を忘れたのだな？」と思つた。しかし大きなゼスチュアで手を指す。何とか思い出したらしく無事経路をまちがえず最後に向かう。最後などは実に、三〇cm以上の余裕を残し飛び越えた。全くチビの力には驚くばかりだ。減点は㈠二三。総計で㈠二九八。八三だつた。そのあと帯広の竹若が出場したが第八で止まつてしまつた。失権である。東北大学は健闘してロシナンテ、杜騎がゴールした。

北翔号から降りたつた高橋君に聞いてみればやはり経路を忘れてしまつたと云う。あまり緊張しすぎたのだろう。しかし北翔は実によくやつた。「俺がスチーブルと余力審査の経路さえはつきり覚えてさえいれば人賞出来たんだと思う。」と彼は云いていたが全くその通りだと思う。やはり試合になれることも必要だ。北の端にいるため下級生の時から大きな大会をたくさん見る機会がなくて残念だ。やはり無理しても全国的大会は早くから見ておくべきだと痛感した。ふんいきになれる事が大切に思う。結局学習院が首、墨、藤桜を満点で帰して優勝した。二位には京都大学、三位は早稲田大学であつた。試合全体の感想としてはやはり関東の力が抜きんでていることを知らされた。しかし決して地方が不利でない事も知つた。帯広でも馬が悪くてまけたのではないし、その他岩大も西日本の大学にもそうだと思う。北大はあと一歩というところでつまずいた感じだ。馬は決して他校とくらべて劣つていないと思う。要は調教であつてそれもどんな障害にもおそれず飛ぶという鎌田さん、岩坪さんの云われる「馴教と徒歩作業」がまず第一に必要だと思う。この大会で決して我々北大が勝てない事はないと思う、道は大いに開けている。六五年度の自馬大会こそ大いにがんばりたい。

一学生選手権を見て一

自馬大会を終つて二日後二五日より選手権大会が開かれた。この大会は今回で三六回をむかえ、我が北大からは野田さんが出ることになつた。毎年東北、北海道で予選を行なうが今年度は話し合いで各校一名と決めた様だ。第一日目馬場競技は北風吹くバレスで行なわれた。三日前にあんなに騒たかかつたのにすつかり合えこんでしまつた。優（おおい）馬場の見学席で肩をすくめてみる。一人二頭乗り、その合計点の上位一六人が二日目の障害に進むわけだ。だからどれ程障害がうまくても残れない。野田さんは最初「光明」に騎乗し出場する。馬場は乙（オツ）種で横歩と踏歩変換まで入る相当高度な技術を要する。前半調子がよかつたのだが横歩より複雑な経路に入るところで野田さん経路をまちがえる。再三まちがえて遂に失権してしまつた。後できけばどこまでやつたのかわからなくなつてしまつたと云う。残念であつた。北日本では、関東、関西に互せる騎手は野田さんしかいなかつたのに。これで二日目に残れる可能性は全くなくなつてしまつた。

出場選手を見てみると馬歴五年以上というのが非常に多い。特に関東、関西は殆んどそうだ。やはり馬場馬術は一日の長があると見た。北日本は選手が殆んど三年目のせいか得点はほとんど出ない、下位にランクされた。馬場馬術は年期が物を云うということを痛感した。

二日目馬事公苑で障害競技が行なわれた。馬は自馬大会出場校よりの供出馬だった。しかし意外とゴール出来る物がいなく大半失格してしまう。関東の選手はやたらと鞭をつかうのが目につい た。騎座はまりも、八木さんや野田さんの様なしっかりした処は選手にはみうけられなく、障害では地方と関東の差はない様に思った。我々はこの点に注目して自信をもって進もう。結局同志社の柏原選手が優勝した。選手権は全くの運だと云う者がいるがやはりそうではないと思った。　実力がなくては勝てないと思う。むろん運もあるが、それ以上に気迫が大切な試合だ。北大にとってこの試合は第三回の東園先輩、第十一回の鶴間先輩と二人の優勝者を出し一昨年は恩田さんが二位になっている因縁の深い大会だ。我々は今後いっそう技術の向上にはげみ馬術を始めたからには学生馬術の目標である選手権をめざそうではないか。

昭和の春

直営

三鈴

札幌市南五西四

電話 (25) 6701

コクのある北国の味

らーめんの

いろり

札幌市北15西5

Tel 71—6960

北飄号調教記録

野田行文

北　号は昭和三十年五月の生れですので今年の春で、ちょうど満十才になります。部員の理解と好意により、新馬として大切に取扱われて来ましたが、三十六年秋に入厩して以来、すでに三年半近くを経過しました。

次々新しい馬が購入される一方では、北榆、北嶺、北斗など、古き良き師の去り行く作今、もはや新馬としての特権に、いつまでも固執することは許されぬ時期に来た感があります。

下級生の練習に供する一方、対外試合では、優秀な成績を納めなければならないのが学生馬術の宿命ですが、ともあれ馬に乗る一人々々が、馬術に対する知識を深め馬に対する理解と愛情があれば、このような問題を解決できるのではないかと期待しています。

さて、北飄号の調教は、当時三年目の恩田さんの手により始められました。初期の調教に関しては、正確な記憶はありませんが、二年目の頃から私も騎乗するようになりました。反動が大きく、脚には鈍感で、おまけに時々ひっかけられるなど、当時の私にとつてはあまり魅力のある馬ではありませんでした。

三十八年夏、札幌における道大会に注目を集めながらデビューし、恩田さんが騎乗して、馬場においては、一年半の調教の成果を披露しましたが、障害の方では多くの反省すべき問題点を残しました。

この試合後、恩田さんは、札幌に居られる岩坪氏の指導により伊方式で調教することを決心したようです。このことは、北飄の調教のみならず、その後の馬術部内部に大きな波紋を投げかけ、岩坪氏の来札は、まさに黒船の感がありました。

当時、北飄は馬術の方では速歩の横歩を行い、できれば踏歩変換までやるつもりのようでしたから、障害における伊方式と、馬場の収縮との調整でいささか混乱状態でした。

しかしその後の学生自馬大会では、予期以上の成績をあげ、大器（？）の片鱗を見せ、将来に期待がもたれました。

三十九年恩田さんの卒業後は、そのまま私が調教を継続することになりました。結局伊式の理論をそのまま北飄に適応することは出来ませんでしたが、自然馬術の、いわゆる「無理、困難、束縛の排除」は、その後の飛越調教の際の指針となりました。

四月に入つてからは、まず国体あ北海道地区予選が、北大の馬場で行なわれました。最初の複合の調教審査では、人馬共に入り込んで実力を十分発揮できず振いませんでしたが、障害との合計で結局、北瓔に次いで二位となりました。六段は昨年と同様、お家芸としている畜大に完敗しました。次の中障害では北瓔、ブラントモア、碧雲、鳥華が満点で通過したので、この四頭でバラージュを行いました。その結果再び北瓔、鳥華が優勝し、北飄は、再度二位の憂目をみることになりました。

北海道地区からは五頭が派遣されるので、各種目の優勝馬は無条件に選ばれましたが、大障害には該当馬がなかつたので、代りに二種目に二位となつた北飄が選ばれ、結局北瓔、北飄、クモキ

り、鳥華、洋孝の五頭が、国体に送られることになりました。

ご承知のように北飄は狂奔癖を持つた馬で、不練れな人が乗るとよくひつかけられますが、これは入厩前の競馬の調教、騎手に対する不信、調教の欠陥による飛越に対する恐怖感など、色々原因が考えられますが、やはり馬の生来の性質によるものではないかと思います。

馬の沈静を求めることが、終始北飄の調教及び試合時の大きな課題でした。

ひつかける馬も、その時の体勢から大別して、頭を上げて空を向くものと、道に巻き込んで突つ走るものの二種類有ると思いますが、いづれにしても、このような状態では、馬は騎手の手の内にないのに変りありません。北飄の場合は前者に属しますが、銜をはずすのを防ぎ、又障害飛越における高い頭頸を防止する為にも、弊害の最も少いマルタンガールドシヤスを、三月からつけました。

一般に障害のレベルが高くなるにつれて、多くの馬は興奮して来ますが、北飄の場合も、しだいに歩度が伸びて銜に重り障害に向つて突進します。このように興奮した時、無造作に銜を控える事は、ますます馬の興奮を煽る結果となり、馬は渾身の力で騎手の拳に対抗してきます。前にも触れた北飄の前歴がこのような結果を導く一因となつたのは間違いありません。馬の心理は全く不可解で、口角にうける刺激に一種の快感を感じているのではないかという錯覚さえ感じます。

北飄を調教するに際し、当時は先づ馬との個人的親和を計り、何よりも馬の信頼を得たいと思つていましたので、このような場合も馬との葛藤を避け、馬が引つ張るだけ拳を許し、時には銜をはずして軽く頸に手を触れ、あるいは声を掛けながら沈静を待ちました。

五月からは国体を目指して本格的調教に入りましたが、そんな或る日、練習中に麻痺性筋色素尿症という病気を突発して、いささか胆を冷しました。これは文字通り筋肉の麻痺と痙攣を併い、筋色素を血中に遊離する為、筋肉の変性を起す病気で、栄養の良い為、特に炭水化物を豊含する飼料を多食する馬が、休息後労役に服する時、よく起す病気だそうです。蓄積されたグリコーゲンが運動により多量の乳酸に変化し、その為の乳酸中毒だろうと考えられていますが、明確な原因はわかつていません。この時は一週間の練習休止ですみましたが、十二月の学生自馬の時は、試合直前に発病し痛手を蒙むりました。

国体は六月七日から四日間、新潟で行われました。第一日は先ず総合の予選から始まりました。これは八十頭の出場馬を中障程度の障害で上位三十頭を選び翌日決勝を行うわけです。北飄は馬場が広い為、かなり早いスピードで走りましたが、安定した踏み切りをみせて無過失で通過し決勝に進みました。午後からの中障は、高さと経路は多少変りましたが午前とほとんど同じ障害物を使用したので、不安は有りませんでしたが、馬の方は逆に入り込んで来て、歩度の調節に手古摺り、結局第五障害のダブルで一落下し、減点四で六位に終りました。

場所が競馬場である為、昔を思い出したが、新潟に着いて以来日増しに入り込んで来て、特に競馬場の走路に出ると興奮の為、ほとんど扶助を判断できないような有様でした。この様な状態で

すから、総合の調教審査の結果は推して知るべしです。二日目午後のスチープルチエイスは、初めの方に発走した、優勝候補と目される川口氏、荒木氏などが次々に第五障害で失権してしまいました。この障害は、高さ約二米の所から水濠の中に飛び込むもので、ほとんどの馬はここ迄来ますが、その半数はこれを通過できず失権しました。単一の障害としては面白いものですが、コース全体の難度があまりに片寄り過ぎ、又主催県の策意が少々露骨に表われており、感心できませんでした。北飄もこれを通過できませんでした。　三日目の六段では、突進する馬を抑えきれず、三段目、四段目としだいに体が伸びて踏み切りが近づき過ぎ、遂に最後の六段目を落下してしまいました。

この試合を全般的に振り返つてみると、多くの失敗は、馬の沈静が欠けていたことに原因したと思われます。この点は三ヶ月後の九月に旭川で開かれた道大会において著しい進歩をみせました。

障害に向つて突進する所は相変らずですが、しかし以前のように馬のペースで走るのではなく、この試合では、完全に騎手の手の内に入つた運動が出来たと思つています。この為に却つて馬の運動を抑制し過ぎてか、少し落下が目立ち、六段で三位になつた程度で戦績の方は振いませんでしたが、鍋田先輩や岩坪氏の指導を得るなど、十分に収獲が有りました。

さてここで、最後の試合である学生自馬について報告します。この試合は毎年、国体、全日本と同時に行われていますが、今年はオリンピックの後、馬事公苑で行われました。

北飄はこの時、前にも触れたように後軀の麻痺を起し、歩行不能となつて道の真中で立往生するなど、一時は出場を諦めましたが、その後馬事公苑の千田先輩に治療していただくなどして、しだいに回服し、試合当日にはほとんど異常が見られなくなりました。　最初の調教審査は、昨年と同じ新国際規定で行われ、得点は七四・五だつたと思います。落ち着いた、かなり正確な馬場を踏みましたが、最後の停止点や駈歩の手前を間違えるなど、つまらないミスをしました。　野外騎乗は、全長五Km、分速五百米の駈歩が要求され、制限タイム十分に一分までの増点二十五が認められました。コースは既設の固定障害の外に新設のものを含め三十六個を配置したものですが、狭い所で五Kmも走るのですから、経路は迷宮にでも入るがごとく、複雑を極め、馬の能力テストの前に先ず騎手の知能テストをされるようなものでした。畜大などは三頭中二頭まで経路違反をするなど、迷宮に踏み迷つて失権する馬が相当数いました。北飄は回服したとはいえ、まだ十分の駈歩に耐え得るかどうか少し心配でしたが、十四障害までは全く不安のない飛越を続け、内心ニヤリとしていたところ、十五障害に至つて突然夢破られ、三度拒止をされて、遂にこれを通過することが出来ませんでした。この障害は深さ一米、幅一・五米の乾濠の上に、電柱を高さ一・二米程度の高さに三段山形に築いた固定障害で、飛越に失敗すれば只では済みそうにないもので、馬も多分ギョッとしたことでしょう。試合の数日後再びこの障害に向けてみましたが、四回目にやつと飛越することができました。結局これは国体の時と同様、固定障害に対する馴致不足が、一番大きな敗北の原因だつたと思います。今後の責任者はこの点について努力されることを期待しています。

北翔号について

高橋昭夫

(1) チビと一緒に二ヶ月

八月四日　三時出発

十月四日　四時帰部

文字通り正確に二ヶ月間、チビは主賓で、僕が付添つて鎌田先輩のところへ行つてきました。鎌田さんのところへ行つて来た報告をしますが、その前に、僕を付添として派遣してくれたことを部員の皆様に感謝します。馬術修行という点からも、また僕個人の問題としても、二ヶ月間鎌田牧場で過したことは、貴重な体験だと思つております。

また感謝すると同時にあやまらなくてはならないことがあります。僕にはチビの付添の役ともう一つ、馬術馬学に関する修得という重大な使命が課せられていたのですが、残念ながら、僕は、この使命をやり遂げたと言うことは絶対に出来ません。実際、僕は馬術部から派遣されたものとしては、技術、知識の吸収において、すこぶる怠漫生でした。馬術、馬学について学びとろうとする態度がもつともつと積極的であつたならば、非常に多くの収獲があり、部の発展に大きな貢献をすることができたかも知れません。

鎌田先輩から　一ヶ月間チビの調教を引受けてもよいとの手紙が来たのは七月末でした。部では早速この御好意にあまえることにしましたが、チビを連れて行く学校の車が都合つかず、出発が遅れていました。そうしているとき八月四日、鎌田さんが自から馬運車でむかえに来てくれました。

大あわてに用意をして三時に出発しました。国鉄の日高線のおしまいから二つ目の日高幌別からちよつと山の方へ入つたところにある鎌田牧場に着いたのは夜八時半頃でした。着いてすぐチビをおろしましたが、鎌田牧場には馬房の余裕がなく、ひとまずセントベル号を外に追い出し（放牧）てチビをベルの馬房でやすませました。次の日からは、隣りの本巣牧場の馬房を借りることになつていて　滞在中ずうつとチビは本巣牧場のやつかいになりました。

馬産地日高地方の厩舎は一般に立派ですが、チビがやつかいになつた厩舎は、なかでも立派なものでした。水はいつでも飲めるし、馬房の壁は格子になつていて通風はいいし、そして何よりもいいのは、チビつコなら三頭は入れる程の広さでした。そういう馬房に入れて、青草、乾草はいつでも好きなだけ喰えるように与えましたからチビにとつては天国だつたに違いありません。実際日高に行つてからだんだん飼付疲を減らし、一日にえん麦三升ぐらいにしていましたが、八月末にはもう丸々と太つてきました。（人の話しに依ると、太つたのはチビばかりではなく、札幌から行つた人間も飼付が非常にいいので太つたそうです。）　だが、チビにとつては日高は天国ではありませんでした。チビはアレルギー体質なのでしようか、たちまち皮膚病におかされてしまいました。しかもこの風土病の本拠地は日高です。札幌でも毎年軽くおかされますが、日高ではものすごくおかされました。尾の毛が全部脱けてしまうのではないかというくらいパゲが大きくなり、

たて髪にそつて首の毛も脱け、腹帯にそつて毛が脱けてきました。暇さえあれば、また餌を喰つてる最中にも、あちこちに体をすりつけているのでした。感心？したのは、頭には絶対手を触れさせもしないチビが、自分の後足で頭のてつぺんをゴシゴシやつてることでした。よくもあんな芸当ができるものだと、体の柔かさにも驚きましたが、こつけいというよりかわいそうでしようがありませんでした。後になつて鎌田さんから薬をもらつてぬつてやり、なんとかハゲも大きくならずにすみました。おもしろいことには、頭、顔に触れられることをガンコにいやがつたチビが、この皮膚病の手当をしてやるようになつてからは、いやがらなくなりました。（これこそ　馬が人間を信頼した証拠？）

次に　どんな練習をしたかを書きます。

練習は、数日間単位では規則的に行われましたが、二ヶ月間を見た場合、不規則に行われました。それは、鎌田さんが毎日非常に多忙であつたことと、この二ヶ月間には鎌田さんの出張やチビ自身の旭川遠征があつた為です。

今、ある日のことを書いてみます。朝五時半頃、鎌田さんはベルに乗り、僕はチビに乗つて出発します。どこへ出発するのかと言いますと、鎌田さんのところから四Kmぐらいのところにある、チビの生れ故郷の農林省日高牧場のグランドへ出かけるのです。四Km離れたところに行くのですから、それだけで一運動です。たいてい初め5分ぐらい常歩で行き、その後ずうつと速歩、駈歩で行きます。二〇分ぐらいでここに着きますが、これだけでは足りないとそこをそのまま駈歩で通り過ぎ一Kmぐらい行つてからまた駈歩でもどつてきます。結局、五Kmぐらいをワンサと歩度を伸ばすわけです。

日高牧場のグランドへ着いてからすぐ　鎌田さんは、ベルを調教します。五〇分ぐらい馬場をやつて後　すぐそのまま障害を一五分ぐらいやります。それが終つたらこんどはチビの番です。チビも同じように一時間ぐらい馬場をやり、その後一五分ぐらい障害をやります。

この運動内容を書きますと、まず初め三〇分ぐらい常歩調教です。とくに、行つて初めの頃は、常歩の時間が長く、主に「肩を内へ」を行いました。一週間ぐらいしてから、だんだん「腰を内へ」とか「横歩」なども行うようになりました。このように常歩で二蹄跡運動をガツチリ仕込みます。勿論、その間には伸張常歩もたつぷり入ります。常歩が終つたら次には　速歩で　常歩のときと全く同じ内容の運動を三〇分ぐらいします。その後に駈歩をちよつとやつて馬場の調教は終り、次に障害をやります。グランドには　高さ八〇cmぐらいのゴツいレンガ障害が一個あるきりですが、これを十五分ぐらい何回も跳ばせます。これで、調教は終り、また馬を乗りかえて、駈歩、速歩、常歩で帰るのです。以上が最も条件のよいときの練習内容ですが、こういう練習が出来たのは十日ぐらいのものです。すでに述べましたように　鎌田さんは非常に多忙なものですから、日高牧場まで出かける時間がないときは鎌田牧場の厩舎横のあき地で乗つたり、あるいは僕がチビで先に日高牧場へ出かけ、鎌田さんは後でオートバイで来て調教してくれました。また僕だけが乗るという日も度々でした。

こういう調子で、滞在は二ヶ月間でしたが、実際に鎌田さんが乗つたのは、ちようど半分の三〇日ぐらいでした。

ここで　ついでにチビが九月一二日の道大会複合に飛び入り参加して成績第一位を獲得したこともお知らせします。初めからチビは　障害飛越が安定しない為当分試合に出さないつもりで道大会にも参加申し込みしていませんでした。が日高に行って調教を受け、鎌田さんが試合に出して馴らした方が良いということで、ベルとチビを一緒に馬運車に乗せて　旭川の道大に出かけることになったのです。試合にはオープン参加ということにして、鎌田さんに乗っていただきました。馬場ではベルを御して最高点をあげましたが、問題は障害でした。部報の号外でその写真を御覧になったと思いますが、あのようなこっけいな飛び方をしてようやくゴールしました。　左に寄り、右に寄り、左に寄り、右に寄りしながら走りまわっているうちに目の前に障害があるからしようがない跳ぶかというような跳び方でした。競馬場の瀬川さんが写真とってやろうとカメラを向けてまちかまえていたんだそうですが、そのこっけいな姿を見てふき出してしまい、写真とることを忘れてゴールするまで笑いこけて見ていたという程です。ほんとに乗り手が鎌田さんだったからゴールしたと思います。チビとしても、ゴールしたのはこれが初めてです。

初めの予定では調教期間は一ヶ月ということでしたが、無理に延長してもらうことをお願いして、道大会が終ったあとベルと一緒に馬運車に乗せてまた日高に戻ったのです。それから、札幌からむかえの自動車が来るまで、チビは本巣さんのところに、僕は鎌田さんのところにまたずうっとやっかいになったわけです。そのむかえの自動車がなかなか来ないのでした。やっと十月四日になって来て、いよいよ札幌に帰るときは、やれやれという気持でした。そしてそのやれやれの中味は複雑でした。

(2)　チビは奮斗、　高橋はポコイ

一一月二二・二三日に東京の馬事公苑で行われました全日本学生自馬大会のことをお知らせします。題名を見てお笑いになると思います。僕も不本意なのですが、事実なのですからしかたありません。試合が終った後で早速誰かに言われたことを認めることにしました。

参加馬匹数は七八頭で、僕の出番は早く七番でした。二二日七時半から競技開始で、八時にはもう出番でした。まず馬場ですが、これはかたくなって馬を落ち着かせることができず失敗しました。見せ場であるべきはずの常歩、速歩の伸張で歩様が乱れてしまいこれはしまったと思いつつ前半の演技を終えました。第二馬場に行ってからの後半はなんとか落ち着いた演技をさせることができましたが、結局、減点八一点（一三八満点）に終りました。

野外騎乗は、歩行距離五、五Km、障害数三六個、規定時間一一分で五〇〇m／minの速さが要求されました。固定障害は、オリンピックの近代五種に使用したのだそうですがかなり大きなものでした。チビにしても、僕にしてもこんな大きなものを跳ぶのは初めてです。また、それより選手を困らせたのは、あの広くもないところを五。五Km走る為に同じところを何回も通ったりするややこしい径路でした。約半分の馬が野外騎乗で失権しましたが、多くは径路違反で失権したのでした。

さてチビは、調子よくスタートしました。第一障害、第二障害・・・何の心配もなくピョンピョン跳んでくれました。スピー

ドも、第一二障害までは、あの馬事公苑の走路につくつてありましたから、六〇〇m／minぐらいでつつ走りました。これは調子いいぞと思いながら、いい気になつて乗つていました。このいい気になつて乗つていたのがいけなかつたのです。比較的小さい第一四障害になつて、あまり調子よく跳んでくれていたものだから別に推進も必要あるまいなどと思つていたら、すかさず止つてしまいました。記録は拒否ですが、これが人間の責任に依る第一の失敗でした。この後またしばらく調子よく走つて行きましたが、第二〇から第二五にかけて、ボーとなつて完全に径路を忘れていました。馬を止めて考えてみたり、次に跳ぶべき障害をキョロキョロ探しまわつたりして大きな時間減点をくうことになつたのです。これが第二の、そして最大の失敗でした。大変なスローペースでしたが、なんとか忘れた部分を通過して、これからは挽回するぞと思いながら乗つていたのですが、一回大きなつまずきをすると、ダメなもので、それ以後ゴールするまで、今走つているのは正しい径路なのかと不安でしようがありませんでした。おしまいに近いヤブの中を通るときなどは、横を見、後を見して（なにしろ門柱一つでもはずれたら失格ですから）いいのかな？、いいのかな？、と思いつつ乗つていました。こんな調子でしたが、ゴールしたときは、ほんとにうれしかつた。大きく一九四点も減点されましたが、そのときはゴールしただけでもういいとうれしがつていました。（今はくやしくてしようがないのですが）

疲れたのは、人間の頭の中だけで、完走したチビはさすが日高で鍛えただけあつてそんなに疲れていませんでした。

翌日の余力審査には、全然故障なく元気で跳みました。

この日もチビは調子よく難なくゴールしました。難なくなかつたのは、やはり乗つている人間で、またもや径路を忘れかけもたもたしてしまい、反抗と時間減点をとられた為減点二四もとられてしまいました。

三種目総減点二九八点で二三位でした。人間さえしつかりしていれば、十位以内には確実、いや入賞も夢ではありませんでした。というようなわけで不本意ながら誰かさんに言われたことを認めるわけです。

(3) その後のチビの調子

これまでの調教方針は総合馬として完成させることでしたが、これからもこの方針に変りはありません。今、この方針の観点からチビを見て、まず馬場についていえば、大体いいところをいつていると思います。前からチビはいい歩様をすると定評があつたのですがいい歩様をするというだけで、よく手の内に入つているとはいえず、従つていい点数は出ませんでした。しかし、二ケ月間鎌田先輩にしぼられて馬術的に向上したのです。僕はまだまだ乗りこなすことは出来ませんが、東京遠征したときは、O・Eの志水さんが乗つて、二蹄跡までほとんど完全だねといつておられました。

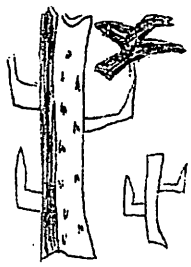
結論として、馬場は乗り手さえよければB馬場は勿論、総合の馬場まで完璧に運動できます。

問題は障碍です。これについて①どんな場所ででも落着いて跳ぶようしなくてはならない。②ある程度の技術があれば誰でも跳ぶようにしなくてはならない。この二つが目標です。

今のところこの二つとも達成されていません。日高での二ケ月間は障碍飛越の面でも飛躍的進歩を遂げましたが、この二つについてはまだまだです。日高で飛越能力が飛躍的に向上した原因を考えますと、道路をひんぱんに歩いたため自然馴致が成されたこと毎回障碍を飛ばせたため跳び方がうまくなったことがあげられます。そしてこのことが①②の問題を解決してくれる鍵だと思われます。

従つて、これからは馴致に時間をかけ、小さな障碍を何回も何回も跳ばせるつもりです。

僕のような者が名馬北翔号の責任者としてふさわしくありませんが、二、三年後の「総合馬として完成」への道であるこの時期をなんとか立派に務めたいと思います。先輩の方々の御指導を期待しております。



北晨号調教日誌

小栗紀彦

旧名、ミストヨサカエ、軽半血種、牝、昭和三十五年四月二十日生、父タカトシ（アングロアラブ）、母ニューラック（中半血種）栗毛。

昭和三十八年十月七日入厩、滝沢前主将の責任馬と決定。十二月四日北晨号と命名。滝沢兄国体遠征後より調教開始。まず衝に出る事を最初の課題としたそうです。三月、部馬として適当でないとの理由で北興号と交換、この北興号飛越馬として大成すると思われる体形をしていましたが、おしいかな前肢裂蹄のため破行。全治五ケ月との診断に、再び北晨号と交換。私は北飄号に乗りたいと思つていたので、六月に滝沢兄より引継ぐまでの彼女の事はこれ位しか覚えていません。

北晨号にはじめて騎乗したのは、三十九年二月二十六日、滝沢兄に乗せてもらつた時でした。当日の日記をみると「山村君と北晨号に乗せてもらう。一月より馬場姿勢を取つておらなかつたため、馬上で不安定であることはなはだし。（馬場姿勢を取るように言われた）北裼号に御て乗つていたためか、彼女の癖は雄大且歓らかく感じる。しかし、新馬故と思われるが、馬自身の平衡確立しておらず、左右にふらつく。脚を使えるだけ使つたが、全く衝に出ず・・・・」というわけで、彼女の印象は私の技術不足にもかかわらず、たいへんよいものでした。

五月十九日調教助手となりはじめての騎乗、日記の抜粋ばかりで申し訳ありませんが「北晨号の責任者とされるのではなかろうか」北鋼号につきたかったので、非常に心配している。二日目「昨日より試れたせいか、うまく衝を引いてくれる。樹木をまたぐ時には好ましく思われる状態を示す。首を伸し、耳を立て、注意深く足を高く上げて、総合馬を目指すなり。飛越馬を目指すとしても、馴致を充分行ない、イタリー方式を採用し、急がず、あせらず、着実に調教を行なえば、大成まちがいなしと思われ、数年後の我を支える馬となるのではないか。ライラックの芳香まさにこぼれんとす・・・・」

六月より調教日誌をつけ始めたのでそれに従うと「総て馬術の成果というものは細心の注意の累積の結晶なり。」馬に接している時は常に前述の文句を頭の中に浮べておくことにする。調教日誌の二項目「昨日の講義中。競技会で活躍をしなくとも、それに匹敵する、いやそれ以上の価値ある事があるのではなかろうか。北鋼号よりも、新馬である北晨号を真剣に作るべきではなかろうか。学生時代に新馬に乗れるとは恵まれ過ぎている。・・・・」

先づ馴致というので、競馬場を中心に歩きまわる。ニンジン、声、愛撫を充分使い、彼女の勇気を大いにほめて、手当り次第に見せ、通過させた。いつもうまくはいかない。幾度も幾度も頭に来る事あつた。その度に競技会でお礼されるぞ。冷静に、彼女は赤ん坊をくりかえし、頭を冷した。この間頸による、頭頸の低下を並行させつつ。二週間目頃から五十cm位の障碍を通過。この頃は脚を使つてもあまり出ず、左右にふれ、よく後肢でつまづき脚に反抗していた。しかし、馴致の方はうまくいつているらしく六月二十日の日誌には「着々と進む馴致、地味で面白くないと書いてあつたが、どうして、どうして。非常に興味ある作業である」

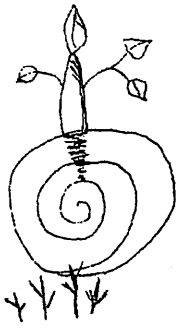
七月一日滝沢主将より、完全に任かされる。馴致と、常歩での歩度増減、停止、後退、五十ー六十cmの低障碍の速歩飛越をくりかえす。七帝遠征のため、河合君にたのむ。

八月、九月、十月は馴致、歩度増減、停止、後退、旋回、徐々の低障碍（五十ー八十cm固定高さ八十幅百を含む）の速歩通過をくりかえす。拒否ー推進不足と、程度の急進と（高さ百cm幅八十cmのカマボコに向う）、虚天とが重なり、この最悪の状態を呈す。それまで拒止の経験がなかつたので、あわてて向け直し三度拒止、程度を下げて飛越はしたものの、人間の方が自信をなくし、以後下が悪い日は飛越をさける。拒止をおそれて障碍直前で特に強く脚を使うようにしたためか、障碍前で自分からつつかかつて行くようになる。突進癖がつくのではないかと心配し、程度を下げてやり直したので、最近はずいぶんよくなりました。

十一月八日、札幌地区馬術大会、小障碍飛越競技に出場、登録をまわるのははじめてである。それまで二、三個を続けてとんだことはあつたが。貸与馬競技に出場するつもりで行けとの注意を思い出す。落下はまだ許せるが、拒止、逃避は死んでも許せぬ。速歩で入場、左輪乗に入り駈歩に発進、第一障碍に向う。八個の障碍（高さ八十ー百、幅〇ー八十ウサギ飛一個を含む。）その誘導距離が充分にあつたため、無理をした感じであつた。調教が進んでも、競技会というものは馬の調教程度よりも高い要求をするものであるかもしれない。と、柏車の車にむしり取られた愛馬の毛をはずしながら、三十数秒間を思い起した。

それまで自分に自信がなかつたせいもあるが、天気や馬場の状態が悪い時は飛越を避けていたが、全天候競技馬にしておかないといけないと思い、程度をさげて、そういう日にも普段と変りなく乗ることにする。駈歩の直進中の平衡はだいぶよくなつたが、輪線上の平衡がまだあまりよくない事に気付き、輪乗りをふやす。今年になり、八十ー九十cmの単一を速歩、駈歩でどんどん飛越する。幅のある障碍の飛越が階無に近い状態だが、これはまずい。大いに幅を取入れるべし。現在左右どちらも軟らかく、強いていえば左が右よりも軟らかくない程度であり、速歩、駈歩中の平衡もだいぶよくなり、障碍に突進することもなく、脚にずい分従順になつた。しかし拍車にはまだ反抗する。歩度の伸縮もよくなつたが、歩度減却の際だいぶ軽くなつたというものの、まだ相当に重る。

今後、根気よく現在の欠点を矯正し、連続した径路をまわる事により飛越直後の衝からの逃避をなおし、障碍の程度を徐々に上げ、馴致をおろそかにせず、書物を読み、研究を重ね、先輩諸兄の忠告に従い、大障碍馬を目標として、一歩一歩進むつもりです。



北彗号調教について

加藤孝志

新馬北彗号調教について記す前にその入廐経過を述べたいと思います、

先輩諸兄御承知のごとく、二、三年来特に我部における繁養馬の老化が目立ち、各自馬試合及び練習にさえも支障をきたす状態でありました。従つて私たち現部員に限らず、半沢部長、国田監督又各先輩もが望まれておりました老令馬と新馬の入れ変えが実行されてまいりました。これが従来部の代表馬であり、私達現部員も親しんでまいりました、北嶺号、北翠号の離廐に変わる北瑞号を始めとします北瓔号、北晨号の入廐でありました。さらに昨年北榆号の函館乗馬倶楽部移籍が太泰先生及び半沢部長、佐合氏等の御協力により決定しましたので、もう一頭の新馬購入が望まれた訳であります。

昨年六月末、現在札幌乗馬倶楽部に所属されております岩坪氏から紹介されておりました道営馬の四才馬を、前主将滝沢氏及び市川氏、田中氏等と見ることになり、売手の都合にもより急ではありましたが、その場で新馬購入を決定した訳であります。但し丁度学内では数年来難航致しております我部の学生部移管問題にからんで、北瓔号、北晨号の人籍が困難な折ではありましたので、この突然の購入は半沢部長、佐合氏に多大な御迷惑をお懸けすることになりましたことに、今、誌上ではありますが改めて感謝致

したいと思います。

又右の事情から二月にも及ぶ間、札幌乗馬倶楽部にも大変御世話になつた次第であります。なお、この新馬北彗号は前名長風（ナカカゼ）、牡、四才（現在五才）、栗毛、サラ中半血種、星後肢二長白、の特徴を持つ馬で、馬格は大きい方とは言えず、体高は一五八cm程であります。たて髪は少々白く、濃い栗毛に映えて美しい馬です。ただ一つの難点は牡ですので、牝馬の多い我部では少々煩さく、新部員の取り扱いも考えて、獣医学部の都合のつき次第去勢手術をする考えであります。

もう一つ記しておかなければならないことは購入後ではありますが、装蹄師の梶川氏の御注意によりますと、後肢二本ともに、肢節軟種の徴候が見られるとのことであります。今後の調教過程に於て留意すべきであると思つております。

さて、実際の調教につきましては、七月末以後小栗新主将、滝沢八木両兄等の間で数回にわたる相談の後、その目標を綜合馬とするとして、八木兄及び私とが主に行つてきました。

馬体はいまだ四才であるので充実しておらず、騎乗しての運歩に平衡がなく、本調教をただちに行うことの無理が感じられました。

従つて基礎体力の養成を最初の目的とし、又合わせて野外での馴致をも兼ねて、主として常歩及び速歩による野外騎乗を行なつて来ました。これは七月から、二月現在まで、行つて来ていることであります。この体力充実養成を主とした期間により、その他の調教に使用する時間は自然縮少を余儀なくされた訳でありますが、Barnekow『障害飛越馬の調教』の中に記されてありました、障害飛越馬以前の強健調教法の初段階にもあたるものと思つて有益であると思つております。

以上の調教と同時に障害飛越訓練も行ないかつ、極く初歩的でありますが、馬場馬術的扶助調教も行い、現在わずかながら双方とも成果が見える状態にあると思われます。この二つの調教の大体の経過を述べますと、障害飛越に関しては、八木兄自身も行い又私も行つたのですが、調馬索による飛越訓練より開始しました。速歩、駈歩から、安定した飛び方を見せ、又落ちついて障害物をよく見て飛ぶ飛越馬として良好な状態を示したと思えます。但しこの調馬索による作業はこの作業の困難さからその後の進歩が思わしくなく、騎乗飛越訓練を主とすることにしました。現在迄に低障害と言えるもの、即ち高さ五〇ー七〇cm、幅五〇cm程までは、ほぼ安定した姿勢を保持し、障害前でよく見て、頸を充分進展して良好な状態で飛越します。又障害物に向かつては充分な前進気勢を持つて進みます。ただ一つ気になることは方向転換の際、側体扶助をまだ充分理解出来ず、急激に回転せんとすることです。充分気をつけなくてはならぬ事だと思います。

これは所謂馬場馬術的扶助調教との関係に少々無理があつたせいに思われます。

次に扶助調教について記してみたいと思います。八木兄が騎乗飛越訓練を始めると、併行して行い始めたのであります。最初は、少々大きめな巻乗りでの常歩、運動も側体の固さから難かしかつたのですが、困難をともなわずに行える様になりました。現在未だ充分とは言えませんが、前進及び停止（常歩からの）、常歩からの速歩の発進、伸長速常からの自然な駈歩の発進、等が出来

るようになり、内方姿勢は左右ともに、内方脚の使用に反応すると同時に行うようになつて来ました。
但し、いまだ乗り手の手脚に充分従順であるとは言えません。とくに右は少々固く、前にあげました難点とともに留意せねばならぬ一つであります。
駈歩に於ては大体良好に思えます。その歩調は沈静しており、脚の推進、挙の抑制にも充分答えてくる様です。

以上現在までの調教を記してみましたが、調教知識又は技量の未熟さから、この馬のもつている素質を充分ひき出せず、又調教の遅れ、さらには過誤さえ見うけられる点もあると思います。
岡田監督始め諸先輩の御指導をお願い致します。
以下は今後一年間の大体の調教予定を記してこの報告を終りたいと思います。

八木正巳兄の指示に従がい一月より四月上旬までは、前述の基礎体力増進のさらに向上を目指し持久力訓練を行う予定、現在これに基づいて実行しております。
常歩不斉地騎乗による筋力訓練又は駈歩の持続による肺心訓練を主とするものです。
この期間を終えて、馬場での騎乗も可能になり次第、さらに障害飛越訓練と、馬場馬術的扶助調教の今まで以上の程度を併行して実行するつもりでおります。
又札幌地区自馬大会は調教進度を見る意味で充分可能な種目にそのつど馬の状態を見て参加するつもりでおります。

北凉号調教経過、今後の方針

黒沢道雄

昨年八月末より、九月中旬に行われた道大会を目指して、乗り始めたわけだが、最初のうちは、手の内に入られず、障碍に向ければ、ひつかけられて、乗り手の技術の未熟さを、どうすることもできず、結局、道大会では、一つの障碍も飛越できずという、全くもつて惨めな結果に終つた。学部の試験を終え、気をとりなおして、再び乗りだしたが、自然馬術方式を取り入れ、前傾姿勢をとり、落着いて障碍をきらうことなく飛ぶことを、目標にして低い障碍を数多く飛ばせ、口向きをよくするために、常歩を多くとりいれ、巻き乗り、常歩、速歩よりの停止をくり返し行つた。この間、大勒の使用を止め、水勒に切りかえた。この結果、馬が首を伸ばし、大勒の時のようにまきこんでハミにひつかかつてくる様なことはなくなり、馬の負担も軽くなり、いわゆる"感じ"がよくなつた。かつ、口のかたさを柔らげるべく随時、肩を内への運動を行つたが（これは自然馬術方式と矛盾することであるが、以前の調教が、非自然馬術方式である故、全面的に自然馬術方式をとり入れることは、不可であることを鑑みて、無論、停止、輪乗り、回転のとき脚は使う。）乗り手の技術の未熟さ、水勒を使用という点から、馬に逃げることを教えていることになり、害あつて益将なしとみて、中途で止めることにした。停止、輪乗りを多くとり入れ、障碍をきらわず進んで飛ぶようにすれば、解決策

が見出し得ると考え、低い障碍を落着いた歩度でもつて飛越させることに努めた。練習時では、落着いた運動、飛越をするようになつたが、試合ともなると興奮してしまい、頭を上げ、腰を下げて障碍をきらい、右の口のかたさに力負けしてしまう。競馬上りの関係上、試合の雰囲気となると、興奮するのは止むを得ないことであるから、乗り手が完全に制御し得る技術の向上を計らねばならないと感じている。（くせをおぼえている馬に乗るということを考えて）しかし、六段のように、一直線上の障碍に関しては、馬と口向きでけんかすることがないので、乗り手が遅れさえしなければ十分やれると思う。結局、北涼号は、毎日の練習において常に落着いた乗り手の手の内に入つた運動をさせ、低い障碍を飛ばせ、障碍に対する恐怖感をなくさせ進んで飛越するように努め、試合において騎手が馬にくせを出させない技術の向上を計ることが必要と思う。今後の方針としては、いままで述べたごとく、低い障碍を落着いた歩度で数多く飛ばせ、輪乗り、停止を多く入れ、常に乗り手の手の内に入れた運動をさせることである。そして時間の許す限り馬場の外に出て、馴致させることに努める。そして今秋の学生自馬大会の出場権を得るべく、四月より馬場の運動（無理な運動はやらず、自馬大の調教審査の形を正確に描く程度を目標とする。）もとり入れてやる。馬場運動は二義的なものであくまでも、障碍飛越馬としての能力を引き出すべく障碍飛越の訓練、馴致を行うことを主とする方針である。

北瓔号その後

八木正己

北瓔号が今度使用不能のような状態になりましたので、その経面をお借りして一記りその報告をさせていただきます。

北瓔号は昨年七月の故障がいつまでも全快しなかつたので、昨年の十一月学生自馬大会の終つた後で、診療所に連れてゆき、レントゲンフイルムで調べたところ、患部（右後肢球節上）の骨が後方に腫れておりそれが腱に当るため、運動するとすぐ熱を持ち外見上も腫れ破行することがはつきり致しました。治すことは、手術をしても九十%失敗するとのことで、不可能ということです。この故障は七月二十日頃と憶えていますが、他馬に右後肢球節上部等数ケ所ケラレタもので、骨と腱の部分でしたのでこれはまずいと獣医に診てもらいましたが、傷口が破裂しているし大丈夫たろうということで、安心していたわけですが、レントゲンの結果、その時骨にヒビが入つていたそうです。

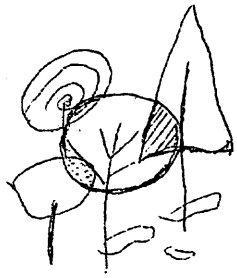
この馬は、前両ヒザが弱く（特に打撲に）、競技で勝つためには、その整調が非常にむづかしく、一m以上の障害径路になるとよほど強い推進と刺激が必要でした。

昨年四月の国体予選で勝つことはできましたが、、正直云つて、あの後続けて競技に参加しても好成績を望むのは無理でした。（個人所有でしたら別でしようが）、特に乗り手が未熟でしたから尚更でした。しかし、この馬は前の北瓔（旧シラカワ）と

似た感じで、割りと大きく、やわらかく歩を運ぶし、一応総合馬場はこなせるようになっていましたので、また障害飛越も体勢が良好でしたので、初心者、下級生の練習には有能だったと思っております。　新馬の多い折から競技馬の不足している時期に、曲りなりにも使えた馬がだめになったことは痛かったと思います。

前号で紹介しましたようにこの馬の調教は最初から私が行いましたが、少々あせり気味の、性急な調教でしたので、廃馬の原因は別でも、それ以前の馬体管理は故障ばかり起し、不充分だったと反省しています。今度の件もこの事が影響していないとは云えない様に思え、全く痛切に責任を感じております。しかし、責任を感じてばかりいてもしようがないので、微力ではありますが、今後も新馬調教には大いに協力したいと思っておりますので、現役の方は今後良い馬をどんどん輩出させる様、ファイトを燃して下さい。

以上、北瑛号入厩以来満二年を経ずして廃馬という事実を報告させていただき、同時に北瑛号の調教者として、部員及び、先輩諸兄姉の皆様にお詫び致します。



暮しの中の小休止

画廊
喫茶　タ　マ　キ

北３西３　　25－3378
Tel
北18西4　　71－9956

T君への手紙

鎌田正人

本来ならスチープルチエイスとかクロスカントリイ（Cross Country）とかに於ては径路を間違う等と言う事は起り得ない事なのですが、日本では同じ所をぐるぐる廻るから何処へ行つたら良いか分らなくなる事がままある訳です。しかし競技者としては充分その径路を歩いて、その道筋に何があるか迄充分知つて居くのが常識で（私も何回もの苦い経験があります。）競技の前日は何かと多忙のものですが、必ずやらねばならぬ作業の一つです。　自馬競技で拒止されるのは私の経験では殆んど小さな障害で止められている事は幾ら理想的に調教されて居つても馬としてはいやいやながらか、たいしていやとも思わない位の違いか、人が何もせぬのに飛越するという事はあり得ない事なのです。特に競技に始めての馬だつたら尚更です。馬に乗つたら休む以外は推進というのが馬術の本来の姿です。馬場馬術では馬が鎮静しなかつた様子ですが、競技場で馬を落着かせるという事は、疑ら上達しても常に第一の課題です。落着かせるのに一番大事な事は騎手が無用の力を加えず、単純な扶助で御すことで、その為には騎手が冷静である事が第一の要件です。特にチビの如く敏感な馬は尚更で今後も重要な調教馴致の課題です。これからは冬で充分な運動は出来ぬでしようが、深い雪の中を走つて（これは鉄を打たずはだしの方がケガがなくて良い）馬の筋力をつける事も一つの方法でしようし、道路上でも肩を内へは出来ますし、道路騎乗で色んなものに馴致する事も大事です。特ににぎやかな所を乗つてはあぶないから索いても良いから色んな所を馬に見せるのも或る程度大事ですし、索馬は人馬の調、親和を強くするのにも非常に力があります。次に自馬競技の方針とイタリー式についてですが、幾度も言つて居る様に現在は誰がやつても障碍馬を作るのにイタリー式を幾分なりとも取り入れぬ人は少いという事ですが、どうも現在、馬術部の方々の考えて居る事は、イタリー式を一面的にのみ見て、御術との関連をイタリー式の内部で解決して行こうとしています。イタリー式とは障碍馬を作るに当つてその最大の力を発揮させる方法論の一つであつて御術とは関係のない事なのです。そこで現在の馬術部に一番必要なのは、御術という事を充分研究され、基本的な騎座、拳、脚を作つて、その上に立つてイタリー式が論議されねばならぬという事です。どうもうまく表現出来ませんが御術の基本が非常にゆがめられた形で現れている様に思われますので、良く皆で研究してみて下さい。過の失敗については以外の結果であつた様ですが、結局は扶助に対する従順さと馴致の不足から来たものでしよう。長距離とか、そんなものは五・五km位で大いに問題にはなりません。従順さという事は無理な要求をしないという事も一つですが、要求したらそれに対して、騎手の命令に対して絶対に服従させる。反抗させない。人馬の闘争（出来れば闘争しないで進歩させるのが良いが）が一度起きた時は必ずそれを打破する技能をもつことが又一つ大事なことです。そして反抗心を起こさせない様な要求をする。これは又反抗を粉砕するよりもより大事な事です。この両者のバランスを上

手に用いて全ての騎手は馬を進歩へと導くことが出来るでしょう。

北海道大学馬術部後援会の発足について

昨年十二月、正式に発足しました後援会について、部報誌上をかりて、御協力下さった皆様方へ御礼申しあげると共に、現在の状況を御報らせして更に一層の御協力を願いたいと思います。

既に度々御報らせしております様に、馬術部の財政は、部費、体育会からの収入、更には職員団体である同好会からの援助を主財源としておりますが、農場の諸事情の変化に併い農場からの援助が年々減少し、他方部の活動の益々盛んになって来た上に新馬の購入時期に当り、財政的に非常な支障を来たしつつあります。その穴うめが部員によるアルバイトや度々の奉加帳による寄附廻りとなっていたわけです。その為必然的に札幌近辺の方や東京OB会の方に過重な負担をおかけすることになり、又、その額にも限度があり計画もたてにくい状況でありました。

そこで今迄にも計画されてはその都度開店休業化し、組織的に後援の体制のとれていたのは東京OB会のみであった点を改め、この際OB以外の方にも広く御協力を御願いし、しっかりした運営体制を確立しようとしたのが、この会の発足への経過でもあり、趣旨、目的でもあります。

昨年十月以来、半沢道郎、西村雅吉、岡田光夫、佐合義弘、斉藤善一、荒川　清、生田勝一、粟津健太郎、小山　毅、市川瑞彦、三浦清一郎、が発起人となり、東京OB会など多数の方の御協力の下に、昨年十二月十七日の札幌での発会式に至った次第であります。

十一月初旬以来順次趣意書を御送りしました結果、発会式当時迄に、一七〇名の方に御願いし、一二〇名弱の方から御賛同の旨の連絡を受けました。発会式に御集りいただきました札幌近辺の方以外には、幹事の時間的制約や怠慢からその後何も連絡しておりませんでしたので、おわびと共に、発会式当日の模様、今後の予定などを述べさせていただきます。

当日は半沢現部長らOBはじめ月寒連隊で活躍されていた染谷王郎氏、同好会の方など二〇数名、現役を含め三〇名の者で、往時をしのんだり、馬術部の一層の発展を望んで大変に楽しい会でした。

当日遠方の為御集まり願えなかった方の御意見や御気持を含んだ上で、会則は原案どおりとし、当日より発足、会費は本年度分より納めることなどがきまり、役員については現在未定でありますが、乾事の方は会運営の便宜上次のとおり決定いたしましたので、御了承願いたいと思います。

幹事長　岡田光夫

東京地区幹事　森本梯次　志水一充

京阪神　〃　恩田正臣　小島　武

中京　〃　宮崎　健

札幌　〃　小山　毅　市川瑞彦　寺江則子　田村雅英

三浦清一郎

今後は札幌地区の幹事が他地区の幹事と連絡をとりつつ、皆様

の御協力を得て会を運営していくことになりますが、とりあえず四月迄には次のことを行いたいと思います。

第一には、OBの方で未だ連絡のついていない方々への御連絡更に特別会員については未だ殆んど手をつけていない現状ですので、両者を含めて広く会の趣旨に御賛同を願いたいことです。これには幹事だけでは及ばないことも多々あるかと思いますので、皆様の一層の御協力を御願いする次第です。第二に住所録を作成し、できれば会報を発行し四月からの運営を準備することです。

集められた会費については、運営費以外は現役諸君の計画的な使用に一切任せたいと思いますが、現在のところ、新馬購入に備えると言っております。

以上が、新たに発足しました後援会のあらましでございます。皆様の一層の御理解御協力を得まして、幹事一同、現役諸君と共に、北大馬術部の一層の発展に寄与したいと願っておりますので、どうぞよろしく、誌上をかりて御願いする次第です。

（六五・一一・八　文責ー小山　毅）

（付）

北海道大学馬術部後援会会則

第一条　本会は北海道大学馬術部後援会と称する。

第二条　本会の事務所を北海道大学馬術部内におく。

第三条　本会は北海道大学馬術部の後援を目的とする。

第四条　本会は前条の目的、並びに会員相互の親睦にそった事業を行う。

第五条　本会は次の会員を以て組織する。

一、正会員　北大乗馬会並びに北海道大学馬術部に籍をおいた者。

一、特別会員　第三条の目的に賛同する個人または団体

第六条　本会に次の役員をおく。役員は総会において選出する。

一、名誉会長一名

一、会長一名

一、副会長若干名

一、参与若干名

第七条　本会の事務を行うために、幹事長一名並びに幹事若干名をおく。幹事は会長が各地区毎に若干名依嘱し、幹事長は幹事の互選による。

第八条　本会に次の機関をおく。

一、総会　少くとも年一回以上開く。

一、幹事会　会長。幹事長並びに幹事を以て組織する。

第九条　役員の任期は一年とし、留任、重任を防げない。

第十条　本会の経費は年会費。寄附金並びに雑収入を以てこれに充てる。

第十一条　本会の年会費は次のとおりとする。

一、個人　一、〇〇〇円

一、団体　一、〇〇〇円以上任意

第十二条　本会の会計年度は四月一日より三月三十一日迄とする。

附　則

本会則は昭和三十九年十二月十七日より発足する。

会　計　報　告

収入の部		備考
前期繰越	12,857	
部費	118,400	
寄附	38,149	七帝戦、女子戦
バイト	303,340	競馬場、ダンバ農場
OB会	58,600	
学馬運より	37,600	学生自馬大の援助として
体育会	20,000	
学生部	15,000	
北極代として	25,000	
借入金	60,000	
計	688,346	

支出の部		備考
備品、雑費	81,330	
薬品	19,645	
通信費	24,229	
馬具	12,043	
遠征費	218,600	七帝、王決予選 岩手遠征
貨車積代	119,811	道大会、自馬大会
新馬購入代	130,000	北彗号
部報（定期、号外）	48,800	
装蹄代	30,650	
計	685,158	
残高	3,188	

三十八年十二月より三十九年十二月までの会計報告を別表の通り致します。財政的には昨年度と同じくいうよりもより緊迫した状態が続いています。

まず収入面より

年約六〇万円の支出を支える収入が、半分は部員のバイトでまかなわれており、この状態をなんとか改めたいと思っていますが学校側からの援助は三五、〇〇〇位で増加することも難しく、もつぱら現在の額を減らさないように努力する以外方法はないようです。その為残りの約二〇万程は部費とOB会の援助に頼らねばならない状態ですが、今年度発足しました後援会より定期的に一定の金額が部に入ることになり多少とも余裕をもつた会計が出来るものと期待しております。

次に支出面について

今年度も新馬（北彗旧ナカカゼ）の購入費十三万円があとまで尾を引き、現在借入金六万円でどうにか部の運営を行つているという現状です。これが恒久化することは絶対避けなければならないことだと思います。遠征費の会計三〇万もかなりの額ですが、自馬中心の方針を通していく関係上これ以上の金額は必要かと思われます。それに装蹄代というのが新しくありますが、これは農場の支払い状態が悪く鉄屋から現金と引換えでないと打たないといわれた結果、一時立替の形で支出になつているものです。これが今までにないことですので、支出面に大きく響いています。

昨年八月に農場の方からエンバク屋、鉄屋等にまで学校側からの当然の援助かと考えていたものが出し渋られるようになり、その交渉に当つています。この事についてはマネージャー部から報

告のようなものがあるかと思います。品物を注文しても支払いがあるのか分らない状態ではエンバク屋の方でも売りしぶりますし、部員の方でもいきにくいという事が続き部の運営にも支障をきたすことになります。

又、以前大きな収入源であつたダンスパーテイーが中島スポーツセンターの使用禁止に伴い、これに相当する会場が見当らず、中央寺ホールで行う場合四万程度しか純益が見込めず新らたにバイトの開拓に努めなくてはならぬ状態においこまれています。現在部員が四五名程で部費が最高に集つたとして月一万二千円程度（実際には七、八千円ほどしか集りません）ですのでどうしてもバイト寄附に頼らざるを得ない状態ですが、バイトも我々学生としては大きなこともできませんし、部員の消耗度を考え、以前のセールスマン的要素を含んだダンスパーテイー、映画会に変るバイトを捜す必要があるでしよう。作業主任からでている電通、時事通信の調査のバイトなどは時間的にみて適当なバイトかと思います。又、新馬購入等の大口の支出も要する場合は、先を見通して慎重にやるべきであると思います。最后に部員諸兄の協力をお願いして会計報告を終ります。（責　片寄、黒沢）

マネージングあれこれ

近藤　喜十郎

馬術部の仕事の中でマネージャー関係が一番忙がしいし、仕事が多いと云える。この部門が怠慢すればそれたちどころに部全体に影響する。我々はそういう面を考えて一糸乱れぬチームワークとはつきりした仕事の分担を前提にしてマネージャー部を組織した。五人を次の様に分けた。外渉関係（馬運、道乗馬運など）―八木沢、学内関係（本部、農場、学生部、農学部）―近藤、先輩関係（後援会）―井上(2)、会計と学内のサブ―田中、その他のサブ―加藤(1)。そしてダンスパーテイーや映画会は全員であたる事にした。原則として週一回必ず会議を開きその間に意見の食いちがいがない様にした。マネージャーを引きついだ時、未解決の問題が山積していた借金、バイト、会計決算など。ともかく一つ一つ片付けてゆくことに全力をあげることとした。九月、千葉先輩が五輪選手に選ばれた事を記念して「部報」号外を出すことを考え、丁度競馬場のアルバイが順調に進んでいたのでその金を少しまわす事とし発行する事にした。原稿も予定通り集り、記録大谷君の奮闘により何とかオリンピックが始まる前に発行出来た。その間学内関係では農場との交渉が続けられ、鉄代がやつと十月に半分おりた。十月は北檢の離廐で佐合さんが努力して下さり、部に二万五千円のお金を入れる事が出来た。十一月、学生自馬大会の遠征資金があちこちまわつてやつと片道しか出来ず、困惑した。従来ならば先輩の寄附があるが今年は奉加帳一切まかりならぬのOBからのおたつしで全部部で作らねばならなかつた。マネージャー部も今迄遠征といえば全く放任状態であつた金の使い方をなくすために、すべて金に関してはマネージャーがタッチし、援助金も一人往復汽車賃と宿泊費のみとした。この原則をつらぬくことが出来たのは今後の部の会計面にとつてよかつたと思つている。帰路の貨車代は全くなく、東京OB会にすがろうかとさえ

思つたが学馬連との交渉でなんとか四万近くの金を出させ、帯広といつしよにつんでくることで解決した。十二月末より借金返済の為のダンスパーティー開催準備に動き出した。折からの不景気で広告がほとんど取れず、困つたがなんとか二つとることが出来た。一月はダンスパーティーの実行の為忙がしかつたが、部報発行準備や新年会などのために働らいた。二月、ダンスパーティーはなんとか予定通りの収益で終わる事が出来た。試験が非常に近く部員はパー券を売るのに消耗したらしい。もはやダンスも終わりで今後新らしい収入源を求めねばならない。

（学生部移管問題について）

これは今後のマネージャーが行う仕事の中で非常に大きな問題のひとつである。学校内の事務機構、学生部の状態を知るためには少なくとも一年はかかると思う。就任以来、半沢先生、佐合さんの助けをお借りしてとにかく機会あるごとに関係者と接触する様努力してきた。また一方馬術部の現状を知るためにいろいろの資料を集めた。やり出してみると部には全くはつきりした資料がないことがわかり、とにかくすべて作らねばならなかつた。たとえば一年間に必要な飼料の量、鉄代。この実数を出すために渡部商店へ行き、鉄屋にもかよつた。それに現在まで馬術部には予算というものが全くなく、それに一年間のはつきりした決算もなかつた。その為、三十七年度より過去三年間の会計報告にもとずき決算表を作成し、それを基にしてなんとか予算をたてることが出来た。この他に活動状況と馬の繁養頭数について説明し「馬術部白書」を作成した。この白書を学生部、本部に提出し、又直接関係者と会い交渉するつもりである。この仕事は時間と忍耐が必要である。一度失敗したからとてそれで止めてしまうことは出来ない。ともかく今迄学生部移管問題にいろいろ動いていた様に思われるがその実績が残つていない為に全く零からの出発であつた。

今後のマネージャの仕事は上記の学生部移管問題と北日本学馬連の設立、新しい収入源、といろいろ仕事はあるが、現在、部一番の仕事ぶりとチームワークでこれらの難問にあたつてゆくつもりである。

金銭面では在札OBの方々が後援会の事で精力的に動いて下さり、来年度の会計は非常に楽になると思う。我々は後援会の発展の為に全力をあげて協力するつもりである。

飼育係から

高橋・昭夫

最近の飼料寝わらなどのやりくりの状況を報告します。

飼育方法は今も前と同じく、えん麦を主に麩、糠を切り乾草とまぜあわせてやつております。また、この三度の飼付以外に乾草を十分に与えるよう心がけています。

さて問題はこういう飼料を十分に与えることができないのではないかとハラハラさせる事態がときどき起ることです。幸い、今までのところ、半沢先生、マネジャーの方々に、苦労をおかけしてなんとかきりぬけてきました。

「オーイ、飼育係よ、糠がないぞ、えん麦もなくなりそうだぞ：

……」と、当番の人に言われ、飼育係はかけにくい、催促の電話を渡部商店にします。事情はマネジャーの人からよく聞いているので、それこそ低姿勢で話します。渡部商店では、「学生さんに文句言ったってしようがないですけどね……なにしろ……」と、長々と話した末にやっと「持ってゆきます。そちらでもせいぜいついて下さいよ。」と言ってくれます。馬匹関係のことのみを考えればよい飼育係は、受話器を置いてほっとします。

（これから非常に消耗するのは半沢先生、マネジャーですが）

去年の部報に、片寄君が書いていたようにこのような事態は今始まったことではありません。農場からの現物援助がだんだん少くなって今年度はえん麦五十俵だけでした。来年度は全然くれないかと思います。

さらに問題が深刻になっています。

次に、乾草、寝ワラなどの援助を受けたことをお知らせします。

松本さんの牧場から乾草トラック一台、小野さんから寝ワラトラック一台、鎌田先輩から梱包した乾草百個をいただきました。このように援助していただきまして、とくに前に述べましたような状況にある部としては感謝感激です。

松本さん、小野さん、鎌田先輩に厚くお礼申し上げます。

作業について

作業主任　高野文彰

○作業に対する考え方

部生活を送るにおいて、大切なことは、部という機構の下で、上級生の下で働かされているという考えを持たず、自分達が部をうごかしていると、はっきり認識することであろう。したがって作業もわりあてられたからやるのではなく馬の生活環境をよりよい状態におくため自分が行う・やらせられているのではなく自分がやっているという主体性を持つことである。そうすれば当然、サボリや遅刻等のことは起こらぬはずであるし、又たとえ規則でがんじがらめにしばってやらせてみたところでサボル奴はろくに仕事はしていまいと思う。

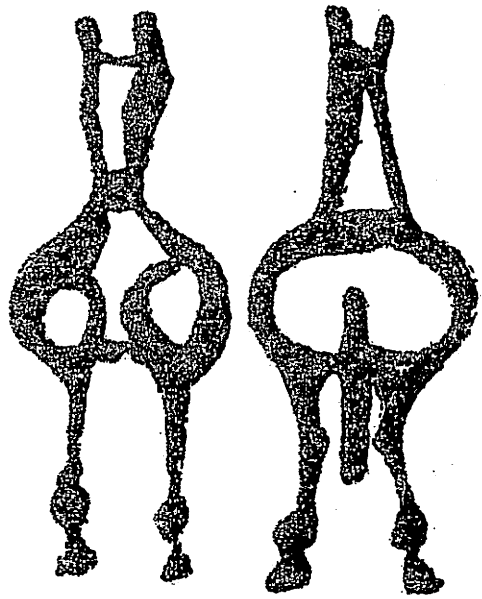
ところが意識してか、忘れてか三回の作業に一人はサボリをきめこむやつがでてくる。後者は四年間の部生活でだれでも一度はやりかねないことであるからこれはよく注意してもらうしか方法はあるまい。しかし意識的にサボルことは、よほどの突発事故の場合を除き部員失格であり在部する必要のない者である。

もしその者が主体性をもって行動しているなら少々の落度は問題ではないし、そうたびたび起るものではない。そして、作業や当番はそうつらいものではなくなってくると思う。

○今年度の作業予定

冬のボロ出し、早春の雪割り、炭ガラ運び、パドック修理、春の競馬場アルバイト、諸大会の使役、夏の女子戦、馬房修理等例年通りであるが今年は固定障害の設置に力を注ぐつもりである。学生自馬、国体の野外騎乗に苦杯をなめた昨年の同じ失敗をくりかえさぬためにも、野外馴致、馬が障害を重視して落下防止するためにも野外の固定障害の設置は必要であろう。早ければ五月、遅くとも六月中に恵迪寮の裏に数箇の固定障害を設置するつもりである。

随　　想



不具

大木誠示

彼女の切れ長い目は、開け放された窓の向うに注がれている。石狩の海、小樽の港と街の佇まい、それらは、彼女の部屋からよく眺めることができる。彼女の前に開かれたノートも教科書も、一時間前と同じページのままである。

今、小樽の街は暮れようとしている。ほほに触れる風が冷たく彼女に思えた。北国の九月は、夏の終りである。湾の向う、増毛の低い山並は、もやの中に溶けこもうとしているし、青と緑を吸い込んだ海と、茶色がかった港の海面は、つい先刻は一様にあかね色に輝しかつたが、それらは薄墨色に、次第に重く暗く、坂の上の、そして坂の下の街も、同じ夜の帳の内に沈み込もうとしている。それにつれて、色とりどりの、大小様々のイルミネーションが、彼女の瞳の中に、明るさを増してきた。刺激的な繁華街のネオン、それは、楽しそうに、歌うように瞬いている。港の大型な船のライト、小船のライト、埠頭のライトは、活気にあふれ輝いている。しかし、この海に沿つて細く長く、丘の上も、山の間隙を縫う街の灯は、小さく、心もとなく光つている。それらは、ささやかな喜びと幸せの光かもしれぬ、苦しみと悲しみを嘆く光かもしれぬ、漁港として、貿易港として昔盛えた小樽を偲ぶ人々の吐息なのかもしれぬ。

じつと見詰める彼女の前で、闇は街の全てを濃く覆つていつた。

一七才のこの女の子は、暗い部屋の中で、白く動かなかつた。窓越しに見る彼女の姿は、灰白い塑像を思わせた。しかし、その塑像は一つの欠陥をもつていた。それにあえぎ、忍いでいた。

彼女の右腕は、一方のそれより細く短かい。それは小児麻痺の名残りであつた。ブラウスの長袖の下に隠されてはいるが、一寸気をつけて見ると異常なのがすぐ知れた。彼女が、右腕を隠すことを知つたとき、彼女にとつて、それが、この世で最大の苦痛となつた。そして、狂おしい斗いへの出発となつた。遊びに熱中している際中、右腕に注がれた仲間の好奇に輝く目をふと気がつくとき、彼女を襲う絶望感、男の子に学校や道端でひやかされ、屈辱の涙を溜めた、それら幼き頃の気憶は、あまりに生々しく、耐えがたいものであつた。蒲団の中で、母親の胸の中で、人知れぬ裏山の木立の中で、泣きくれた日々は、今なお彼女にとつて忘れることができなかつた。大声を上げ泣き、叫び、母親に苦しみを訴え、終には、自分を生んだことを責め、母親をおろおろさせたことは数知れなかつた。

父親は一人しかいない吾が子のそんな姿に、彼なりに苦しみぬいて来た。しかし、彼女が泣きぐづついているときも、ふてくされたように、口をつぐんでいるときも、親に反抗するときも、彼は怒鳴つたり、手を上げて打つたりはしなかつた。彼は自分が親であるという意識は極力捨てて吾が子に接した。彼は、娘にいわゆる明るく素直な女の子であつてほしかつたが、それが、簡単なことでないことは、身にしみていた。彼が娘に話しかけるときは一彼女を慰めるとき、諌めるとき、目の前の吾が子と同じく、必死の日付きであつた。ときには、今にも涙を浮べんばかりの、悲

しみの表情で、あるときは苦痛に引きつつた顔で娘に相対した。娘が去つた茶の間にじつと考え込んで座り続ける夫の姿に、妻は息詰まるような気持であつた。

そして、この吾が子と一緒に、吾が子の内に自分を在らせようと努力する夫に、毎日の仕事に疲れ果てた表情を妻の前で隠し、努めて笑顔を見せようとする夫に、彼女は身を震わし、胸に突き上げてくる熱いものを感じた。

高校三年の彼女は、怒りや、悲しみの表情は顔に出さなくなつた。人の顔色を盗むような目付もしなかつた。人が好奇の目で彼女の右腕を見るとき、ときには気がついていても「いや、君の欠点なぞ見なかつたよ」というように、無関心を装つて目を外らすときも、またある人が、さも気の毒にといつた仕草で彼女の顔を窺うときも、全く彼女は無表情でいることができた。街の中で、学校の中で、他人の前で、それを決して崩さなかつた。

彼女の学校は、坂の上にあつた。街の中心に近かつたが、商科大学のすぐ下、緑に囲まれた静かな場所にあつた。彼女は、大学を受験するのであつた。女生徒の中で、大学に進学しようとしている者は多数いたが殆んど皆私立の女子大を目指していた。彼女は男生徒に交つて、国立大学を目指していた。彼女の成績は、この学校で尊の種であつた。あらゆる試験で、彼女は絶えずトップを争う一人であつた。

彼女は、男生徒や女生徒が、教室で騒々しい声をたて、愉快そうに笑い、雑談しているときも。休み時間に、ろう下で、教室の隅で声を秘めながら仲間の異性関係の噂話に心を弾ませているときも、机に向つたまま、本の上に目を落としているか、左手の鉛筆をノートの上に走らせているかしていた。友達が話しかけると彼女は真直ぐ目を友達のそれに当てた。その二つの瞳は、いかにも、今夢中で問題に取り組んでいたと思える熱ぽい輝きを帯びていた。しかし、彼女は瞳の奥で素速く相手を観察し、考えていた。

この女の子は私の話し相手になりたいのだろうか。私の相談相手となつてあげようというつもりなのかしら、私に近附いて一寸変つた友達を持つているという話しの種にしたいのかしら。この男の子は、私に興味を持ち始めたのかしら。机にかじりついてばかりいる表情を減多に変えたことのない私に、どんな興味を持つて、こうやつて話しかけたり、顔色を覗つたりしているのだろう。

この人達は私を理解してやりたいと思つているのかもしれない。私はお新りだわ。私を理解するなんて雑作もないことよ。私が不具であるということ、只それだけで完全なんだわ。この人達が、私の内に聞いたら、うつとりするような何か素晴らしい、希望や信念や理想があると思つているとしたらそれは大間違い。私が大学に進むのは、この右腕のせい。お手玉も、編物も、スキーも、そういつた楽しい筈の遊びの殆んどができなかつた。私は、唯独で時間を埋めるようになつただけのこと。私にとつて、苦いであつたかどうか。ただそれは周りの人々を安心させたことは事実だ。私を包む囲りのふん囲気が、以前と異つたものであることを私は明らかに感ずる。家庭で、学校で、私の接する攻るところで、私は、私に寄せられた期待を知らされている。その人達は、私が不具であるという、そのことが私に寄せる期待の源の全てなのだ。私がその期待に報いようと、報いまいと、ただその人達においては、それが如何に劇的なものとなるかが一番大事なことなのだ。

感動的な結果を私は与えるべきなのだ。

彼女の周囲の人々は、彼女が取り附きづらく、冷たい壁を感じさせれば、させるほどある関心を持つのであつた。ある人は、彼女が普通以上の美貌を持ち、成績を見て分るように人並以上の頭脳を持つているにもかかわらず、暗く冷たい表情を崩さず、世間に打解けようとしないことに非難の気持を抱いていた。意識的に自分を殻に閉じ込め、満足している如く思えた。

人の関心を集めようとする彼女の振る舞いとさえ思つた。その人達には、彼女は結局、そうすることで、世間に甘えているのであると思えた。彼女が自分自身の内に、あるいは、世間に、この社会の内に、本心からの苦しみを感じるのならば、彼女は、その中で苦しみ抜くがよいと彼等は考えた。この地上には、彼女以上に身体的に物資的に満たされぬ人が無数に存在するのだ。過去にもそして、この現在にもそれらの人々の中では、逆境から立上つたし、立上りつつあるのだ。苦しみの中から、彼等は生半可な人生では得られぬ何かを掴んだのだ。偉大な発見、発明、芸術的創造、数知れぬ程の人類に貢献する事業を成し遂げた。それらは、その人自身にとつても、何と素晴らしきことではないか。彼女も苦しめ、腕一本の欠陥がそんなに意味のあることなのならば、それも結構。人に決して頼るな、自分の内で、解決せよ、自分の片腕で這い上るんだ。

彼女にとつて、勉強は救いでなかつた。彼女の一日の生活は鉛筆を握ること、黒板に目を凝らすこと、教科書や参考書の文字の連なりを暗記することで殆んどは費やされていた。しかし、彼女は充足感は得られなかつた。乾燥し切つた、細切の知識を頭に無理やり詰め込まなければならぬとき、心底から嫌悪感を覚えた。疲労のせいか、あるいは生理的なものによるのか、彼女は机に向つていてもどうしても頭が記憶したり、解いたりすることを受付けない日があつた。それが、学内試験の近いときなどには、彼女は少しでも予定をはかどらせようと机に向うのであつたが、結局途中で蒲団に入つてしまうのが常だつた。しかし、イライラして寝つくことが出来ず、睡眠薬を用いて、何とか眠ろうとすることもあつた。そんなとき、彼女は自分がこのままノイローゼになつて、睡眠薬を無意識のうちに多量に飲んでしまつたりあるいは、突発的な衝動に駆られて薬を飲んだりするかもしれないと恐れた。両親も彼女が睡眠薬を用いることを非常に恐れた。だから彼女は、一度母親に薬を見付けられ、両親に彼女がそれを用いることを止められて以来なるべく飲まないよう努めてはいた。今までに彼女は幾度も死にたいと思つた。子供心に、こんな不具でいるより、一層死んでしまつた方が良いと思つた。人に笑われたり、意地悪されたりしないですむし、彼女に同情してくれると考えたりした。今の彼女は、確かに受験勉強は大きな苦痛であつたが、自殺はしたくなかつた。新聞の片隅に「高校三年生の少女自殺、腕の不自由を苦にし、また最近、受験勉強でノイローゼ気味だつたことが原因か。」と載るであろうし、世間はそれで充分に納得するであろうことが、彼女にとつて許されざる屈辱であつた。彼女自身、右腕の欠陥に固執せずに、人に馴じみ、話し、笑い、遊びたいとまたこんなに意固地と思える程、机にしがみついているより、もつと余裕をもつて勉強したいと思うことが度々あつた。

しかし、彼女にはそれが出来なかつた。そうありたいと思いながが

ら、それをどうしても、自分の敗北としか思えないことが、彼女はつらかつた。彼女は、受験勉強で自分をしばりつけることが、彼女自身への、そして人はどんな限界状況でも耐えることができるということへの挑戦であつた。人間はどんな悲惨な場面にあつても、それから逃避せずに、もくもくと耐えるということが、人間故の崇高らしさであるということ、またそれでこそ人間性の発展がもたらせるという人間信頼のヒューマニズム、それによつて地上の様々の組織が制度が意味づけられ、納得づみのものとされることに彼女は強烈な反発を感じていた。徹夜してまで、彼女の体を勉強で酷使するということ、それは実際危険な挑戦であつた。受験勉強それは誇大な表現に聞こえるが、地獄とまで世間に言われている、その中で彼女は、彼女自身にとつて、何が得られるか、やつた甲斐があると言えるのならば、どんな甲斐なのか？、それらは現実に彼女が体験しなければ、彼女がその中に全てを投じなければ、絶対に得ることが出来ないものと彼女は確信していた。友達と遊ぶ時間の少なかつたために勉強に精力を使うようになつただけのことであつたが、現在の彼女にとつて、勉強はその確信故に意味を持つていた。受験勉強に価値を認めないながら、自分をその中で自虐することに意義を置かせている彼女は、いつか破綻を来すかもしれぬ。

彼女はまだ一七才である。夢と希望に胸をふくらます年である。せつないまでに感傷にひたる年である。恋物語に瞳を潤わし、一寸したことに笑いころげるときである。花から花へ踊り、舞い、青い空の中へ舞い込み、彼女達の春を謳う白い蝶を想わせるときなのだ。彼女は、明るい日の下にその姿を暴さすことをうとんじ地上の全てが憩う夜の中で、その傷んだ羽根も癒し、再び訪れる朝に備えている。彼女にとつて、如何に不毛の花園であろうと、この小樽の街で、明日も明後日も、彼女は彼女の羽根で飛び、彼女の頭で考えねばならぬ。遠からぬ一つの試練、それはすでに彼女が避けることの出来ぬ事実となつている。今は闇の中に溶け込んでしまつているこの海の上を飛び越える力をそれは与えてくれるであろうか。彼女には遠いものとなつてしまつた決意ー貧しき人々、身体的に恵まれぬ人々、社会の底辺で諸諸の苦しみにあえぐ人々の仲間、その人達の苦しみをほんの少しでも、一つでも除くことがしたいという決意が、再び彼女の胸に大きな輝きとともに蘇返つて来てくれるであろうか。

私は決して、自分が不具であることを忘れまい。苦い過去も忘れまい。それは、私の将来に私が不具であるということを超えるためへの心の支柱なのだ。毎日の努力も、煩悶も、他人には、如何に実りの無い、狭いものに映ろうとも、私には、それらが、私の存在を確実な実感として、私に与えてくれる以上、私は、それらの苦しみから逃げはすまい。この机の上の本もノートからも逃げはすまい。今しばらくは、この街からも逃げはすまい。

しかし、何時かは、巣立とう。そして戻つてこよう。

馬術部雑感

御坊田　賢　一

正確に言えば、丸々三年間である。馬術部に入部したのが、一

年生の秋で、強かつた日射が、だんだん淡く弱々しくなつている頃だつた。その計算でいけば、三年間という事になる。つい先だつて、四年目最後の街乗に出かけた。行く前は確かに、五頭そろつていたが、ふと帰りに気がついたら、二頭にへつていたのには、おどろいたね、まつたく。しかし、今年の街乗は、私と、萩原両名の長年にわたる、部への貢献の感謝の表われでもあるのか、第一日目で、終つてしまつた。我々と、他三名は「もうけた」わけである。残念会の席「コープ」で、私はある質問、一年目ならば、当然持つているような事を、言われて、ちよつと当惑したのである。そばにすわつていた萩原は、何かしらんが、コープの女の子の方を向いたつきり、煙草ふかして、知らん顔しているし、一年目の女子部員は、その質問をした後、ぼくの目をにらみつけているので、まつたく困つてしまつた。一息ついて私は話し始めた。

「君の言うように、四年間で百七十五鞍は確かに少い。いや少すぎる。でもね、ぼくのあきつぽい性格、代表的日本人種の性格から言えば、よくやつてきたと思うよ。」ここで萩原、ぼくの方を見て、にやりと笑う。萩原も時々、このあきつぽさを見せる。気違いのように、朝夕馬に乗りにきて、そうかと思えば、一月近くも全然、部室に顔も見せない事がある。

彼のが、突発的と言えるなら、私のは、持続的とでも言えるかも知れない。

「でも、この四年間、楽しかつた。鞍数は少いけど、五百鞍乗つて、卒業して行く人と、ぼくとでは、馬術部で得られた思い出とじては、何ら変る所はないと思う。技術的には、そりや、格段の相違はある。でも、合宿で、ひざをむいた事や、夏の草刈や、部内競技会や、その他、数えあげれば、きりがない。自己弁解なのかね、どうだい萩原?」ここで、萩原、先からみていた、天井の穴ぼこから、おれの方を向き、「そうだな、まあ」、煙草に火をつける。いつたい何がそうなんだろうね。わからないやつだよ、まつたく。ここで私は、ぐつと胸をはる。

「でも、これは、おれの歩いてきた道だ。ぼくは、この四年間の馬術部生活に対して、ちつとも、悔いる事がないけど、君達も、四年の後半になつて、後悔しないようにやるんだな。ゴーイングマイ・ウエイで。

人の顔色を気にして、馬に乗つてるようでは第一おもしろくないだろう。それから、馬術部つて、馬だけじあない。中心は、人だからその点から得られるものも、ずいぶん多いね。おれだつて、年中馬々々だつたら、これまで、続けてはこれなかつた。一つの組織だけど、馬と人間の上下を逆にしちや、かえつて、競技においても、弱くなるんじゃないかな。早く言えば、おれみたいな、グウタラ部員でも、在部して、仲良くやつて行けるような、ふん囚気?的なものが、これからもほしいわけだ。それにしても、四年前から、馬術部、いや、北大が変りつつある。ぼくらなんか、年とつたのかな、昔の方がよかつたよな、萩原」

「うん」

「特に馬場附近の風景、ポプラ並木、アカシア並木、引込線、夏の朝の練習の時、馬場の横に汽車が来て、部班運動を一時中止したなんて、なつかしいよ。のんびりしてたな。北嶺、北楡、北春北斗、みんないなくなつた。北嶺の暦、手をもつて行くと、上暦をぱくぱく動かして、指がくすぐつたかつた事、人も馬も、古い

のは行つて、新しいのがはいつてくる。当然の事だけど。君達は若くていいね。あと三年間、じぶんのやりたいこと、せいつぱいやるといい。こんな自由な、若い時代つて、もうないんだから。」ここで、私は話をやめた。話しているうち、いろんな人や馬の事が思い出されて、心が夏の日の馬場や春の、牧草地や、冬の部室等に飛んでいつてしまつたからである。過ぎ去つた日々、何と遠くに、行つてしまつた事か。

「よし、過ぎ去つた日々のために、乾盃しよう」。私と、萩原は、一抹の寂しさの残つた顔に、お互に笑を浮べて、コーヒ茶碗を合せた。

老兵は死なず、ただ消え去るのみ

ケムリのビン詰

菅野　弘

とにかく、彼はタバコがすきになつてしまつた。ほとんどいつときも手離すことができない。彼は自分でこう思うことがしばしばある。「オレの生活をささえるものは、青春の夢と勉強と、そしてタバコだ」と。

彼の仕送りは月に一万円である。バイトの家教が三千円、奨学金三千円、計一万六千円で一ヶ月間やつていかなければならない。間借りをしている彼にとつては、決して十分なものではない。食事、室代で一万円はかかる。雑誌、クリーニング、新聞代などを払うと、いつもギリギリで月末にはきまつて切ない思いをしながら、ポケットの中の百円札をにぎりしめ、ビースにしようか、いこいでがまんするか、それともタバコはかわずにランチをたべようかとクラーク会館の石段をのぼりながら迷う日が三日はあるのだ。ある日、彼は退屈まぎれにタバコをふかし、そのはきだす煙をへやのすみにころがつているカラツポのビールビンにふきこんだ。茶色のビンの中でケムリはゆつくりとうずをまきぶつかりあい「芸術的」ということばを思いうかばせるほど優雅な仕方でビンの底にただよつたのである。一口、また一口、彼はケムリをビンにふきこんだ。ふきこむケムリと、その勢いでふきでてくるケムリがにつちもさつちもいかなくなるギリギリのところで、彼はビンの口に王冠をあて、ピチツと音をたててセンをした。そこで彼は満ち足りた気分になつて、又本をよみはじめたものであつた。その月の月末となつた。例によつて切ない思いで彼は灰皿をかきまわし、一、八cmくらいのシケモクをやつとのことでさがしだしていねいに灰をはらい落し、口にくわえ顔をなごめにしながら小さなカガミに口もとをうつしながらマツチで火をつけた。これは彼の生活からうまれたチエなのだ。以前やはりシケモクに火をつけるときに、マツチの炎が彼の鼻の頭をしたたか加熱したことがあつて以来、彼はいつもこうするのだ。一、八cmのタバコは吸うあたわざる状態になるまでにそれほど時間はかからない。にがい唾液をのみこみながら、彼はイライラする。金は三十七円しかない。今日は二七日だ。明日には必ずあの緑色の縁取りのあるなつかしい封筒がくるのだ。しかし、彼は今タバコがすいたいのだ。あと三円あればビースがかえるのだ。たつた三円に泣くとは！、悲憤慷慨する彼の目に、ヘヤのすみにころがつているビールビン

がうつる。ビンの茶色を通してにぶい色のケムリのよどみが彼をよんだ。彼はいそいでビンの王冠を親指でおしあける。指にギザギザの押型をのこして王冠はポトンと畳におち、ビンの口からはかすかにケムリがゆらめき出る。鼻を近づけにおいをかぐように吸いこむと、何とまあ、かすかにホップの匂りをおりまぜたビースの味がするではないか！彼は夢中で鼻の穴をおしあてて吸いこんだ。彼のヒトミは希望に輝いた。

つぎの日、彼が学校から帰ると待望久しき封筒がまちかまえており、しっかり勉強しなさいという母の便りとともに一万円札が一枚入っていた。その日から彼はタバコを吸うときには必ずカラのビンにケムリをふきこみはじめた。ビールビン七本、ショウユのビンをよく洗ったもの二本、ケチャップのビン三本、ビールの小ビン四本、そして、クリーニングをつつむうすいビニールの袋八枚にびっしりとケムリをつめこんだ。このけむりのビン詰によって、彼の月末の憂いはなくなることになった。さらに彼は、このケムリを味わうときに片方の鼻の穴を指でセンをして片方づつ使用することを学んだ。

卒業式はもう目の前であった。クラスの者たちは、あと半月たらずで長くもあり、又、楽しい事の多かった学生生活とはつきり別れねばならないことを身にしみて感じ、お互いにいたわりあうような心使いをもって接し、いままでになかった親密さが満ちあふれた。しかし、そのことが、かえって一人一人をふと物悲しくもさせるのであった。

その日はクラブの追コンであった。諸先輩をまじえた会が、最後の「都ぞ弥生」の後に、ちょっと白けたようなあわただしさをもっておわり、連中は歓声と徒党にまぎれて、二次会、三次会へとくりだしていった。彼はしたたかに酔った。みんな気のいい連中ばかりで大いに楽しかった。四年間の部生活を通じ、己に固執し、正体を失うことの少なかったことを悔む心が、彼の足どりをわずかに支えていた。粉雪がちらつきはじめ、寒さは厳しさをいっこうにゆるめなかったが、酔った後の鼻腔には新鮮であった。どう歩いたか、とにかく彼は自分の室にもどってきて、ドッカとあぐらをかいた。「みんな終りだ。みんなおわってしまったんだ。」彼はつぶやいて、今では八本にもなった一升ビンの列をながめわたした。しばらく、彼はそれをじっと見つめていた。あの時以来、彼はこの一升ビンには時を厳選して、タバコのケムリをつめていたのだ。うれしい時、悲しい時、心を悩ます時、とにかく、ほんのわずかであっても、その時に彼の心に小さな跡を残した「時」は、必ずケムリとなって、一升ビンにつめられたのであった。言うなれば、このビンは彼の心の記憶そのものであったのだ。彼はまだ残っているのだろうか、そのビンに魅入られた如く、みつめていた。やがて彼はゆっくりと立あがり、センヌキで片端からビンのフタをあけていった。フタはとなりのビンに当ってチン、カランと鳴り、畳にポトンと落ちた。ビンの口からとまどったように、右に左に小さくゆれながらケムリが立ちのぼりはじめた。どのビンからも、どのビンからも、ゆらゆらと、たゆとうケムリがあふれでてきた。それを見つめる彼の鼻スジにツンと一つの神経細胞の伝達が走り、眼にぬけた。彼の眼にはみるみるうちに涙があふれ、表面張力はギリギリまで、よくもちこたえたのであるが、ついにセキを切ったように流れだした。彼は泣いた。いつまでも、

肩をふるわせて泣いたのである。

外では、粉雪がいつの間にか大きなボタン雪にかわり、はげしく降りつづいていた。今、地面におちた雪片はすぐに消えた。その次も、その次も、雪片は地についたとたんに消えた。しかし、道はやがてまっ白になり水たまりも石ころも、犬のフンも、すべて柔かな白い丸みにおおわれてしまい、ほんとうは荒々しく、よごれの多い道であったことを思い起す人はいないのである。

腹ふくるるわざ

横田　肇

手稲の連山に白く雪が積り、また冬がやってきた。赤々と燃えるストーブにあたりながら、過ぎし日の数々の失敗を思いつくままに書いてみることにする。

大学に入ってすぐの六月だったろうか、学校から寮に帰ってくると松永君がカンビールを二本もっていたので、いっしょに飲んでから午後の練習に出かけた。時間もまだ相当あったのにどういうものか一人で馬場まで走っていったのだが、これでビールがまわってしまったらしい。線路の横をふとみると四白の北翠が草を食っている。ちょっと裸馬で馬繋場まで行こうと、飛びのるために背中に手をかけたら、いやに背が高くなっている。こいつは相当の年齢と聞いていたが、馬は年をとっても伸びるものかな、あやかりたいと思いながら、たてがみを見るとGI刈のはずがいつ刈ったか、わからなくなっているほど伸びている。変だ、変だと思ってもう一度、正面から見直して驚いた。北翠とばかり思っていたら朝清だったのである。とんだところで滑はらい運転をするところだった。

この時は危機一発で捕物帳もしなくてすんだが、その年の十月裸の北嶺にのって、鉄を打ちに出かけた。函館本線の踏切を過ぎた時、追越していったダンプカーがパーンという大音響と共にパンクした。北嶺はふだん、いかにも落着いているようだが、これが案外のあわてもの、鉄砲玉で打たれたと思ったか、一目散に走りだした。こちらはなにしろ北嶺のやせた背中で鞍なしで乗っているからお尻の痛いこと、痛いこと、必死でしがみついていたら北嶺の奴、どこも打たれていないことに気がついたらしく、何事もなかったようにすまして歩きだした。一時はどうなることかと馬上で青くなった次第である。

二年目になると新入生が入ってくる。或る日、飛び乗りの練習で、ノッポの松尾君が飛び乗ったまではよかったが勢いあまって向側へ落ちてしまった。こういうことはでかい奴がやることで僕には関係ないと思っていた。それから二、三日して講義に出てから、昼休にふらっと馬繋場に来ると北翔が初夏の日射しをあびて退屈そうにあくびをしている。ちょっといたずら心がおきて北翔の背中に飛びのった。ところが学校のかえりだから一張羅のズボンである。背中の上で右足を振上げたとたんに、お尻がビリビリッときた。「いけね」と思ってそちらに気をとられ、ひょっと前を見たら既に一三五度、退勢はいかんともしがたく、そのまま向う側へデーンと落ちてしまった。

夏の或る日北涼と鉄屋へ行つた帰りである。夏だから観光客が学校へ入れないように農場への道路の入口に綱が張つてあつた。五十センチぐらいだつたので飛びこえりやよかつたのだが、大事をとつて馬からおり、綱をはずして、馬を入れ、又綱をかけて飛びのつた。ところが北涼は帰りたい一心であつたのか、飛び上がつた瞬間に歩きだしたので、これまた向う側へデーンと落ちてしまつた。とにかく人通りの多い天下の大道から大学の小道へ入る途中である。さつそうと馬上豊かな美青年？が、飛びのつたと思つたら反対側へ落ちるなど、善良なる市民の魂を根底からゆさぶる幻滅を与えたわけで、落馬は何度もしたがこの時が一番恥ずかしかつた。もう一度やりなおして、今度もあぶなかつたが、何とかしがみついて無事帰還ができた。

そうこうするうちに冬がきた。一晩で五十センチも積つたあくる日のことである。北楊をひつぱりだして、恵迪寮の方で練習してから、農場にもどり、農場の一番奥までいこうと、雪の積もつたポプラ並木を北に向つて、全速力で走りだした。御承知のとおり、迷騎手にして迷馬である。誰が何といおうと、所詮、人馬は二体、僕は農場の奥を目ざして一目散、北楊の方は、厩舎目ざして一目散、ただ一目散という共通点だけをもつて、お互いに、人馬一体と思つていたのが運のつき（思つていたのは僕だけらしいが）調子にのつて、ぼんぼん拍車を入れて、ポプラ並木を三分の二まできたとたんに、体がフワツと空中に浮いたと思つたら、目の前が真白になつた。綿の中へ入つたようである。しばらく何が起つたか、わからなかつたが、ようやく、雪の中へはいつくばつていることがわかつて、はいだした。さいわいにして冬のことだから観光客はいなかつたので、もう一度、北楊をひつぱり出して、農場の奥まで走らせて満足した。

一年生諸君、上級生は今でこそ、立派に乗つているが、部に入つたころは皆同じで、ひどいものであつた。最初の合宿で三十分のアブミあげに精も根もつきはて、十五分位で半分以上がズルズルと落ちたり、外乗で、大木君が円山の奥で朝清から落ちて逃げられたり、水野君の落ちた回数など、お笑いのネタは多々あるが、昔の哲学者が言つたように、まず汝自身を知るべき、いや汝自身の失敗を知らせるべきと思い致つて三十日、言わざるは腹ふくるるわざのたとえ、日増しに強く、ここに公開致しました。不道徳教育講座になつてしまいましたが、万一御参考になりましたら、望外の幸であります。

無題

一年目　K・K

彼もさすがに動物好きだけのことはある。入部してすぐ完全に馬が恋人になつた。九頭の顔かたち、毛の色、クセなど全部憶えてしまい、一頭々々の顔を忘れたくても忘れられなくなつてしまつた。今では馬の顔が初恋の人の顔とダブつてしまつて、どうしても昔の彼女を憶い出せない程である。初夏の当番の夜、裸電球のともる厩舎の中にたたずみ、物言わぬ彼女らの十八のうるんだ瞳に見つめられて、「ああ、何と可愛いい奴らだ」と、つぶやいていたこともあつた。そして青草の繁つた或る夏の晴れた日、彼

女らの一人（頭）を、恵迪寮の裏までつれて行き草原にドカッと腰を下ろして、彼女に草を喰べさせながらふと彼は恋人と一緒に坐つている様な錯覚にとらわれたりした。

彼は生れつき、生き物が好きで、犬、猫、鳥は勿論のこと、アリやトカゲを飼つたり、ノミやシラミの飼い方まで研究したりして成長した。彼の脳裏にはトカゲの小つちやな可愛らしい瞳が焼きついていて離れない。今でも森の小道でアリの行列を発見したり朝露を散りばめた小さなクモの巣を見つけたりすると、しやがんでぢつとのぞき込む癖が抜けていない。彼は小さな小さな生き物が、小さな小さな頭で考え考え手足をコチョコチョと動かすのを見て、何とも言えず感動し、その背後に世界の創造主なるものを微かに感じとるのである。彼には物に驚き、感動し、涙を流す純粋性がまだ小さい頃のまま残つているのに違いない。

そんな彼だから、馬術部に入つて、以来随分いろんな事に感動を覚えた。彼女らのウンチが丸いことや、一人一人その直径が違うことに驚き、彼女らが走りながらウンチをするのに気がついたときには、本当にたまげた顔をしていた。彼が初めて彼女らにエン麦をくれてやつた時、彼女らにベロがくつ附いているのを見てアレ？と思い、もう一度見てやつぱりくつ附いているのを確めたときの驚き……。馬の絵を見てもベロが画いてないもんだからてつきり馬にはベロなんかないものと思つてたらしい。

彼もアホらしいことに感動するもんだが、それもこれもひとえに彼の貴重なる純粋性からきているのだから笑う訳にもいくまい。因に、彼のアダ名は「平年作」（腕の程は推して知るべし）。彼がこの不名誉極まるアダ名を頂戴したのは夏の合宿のときだつた。何でも今年の一年目は皆おしなべてスジがいいところへ持つてきて、彼の上達の遅さが持に目についたらしい。まあ重力に逆らつてヒョロ長く伸びたはいいが、運動神経の方がそれに伴なわぬのは「宿命」と思つてあきらめているから彼自身、すましこんではいるが、そのうち自分の体に突然変異でも起こつて急に器用になるかも知れない。でもそのかわりに体の方が上下方向に縮むなんてことになる位なら今のまま自分でいいと、いつか彼は述懐していた。

馬（アオ）の死
もしくは時代錯誤的なおもい

加藤孝志（三年目）

心に感じた事を言う。言う事が気持を裏切り嘘になることはよくある事である。書くこともこれに似たものであろう。左の文も又然りと思つてくれると助かる。

好きなどと言うことは軽々しく言うものではないらしい。好きだと思つていても口に出した瞬間、〃嘘だ〃とつぶやくのはまま経験する。従つて女性に〃好きですわ〃等と言われると一応敬意を表して拝聴しておくが、心の中では〃ウソツケ〃〃ウマイコト言イヤガル〃等と言いたくなることも前のことに一致している。で次の逢瀬から熱がさめている自分に気のつくのも自然のなりゆきである。しかし、この心理の葛藤も人間故で相手が馬となると〃好き〃が〃好き〃で通じて嘘がない。

自分が馬を意識したのは背二才もいいとこ小学生にもならぬ頃か。

東北の農村に耕運機という化物がいまだ無く、お馬が各家の一番日あたりのよい場所に住んでおれた頃である。東北の寒村の貧乏つたらしい薄暗い家では馬はその家の中心であり、家長の誇りであり、ときには、家そのものであつた。家長は自分もしくは自分の家にふさわしい馬を手に入れるのに奔走した。曲り屋型のつくり土間に馬が肥えて草を喰つていることで家の者も、来客も、その一家が安定した暮しをしているとして気が安らぐのである。

であるからして、ある家で馬を手離すとなれば部落中のとくに若衆親爺連中の耳をそばだたせる事件であつた。そして代りの馬が自分達の持ち馬より優れているか又劣つているかが次の最大の関心事でもあつた。不幸にして代馬を買えない場合それは即ち家の没落を示すかのごとくである。実際老いた馬が馬喰に引かれて家を出る時家中の者が見送つているのははたから見るのも哀れである。又農家の馬房に主がおらず暗い土間に老婆とうす汚れた子供がうづくまり何かしらも仕事をしているのは、その家の崩壊を図で描いたようなものである。東北の薄暗い空がさらに暗く低くなり、ひとつく雪が降る冬ともなるとそれはなお明暗をはつきりと打ち出す。馬（アオ）のいる家はひつそり閑として、ただ降りしきる雪とその重さにひしがれいる中には人間だけが寄りそつて降る雪を呪い、来る春のさきの長いのに、たまりかねアクビをする。それと違い馬（アオ）が馬房におさまり夕餉を催促し子供と若衆がわらを切り、ぬかをとり出し夕飼を作り、老婆と嫁が炉のそばで夕飯の仕度をし、親爺が土間でわらを打つている。この活気も重苦しい冬に耐えているのも皆自分達の馬（アオ）がいるためかのごとく思われたものである。

早春の田に大肥を馬ゾリで運ぶ若衆、五月の田を耕す馬。夏山からたき木を背おつておりた後、若衆は山のふもとの大きな池で馬の汗を流し、馬と一緒に泳ぐ、その時の若衆の顔に馬（アオ）への愛情と誇りがそれと見える。

秋の晩秋の朝白い息を吐き冬に備えて山からシバを運ぶ馬、稲を背負う馬。冬、降りしきる雪を毛布でさけて、農婦は夫と馬ゾリで町へ行く、来る正月の買い物であり、来客の送り迎えであり、医者を呼びに行くのであろう。

農民の、農村の支えは田畑と馬であつた。生きることは、そして生活するということは馬とともに居るということであつた。

自分が馬を意識したのは、この様な環境の中である。馬が好きだということは馬がいないということの恐れであると言つてもいいように思える。

小学も三、四年になつて田舎にも悪路をものともせず乗合自動車が我がもの顔に、しかしどこかおもはゆそうに顔を出した。トラックも三輪車も。若衆も娘も〃発車オーライ〃の黄色い声にさそわれて浮き浮きと町へ行き始めた。学校の先生が〃バスで便利になります〃等と村の知性を代表していますとばかり、生意気なことを言う。

耕地整理があり、化学肥料が出来て大肥が不用になる。耕運機がなりもの入りでおし入り若衆（イヤ農村の青年達）はそれにとびつく、爺様と婆様は不安げにこの変化に見とれる。農業指導員等という小役人は声を大にして言う。〃馬ハ不経済デシ、牛ニシンサイ、牛ニシンサイ〃等と。

馬は不用となつた農家から村から馬が消えて行つた。以前は馬

は若衆の誇りであり、親爺の嫁の子供達の生きる支えであり、喜びであつた馬が……。

大学に乗馬倶楽部に馬はいる。スマートな乗馬姿のひきたて役として、もしくはスポーツの相手として、又教養を持てる現代人は動物愛を知る。〃文明人たるもの都会の薄汚れた空気、着飾つた女性より動物を愛し自然に親しめ〃というお題目をうのみにしては、白い手に青草をつまんでは馬の鼻つらにさし出す。馬はうつろな目でありがたくいただく。

競馬は盛んに行なわれる。馬は馬券の花吹雪の中に空しさを競う。走路にそつて繋る北国の象徴ポプラはうすら寒い風にゆれる。

☆

生の歓喜と悲しみを教えさとそうとやつきになる音楽を暗いスポットの下にいて聞きながら、コーヒをすすり、うす汚れた青き思いに身をまかせて淡き夢をついばむのにもあきた時、ふと馬（アオ）が死んだことに気がついた。

食事の店

誠

札幌市北15西5電停前

清酒 金富士直営

てつぽ

さつぽろ北17・西5

(71) 8776

馬場馬技入門

滝沢南海雄

一、馬について

乗用馬として備えるべき条件は、体型が整い、歩様軽快にして前進欲に富み、性質が温順で持久力が有り、飼育管理の容易な事と、仲々むずかしいものです。何と云つても、サラブレッドが、乗馬に於ても王者ですが、我々学生には管理がむずかしく、悍威が強く、敏感すぎる為、調教面に於て相当な技両の持ちぬしでないと、うまく行きません。それに何しろ高価ですので、我々が買おうと思つても競馬で長年使われて、ガタガタになつたものや、手におえぬ癖を持つたものばかりで、余り良い結果は望めません。そこで我々が買うとしたら、軽半血種が良いと思われます。それも、今迄の様に、競馬上りを買うのではなく、北海道には牧場がたくさんある事ですし、少数ではありますが、アングロノルマン種の様に乗用に適した馬が産出されていると聞きますから、直接牧場に問い合わせて買い取る様にすれば良いでしよう。アングロアラブや、アングロノルマン等は、歩様も軽快ですし、持久力も有りますので、学生用馬として適した馬種と思います。又我々には喜ぶべき事に、純血のアラブ、北翔号があります。アラブは、小柄ではありますが、悍威、歩様、持久力共に非常に優れたものです。北翔号を見てごらんなさい。歩様の軽く大きな事！　前進欲が旺盛な事！　実に敏感な事！　持久力の優れた事！　体の美しい事！　実に素晴しい限りです。もつとも、北翔の速歩について行くのは、仲々大変ですがね。

これだけ素晴しい馬を持つている事を誇りと励みにして、大いに練習して下さい。

二、乗馬姿勢

頭は総ての方向に窮屈なく、自由に動かす事の出来る位置に保ち、眼は両耳の間から、真直ぐ前方を見る事が必要です。何故かと云う事は後で説明します。肩は力を入れず自然に垂らし、上膊は上体に沿つて肘に至るまで自然に垂下し、常に体から離さない事が重要です。即ち、この姿勢で始めて拳の軽快性を得られるからで、拳の軽快性は馬を確実に、苦痛を与えずに制御するため、絶対に必要な事です。そして初心者の最もおち入り易い欠点が、この肩へ力を入れる事と、肘を体から離すことなのです。指導者はよくよく、この点を注意してやる必要があります。上体は真直にして決して力を入れてはいけません。力を入れる場合は、筋肉が凝固して身体の自由を失い、確実な扶助を行えなくなります。腰は軽く前に張り出します。この腰を張ると云う事を応々にして誤解している人が居ますが、腰を張ると云う事は決して背骨の腰の上の部分を凹ませる事ではなく（こうすると腰が後に引けてしまいます。）自然の状態より下

腹部（腰から下）を前出して座骨に重つて騎座する事です。要するに、大坪流と云う「臍に一鍼」です。脚は自然に垂下し股の平面部を以て鞍に密着し足先は馬体よりやや外方に向います。このやや外方と云う処が重要で、初めの内は、大いに外方に向いますので、少々内向させるつもりで、練習する必要があります。これは初めの内に練習しないと、良い姿勢になりませんので大いに注意して下さい。残念ながら、私は、足先が過度に外向する悪癖がついてしまい未だになおす事が出来ない仕末です。膝は蝶番の点となり脚は自由な運動性を持ち自然に垂下し、決して馬の肋部を力を込めて抱擁してはならない。脚は必要のときにのみ力を加えるのであつて、不断に力を入れていてはいけないのです。常に脚に力を入れていると、脚の自由な運動性を欠くばかりでなく、馬の扶助に対する軽快性をも欠くのです。常に脚に力を入れていれば、脚の推進が必要になつた時、今迄以上の力を出さないと馬には解りません。それに反して、普段に力を入れていないときは、チヨツト脚に力を入れるだけで、馬は、脚を使われた事を感じ取れるのは当然の事です。そして又、脚の推進は膝から下、踵迄の部分でするのであつて膝の上部は用いないのです。騎座は決して力を入れるものではなく、鞍の上に安定していれば、それだけで良いのです。

そして騎座は十分に深くする事が必要です。然し応々にして、過度に股を低下する人が居ます。一年生にこんな人が居ました。

実に股を低下したもので、ほとんど、踵迄一直線なのです。そして脚は馬体より離れ横につき出しています。「それで乗りやすいか？」ときくと「乗りやすくありません。」と答える。これは乗りにくいのがあたりまえで、全く足を真直にして馬にまたがれば、馬の背は円いのですから、股にひつかかつて、座骨は鞍につかず、膝も鞍とつかず、例えてみれば、コンパスで、ピンポンの玉をはさんだ様なもので、馬上の安定を得られる筈が有りません。ですから股を低下すると云つても、ちやんと座骨を鞍につけて座り、その上で股と膝を鞍に密着出来る範囲で十分に低下させろと云うのです。この点誤解しないで下さい。そして、鐙革の長さは、良好な姿勢に於て鐙の踏板が踝の下に達するのを程度とします。

さて騎乗する場合、最も重要な事は、馬に真直に乗ると云う事です。真直と云う事は地上に対してではなく、馬の重心線に自分の重心線を一致させると云う事です。例えば、自転車に二人乗りをしたとき、後に乗つた人が勝手に、右に体をのり出したり、左にのり出したりしたら、必ず、自転車は左右に傾く筈です。馬も自転車と同じで、上に乗つた人間が勝手に重心を傾けたら、自転車の様に余りヨロヨロはしませんが、運動の軽快性を失う事は明白です。人間と馬の重心が一致してこそ、軽快な運動が出来るのです。馬と人間の重心が一致しない時の良い例があります。昨年の春の部内競技会だつたと思いましたが馬場馬術の時の北翔が直行進をやりませんでした。左右にクネクネと曲りながら進みました。あれは、騎乗者が鞍の上に安定せず、たえず重心が移転するので真直に進みたくても進めなかつたのです。

そして、真直ぐ馬に乗ると云う事は、直行進のときばかりでなく、回転運動の時でも同じです。回転する時、馬の重心は内方に傾きますから、人間もそれに一致して重心を内方に傾けます。これは、結局、馬に真直に乗る事です。然し、ここでも皆が犯しや

すいまちがいが有ります。それは回転運動の時に騎手が過度に内方に体を傾けているのを時々見かけます。これも馬にとつては運動の障害になる事は、今迄述べて来た事で理解していただけると思います。このまちがいの起つた原因は、騎手が体を内方に傾ける事が、回転運動の際の扶助の一つであると云う誤解に有ります。決してそうではないのです。あくまでも、馬に一致するために上体を傾けるのです。そして、その為に、内方の座骨により多く体重をかける事になるのです。そこを誤解しないで下さい。

それならば、どうしたら馬に真直に乗れるかと云うと、方法は実に簡単です。それは馬の両耳の間から前を見ると云う事です。常に、両耳の間から前を見る事が出来る様に上体の位置を保つ。これだけの事です。そして、これを行えば、必ず真直に馬に乗れる筈です。論より証拠、一度やつてみて下さい。

これで、一応乗馬姿勢について終りますが、最後に、良好な乗馬姿勢を得る為にはどうしたら良いか、と云う事について、私の考えを述べます。（これは去年一年生が入つた時からやつておりますが）

馬術教育の初期には、なるべく軟かな歩様のおとなしい馬（余り老巧馬がいないので当部に於ては仲々無理ですが）に調馬索を付け、上級生が付き切りで、鐙無しで、平衡と良好な乗馬姿勢を取れる迄練習させるのが最も良いと思います。そして、この際最も重要なのは、騎乗者に不安を抱かせず、徐々に速い歩度、歩様に導くと云う事です。騎乗者に不安がある場合は騎座、脚で馬にしがみついてしまいますから、その点指導者は注意深く、彼に自信を与える様に指導しなくてはなりません。

三、各種の運動

1. 常　歩

常歩を完全に行うのは、非常に困難です。特に伸長常歩は難しい。他の歩法（速歩、駈歩）に比べて、馬の推進力の発揚が乏しい為でしようが、常歩で、推進力にあふれ、かつ沈静に濶大な歩様を程する馬は余りいません。ともすると、伸長を命ずると、チヨコマカと速度のみ速くなり、肢の伸展がみられない場合が多いのです。どうしたら、後肢を良く踏み込み、前肢を伸展して、大またに、ゆつくり歩かせる事が出来るか？私には分りませんが、要は「脚の推進と、頭頸に十分な自由を与える」と云う事なのでしよう。又いかに推進するか？　これも私には、はつきりつかめていませんが、私の父がこう云つた事があります。「脚の推進は馬の前肢が正に地を離れんとする時に行え」。どんな本を見ても（私が読んだ中で）、何時、いかに推進したら良いか書いて有りません。これは、自分で練習自得すべきものなのでしよう。諸君の練習に、私の父の言葉が参考になるかも知れません。よくよく考えながら練習して下さい。

2. 発　進

発進とは、停止から常歩・速歩・駈歩へ――常歩から速歩・駈歩へ――速歩から駈歩へそれぞれ出発する事です。

常歩発進は、両脚で推進し、馬が前へ出ようとした時に拳をゆるめてやればよいのです。

速歩発進も扶助は常歩発進と同じです。只常歩の時より一層の推進が必要です。うまく停止から速歩に発進出来ない人は、推進

が弱いか、拳をゆるめるタイミングが悪いか、又はハミを受けていないかのどれかが原因です。拳のタイミングが合わない人は、大抵、タイミングが遅れているものと思われます。いかなる時に拳をゆるめるかと云うと、両脚で推進すると、座骨の所に、グツと力を感じ、馬の腰が、低下した感じが伝わり、かつ、拳にも、力が感じられます。その時に反射的に拳をゆるめるのです。それが遅れると、馬は前に出ようとしたトタンにハミにぶつかり、結果として停止を命ぜられたと同じになつてしまい、速歩に出られないのです。要するに、グツと感じた時は拳がゆるんでいなければならないのです。又、ハミがはずれている時もうまく行きません。馬と云うものは、ハミに支点を求めて運動するのです。逆に云えば、ハミの支点が無ければ、軽快活発な運動が出来ないのです。ですから、馬が出ようとするときにハミがゆるんでいれば馬は、出るには出るけれども、力の向い所がつかめず、ノタノタツとした、だらしない運動しか出来なくなるのです。ですから、どうもうまく出来ないと云う人は、その点に注意して練習して下さい。

駈歩発進は最もむずかしいものです。その扶助はまず両脚で推進し、次で内方姿勢をとらせ外方脚で後肢に刺激を加える。つまり、外方の後肢が踏み込みやすいようにするのです。駈歩の歩法は常に外方後肢が第一節になつて居りますから、外方後肢を踏み込みやすくすれば、駈歩に発進するのです。只、この場合非常に侵されやすい欠点が有ります。それは内方姿勢を過度にとらせ、かつ外方脚支持のために応々にしてあたかも、腰を内へのごとき態勢になつて発進するのが見られる事です。駈歩は、必ず真直な姿勢で発進し、運動しなければなりません。学生選手権などでも、大部分の選手が、斜に発進し、かつ斜に運動して居ります。これは、駈歩の手前が逆にならないように用心する余り、内方の鞦を過度に引き、かつ外方脚を使うからです。然し、それが最大の原因でしようか？　違うのです。最大の原因は、内方脚の使用を忘れるか、内方脚の力が弱い為なのです。いくら外方脚を使い、内方鞦を引いても、その分だけ内方脚を用いてやれば、馬は斜にならない筈です。私達は、内方脚をとかく忘れがちなものです。内方脚をうまく使えるかどうかと云う事は、その人がうまく馬に乗れるかどうかと云う事と同じであると私は思います。ですから駈歩の発進のときは、（その他のときも当然ですが）必ず内方脚を忘れず、馬を真直の状態で発進して下さい。

3. 停　止

停止は、馬がよく乗節を屈折して、後肢をよく踏込み、軟かに実行しなければなりません。そのためには、まず両脚で馬を推進し後肢を踏み込ませてからハミで馬の推進勢力を受ける事が必要です。両脚の推進無く鞦を引けば、うまく停止出来ないばかりか、後躯に重心が遠ざかり、馬の腰は凝固し、馬口に苦痛を与え、肩に負重し、馬に重大な害を与える事になります。又鞦を引いてから後に脚を使えば、益々馬の前進気勢は強まり、決して停止はしないでしよう。又、推進しても鞦を引くのが遅れれば、返つて馬は歩度が延びてしまうでしよう。ここでもタイミングが問題となります。ともかく、速かに、軟和に停止する様に研究するのが大切です。

4. 回転運動（方向変換）

回転にあたつては、先ず両脚で馬を推進して後、内方の鞦を軽く控え、内方座骨に負重して完全な内方姿勢をとりながら運動する事が大切です。回転中の推進は両脚を使いますが、左右どちらを強く使うかは、場合々々によつて違います。偶角通過の時に内側へ入り込まれるような場合（こう云う場合、馬が内方姿勢をとつていないのが常ですが）にはより強力に内方脚を使わなければならないでしようし、巻乗りの時に後驅が外方に出る場合には、より外方脚を用いて正しい運動をさせねばなりません。回転に際しては、後驅が前驅の経過した蹄跡を正しく進行しなければいけないのです。ですから騎手は常に自分の乗つている馬が腰をどちらかに偏していないかどうか、感知し、それに対応して操作を加えなければなりません。どうも皆さんは、回転にあたつて外方脚の使用を忘れがちに思えますが如何でしよう？

それから、巻乗りなどでは、きめられた大きさに運動しなければ意味がありません。極端に小さかつたり、逆に大きかつたりするのは馬に反抗されていると見られても仕方がないでしよう。小さいのは内方脚が足りないとか、内方鞦を引き過ぎるとか、原因は色々ある筈です。それを考えて直して行かなければなりません。単に巻乗りでも、きめられた大きさ、自分の大きさで運動するのは難しいものです。回転運動中の騎手の姿勢は肩は馬の肩に、腰は馬の腰にそれぞれ平行になり外方脚を少し後に引きます。そして、騎手の重心線は馬の重心線に一致して。何度も云いますが、決して過度に上体を倒さないで下さい。

5. 後　退

後退を行うには、先ず両脚で推進し、馬に後躯を低下させてからハミを控えます。もし推進を忘れてハミを引けば、馬は頭を高くし、背をはつて仲々後退出来ません。良好な後退は、頭を少し低下し、背を上方に丸め、腰を低下させて、軟く運動します。後退は急激に行うものではなく、一歩一歩、扶助に従つて行わなければなりません。よく練習中に後退の号令がかかると、ダダダツと退つてしまう人が居りますが、あれは馬が勝手に後退しているので、感心出来ません。後退する時には歩数を自分できめて行わなければ練習する価値が無いと思います。それから後退のときに馬が左右どちらかに逸ることがあります。その原因は、騎手の脚力のアンバランス、鞦を引く力のアンバランス、馬の癖等がありますが、いずれにしても馬が逸する方の脚を使つて正しく真直に運動する事が必要です。真直でなければ馬が旺勢な推進力を持てる筈が有りません。後退の時でも前進欲無くして運動は出来ないのです。要するに「脚は前進を求め、拳は後退を求める」のです。

6. 旋　回

前肢旋回は、両脚で推進し、馬の前進をふせぎつつ、内方手綱を控え、外方手綱で肩をおさえ　内方脚をより強く使用します。これも、一歩一歩騎手の扶助に従つて運動しなければなりません。そしてさらに重要な事は常歩の歩法で実行すると云う事です。決して前肢を不動のままでやつてはいけないのです。馬術は常に前進なのです。ですから停止のとき以外は、馬体の全てを用いて動かなければなりません。もし前肢を軸にして旋回するときは、諸君の推進が足りないのです。

後肢旋回は前肢旋回よりずつと高度な運動です。それは、前肢旋回が屈撓を必要としないのに反して、後肢旋回は屈撓が必要だ

からです。その扶助は、両脚の推進により馬に前進を求め、次でその前進を拳を内方に移すことにより前軀の横えの移転に変えます。要するに内方手綱の緊張を強めかつ外方手綱で押す事です。そしてこのとき決つして後退させてはいけません。後退するぐらいなら少し前進する方が許せます。何故なら、やはりこれも前進運動の変種であるからです。一歩一歩、常歩の歩法をとりながら、旋回させます。両脚は常に馬の推進力が衰えないように推進しますが、前軀が移動すると後軀は外に逃げ勝ちですので外方脚をより強く用いるのは当然です。一般的に後肢旋回では、騎手が外方脚だけを用いがちになります。然し内方脚を用いないと、馬の推進力は衰え、ひいては、扶助に対する軽快さを決き、その上後肢を軸にして旋回することになります。この点注意が必要です。

あくまでも、全肢を動しながら、後肢は出来るだけ小さな円を、前肢は、後肢の描く円の廻りに同心円を描いて運動するのです。それから、書き忘れましたが、前肢旋回は外方に、後肢旋回は外方に、後肢旋回は内方に運動する事でも、それぞれ異つています。

7. 斜横歩

斜横歩の扶助は、両脚で推進すると同時に内方の韁を少し緊張させ、次で内方脚をより強く使用します。そして外方手綱のおさえを忘れない事です。内方手綱より外方手綱の方が重要です。斜横歩の出来ない人は、内方脚が弱く、外方のおさえが弱い人です。内方脚が弱いと思つたら拍車を用い、外方手綱のおさえが弱いと感じたら、外方手綱をより緊張させれば良いでしょう。そして騎座変を起さないで、真直に乗る事です。

斜横歩は、前肢旋回の変形ですから決して難しいものではありません。要は扶助の一致で、内方脚が使える人なら、簡単に出来る筈なのです。只馬がハミを受けずに、騎手に反抗している場合は別ですが……。

8. 横　歩

これは我々学生の行う馬術としては、最も難しいものでしょう。これを活発に、スムーズに、かつ正確に行うのは非常に困難です。この運動は、常歩、速歩、駈歩のどれでも行いますが、共通している事は、必ず短縮した歩様で、つまり屈撓して行うと云う事です。

扶助は（右から左へ行う場合）先ず両脚で推進し、左韁を控えて馬に方向を与え、右韁でおし、外方脚を強く用います。この際注意すべき事は、必ず肩が後軀に先行する事です。後軀が先行しては不可です。後軀を先行させぬ為には、内方脚の使用を忘れぬ事ですが、大抵私達は、横歩のときに内方脚を忘れてしまいます。その結果、馬の前進力は消え、内方姿勢さえくずれてしまうか、又は、後軀が先行してしまいます。特に横歩は馬の前進力が衰えがちですので、内方脚の推進が重要です。常に両脚を用いて推進する事を忘れないで下さい。

騎手の姿勢を書く事を忘れましたが、馬が進む方向に重心を移します。つまり内方座骨に重るわけです。これは、馬の速度が速い程、騎手の体は、馬の進む方向と逆の方向に残りがちです。それを防止して馬の重心に一致するために行うのです。ですから過度に内方に体を移す（騎座を変化させる。）のはまちがいで、やはり真直に乗ると云う原則に変りありません。

四、前進気勢（推進力）

さて、今まで、推進力とか前進欲とか何回も書いて来ましたが、この前進気勢とは何でしょうか。それは、常に馬が前へ出ようとしている状態、馬体に力が横溢している状態を前進気勢が有ると云い、その力を前進気勢と云うのです。けれども、いくら前へ出る力と云つても無馬の様に騎手に関係なくどんどん前へ出て行くのは馬術上の前進気勢ではありません。本当の前進気勢はそんな反抗的なものではなく、どんな運動でも全力を上げて騎手の要求（扶助）に従うぞ、と云う力であり、騎手が、さあしつかりやれ、と云つて馬に出させる力なのです。

この点で、全く馬の勝手な前進欲とは異るのです。それでは何故前進気勢が必要なのでしょう。それは、こうです。例えば線路上の貨車を動かすときの事を考えてみましょう。一台の貨車を一人で動かすのは仲々むずかしいものです。然し、何人かで押して一旦貨車が動き出せば、割合楽に一人で動かし続ける事が出来ます。それと同じ事で、馬自身元気活潑に動けばそれだけ容易に運動が出来る訳です。考えてもごらんなさい。騎手が何か運動を要求しても、馬が「テヤンデー俺は動きたかネーヤ！」と云うんでは良い運動が出来る筈がありません。やはり馬が力にあふれ、「一生懸命ヤツタルデー」と張り切つていなくてはいけません。

それでは前進気勢に乏しい時はどうしたら良いでしょう。もち論推進あるのみです。脚でどんどん押し出すのです。然し中には脚の圧迫では仲々動かない馬がいます。（北大にも居ますが）その時の用意に拍車が有ります。「よし、俺の云う事が聞けないのなら拍車をおみまいするぞ。どうだつ！」すると馬は痛いから「イテツ、拍車をつけてるんじゃ仕方ない。云う事を聞くよ。」こうなります。

然し拍車も乱用しては逆効果で、拍車ばかりにたよつていると馬の方も「このやろう。拍車なんか使わなくても俺は云う事を聞くつて云つてるのに、分らないやろうだ。ヨーシ、今に見てろ！」と云う訳で、蹴つたり、小便したり始めます。その内、てこでも動かなくなつたりします。これが重つて馬がいじけてしまうとその結果は恐るべきもので、人が乗つても動うとしないで、拍車を入れても「そんなもの少々痛くたつて平気だぜ。まさか蹴殺す訳でもなし、その内疲れて降りるだろう。マやりたいだけヤンナーテンデ泰然自若と悟り切る訳です。そうならぬ為に、拍車は脚の効果がうすれた時、又はどうしても脚力が足りない場合のみに使用したいものです。又拍車にたよる事は騎手にも悪影響を与えます。それは脚を使用出来なくなる事です。こう云う事が良くあります。北鵬や北翔（これは北大の馬の中では最も扶助に軽快な馬ですが）に二、三年生を拍車無しで乗せると、満足に速歩発進も出来ない事がありました。騎手がいくら力んでみても馬は常歩ばかりやつているのです。ところが拍車をつけて他の馬に乗つた時には速歩発進が出来ます。これは、彼がそれまで、拍車だけで速歩発進を行つていた事を証明しています。これではいけないのです。拍車はあくまでも補助として用いる事、常に推進の主役は脚である事を忘れないで下さい。

五、ハミ受け・平衡・拳

馬術で最も重要なもの、それはハミ受けです。ハミ受け無くし

て馬術はありません。ハミ受けとは何か？これは一番難しい問題です。私にも良く分らないのですが分らないなりに説明してみましょう。

馬が運動する時、必ずハミに支点を求めて来ます。これを「馬がハミに出る」と云います。前進気勢の旺勢な馬程ハミに出るものです。

さて騎手が脚で推進すると後駆は重心下に深く踏み込み前駆は起揚して馬の推進力は総ての一点に集中します。このとき拳は馬の運動及び平衡（調和した運動態勢）を感知しながら必要な力以外はこれを後駆に返送する。後駆はこれに新たな力を加えて再び拳に送り返しますが、その大部分は馬の前進に使われ、拳に返るのはごく一部になります。この様な状態を馬は騎手の手中にあるハミを受けていると云うのだそうです。どうも哲学的ですが、つまりこう云う事だと思います。

馬の推進力を拳で受けたら、その力を前進気勢を失わない範囲で、馬の後駆にこの力が及び、後駆を支配出来、かつ前駆も起揚し、馬の運動は益々軽快、活発になる。こう云う事だと思います。

ここで重要になつて来るのは拳です。いくら脚で推進力を呼び起しても、それを旨く利用出来なくては、何にもなりません。又伝つて来る推進力も、その時その時で異る筈です。それを感知し、それに対応出来る拳こそ必要なわけです。よく拳が軟いとか硬いとか云いますが、軟い拳とは、伝つて来る力を感知しそれを旨く利用出来る拳の事で、硬い拳と云うのはその逆の場合の事を云います。

又、脚と拳はいつも連絡を保たねばなりません。脚が推進力を起しても拳がこれを適確に受けなければ、馬はどんどん飛び出してしまうでしょうし、拳が脚に比べて強過ぎれば、馬は前進気勢を失い、韁後に陥るでしょう。

故に拳は、馬が飛び出さぬ様、韁後に来ぬ様、かつ軽快に馬が動く様に韁を引けばよいと云う事になりそうです。只単に韁を引くと云つても瞬間々々にその引く強さは変つて来ます。そこが難しい処です。フイリス氏の馬術にはこう書いてあります。「但し収縮時に於て」

「拳は馬の推進力の通過を妨害せず且つ之を後駆に返送するは平衡の維持に欠くべからざる限度の力に留め其実施は指の極めて功妙隠微なる動作に待つこと恰も『ピアニスト』の迅速にして而も確実鋭敏なる指の動作に比すべきものなり。詳言せば比際に於ける拳の操作は馬の推進力をなるべく旺勢に保持しつつ而も平衡（調和した運動態勢）を確保し且つ他の諸扶助と正しく調和し連繋を失なうことなく各歩毎に後駆に対して確実且つ巧妙に返送するを要し是が適否の判定は独り隠微なる馬術感覚により臨機応変的に決するものにして今之を数理的に明示するは絶対不可能とす蓋し馬の重心前方に移行し馬が手中より脱せんとすれば指の緊縮其度過少なるを示し重心過度に後方に移り腰部沈下して飛節は遠く後方に位置し其進出十分ならざるは指の力過度なるを証すべく共に収縮は消滅せるものなり。」（かなずかいと漢字は若干本文と変つています。）

とにかく難しいものです。練習に練習を重ねて、自分のものにするしか仕方がありません。拳にしても他の操作にしても、敏感に馬の状態を感じ取り、それと同時に対応出来る様、要するに操作、扶助が条件反射となるまで練習する事が必要なのです。

六、自　信

何事に於ても自信は必要です。馬に乗る時も然りです。おそるおそる乗つていたのでは扶助も適確に馬に伝わりません。何時も「これで良いのだろうか？」と迷つていては上達しません。自信を持つてやりましよう。そしてうまく出来なかつたときには、その原因を考え、新たなるフアイトでぶつかりましよう。何事も馬から教えてもらうのです。然し高慢はいけません。「俺はうまいんだ。」などと思つたらそこで進歩は止ります。自分よりヘタな人を見ずに自分より上手な人を見つめましよう。もし「自分は同輩の内では一番旨いんだ。」と満足している人間が居たら、そいつは大いなる馬鹿者です。又そう云う人間に限つて、無用の拍車や鞭をふるつて得々としているものです。

七、愛撫と懲戒

運動中、要求した事を馬が行わない事があります。その時すぐ拍車や鞭で懲戒しがちですが、その前に何故馬が動かなかつたのか考えてみる事が必要です。自分の扶助が悪かつたのか？（大部分の場合がこれだと私は思います。）その馬には高等過ぎる事を求めたのか？体に故障があるのではないか？　疲労しているのではないか？　こう云う馬の反抗心以外の原因による場合は決して懲戒すべきではありません。馬をしかるより先に、自分を反省してみる事が大切です。馬が出来ない状態にあるのに懲戒する事は、「お前、ヘソで茶をわかしてみろ。何？出来ない？　この馬鹿野郎！」とぶんなぐるのと同じです。

但し、その原因が馬の反抗心にあるときは懲戒が必要です。然し懲戒するとき注意すべきなのは、決して騎手が熱くなつていてはいけないと云う事です。常に騎手は冷静に懲戒し、馬に服従の意志が見えたらすかさず愛撫しなければなりません。もし騎手が冷静さを欠いていると、この愛撫すべき瞬間をのがし懲戒をなお続ける為、益々馬に反抗心を抱かせてしまいます。馬が服従の意を表したらすぐ愛撫する事が重要なのです。愛撫の無い又は愛撫のチャンスを見のがす懲戒など何の役にも立たぬばかりか、大いなる害となります。

八、上達するコツ

上達するための最大のコツは、数多く乗ると云う事です。その上に加えるのは、良い馬に乗る事、良い師に学ぶ事。実のある乗り方をする事。本を読む事等有ります。その内実のある乗り方について少し述べます。時々見かけるのですが、只漫然と馬に乗り、時間をつぶしている様にみえる人が居ます。実にもつたいない話で、只鞍数かせぎに乗るのなら乗らない方が増しです。乗る時には、その日の目標をきめて乗ると良いと思います。

巻乗りの下手な人は、巻乗りに主眼を置くのです。もち論他をおろそかにしてはいけませんが：：。そうすれば興味はつきない筈です。今日は元気良く歩かせよう。今日は停止を練習しよう。何とか伸長速歩をもつと伸ばせないだろうか？　色々ある筈です。

話は少し変りますが、大きな試合を見学する事。これは非常に役に立ちます。見るだけで旨くなる筈はないと云うかも知れませんが見る事が、心理的に作用して結果的に旨くなるのです。私に

こう云う経験があります　私が二年生の頃です。夏休みが終る迄私は、斜横歩さえ出来ませんでした。これは他の同輩も同じで、志水さんや恩田さんが、実演して次にやらされたのですが、誰一人として斜横歩が出来ませんでした。終にその時の最上級生達は大いに嘆いた末、自分達の教え方が悪いのではないかと疑い、我々二年目は、清水さんのアパートに呼ばれ、清水さんじきじきに、「俺達の教え方が悪いのじゃないか？俺になら話やすいだろうから正直な意見を聞かせてくれ。」と云われたもので、今思えば笑話ですが、当時は大変な騒ぎだったのです。前置きが長くなりましたが、それ程私は下手だった訳です。ところが、岡山市で国体全日本、学生自馬の三つの大会が確か十月頃あったのですが、私はその帰りの貨車積を命ぜられて、国体の最終日に岡山へ行き、以後馬の世話をしながら全日本と自馬大とを見て貨車に乗って帰りました。その間一回も馬に乗っていません。そして札幌に帰ってから一週間後ぐらいに、初めて馬に乗りました。馬は北楡で水勒をつけていました。私は騎乗してから、どう云う理由か知りませんが横歩をやってみたくなったのです。それで横歩の扶助を行うと、驚いた事に北楡が、一応横歩をやったのです。次に斜横歩をやってみました。これも出来るのです。岡山へ行く前は全然斜横歩が出来なかった私が、只岡山で試合を見て来たと云うだけで斜横歩ばかりでなく横歩も出来る様になったのです。思うに、岡山で上手な人をたくさん見て来た為「俺もやるぞ！」と云うファイトが馬にも伝わり、そして決然たる扶助を行えたのだと思います。以上長々と書いて来ましたが要するに、大きな試合を見る事は非常に役に立つと云うおそまつです。時間のゆるす限り、試合がある時は、見学に行った方が良いでしょう。例え貨車に乗って

でも。

後　記

まだまだ書きたい事、書きもらした事がたくさん有りますが余りに長くなりますのでこのあたりで終らす事に致します。長い様で短かったこの四年間を振り返ると色々な事がありました。馬も変りましたし、人も変って来ました。既に私達四年目は、三回の追コンに臨席し、今度は、送られる側になりました。老兵は消え行くのみ……。然し北大馬術部O・B会では、最も若く、前進気勢に横溢した仲間であります。そして、馬術部を追出され、O・B会へ強制的（？）に加入させられる為のパスポートとして、この論文を書きました。この文のいたる所に私の想い出が含まれています。馬につながるもの、人につながるもの。色々です。書くのに苦労しましたが、部を卒業するにあたり、自分の集大成をする機会を与えられた事に感謝します。只、昨年の七帝戦以後、私の個人的問題で皆と共に試合に出られなくなり、部員の皆さんに御迷惑をおかけした事が非常に心残りです。

獣医・畜産・農業書
高価買入
南陽堂書店
北大正門横
Tel 71—7537

北大馬術部後援会名簿

氏名	部長	住所
永井一夫	第一代 北大名誉教授	札幌市南二条西十二丁目
高松正信	第二代 北大名誉教授	東京都世田谷区松原町四ノ二九四
黒沢亮助	第三代 北大名誉教授	札幌市北一条西二十二丁目
太秦康光	第四代 函館高専校長	函館市湯川町二ノ八
半沢道郎	現部長 農学部教授	札幌市北六条西十二丁目（七一）二二八六

氏名	卒業年度 学部学科	職業 住所
中野友二郎	昭4年・農農	
平山常介	4 工機	飯野産業KK舞鶴造船所・京都府舞鶴市北吸九六六
中谷勝紀	5 工機	飯野重工業舞鶴工場長・東京都杉並区清水町二一六
間克市	6 農畜	農林省十勝種畜牧場・十勝国河東郡音更町・同場内
岩垣駿夫	6 農農	東京農工大　東京都新宿区百人町四の四二〇　新宿住宅RA15
河崎秋三	6 農畜	東京都競馬組合八王子牧場・東京都八王子市高倉町一ノ五五三
永松四郎	7 農畜	新生興業KK・東京都太田区千東町七七一
藤居金太郎	7 農化	漁業　ブラジル　サンパウロ在住
武田朝男	8 農畜	日本製酪協同組合・東京都港区芝新橋三ノ一二　富士第二ビル内同組合内
東園基文(7主)	9 農農	宮内庁待従職参事・東京都渋谷区八幡通二ノ二三
田畑武夫	10 医婦	田端産婦人科病院・札幌市南五条西二丁目
植村勘一(8主)	10 農畜	KK二光電機製作所・東京都目黒区鷹番町四五

氏名	卒業年度	学部学科	職業	住所
久葉昇	昭10	農畜	兵庫農大教授・兵庫県多紀郡城篠山町郡家八七五ノ一	
本田桓康	10	工機	プレス工業KK・東京都千代田区純尾井町四ノ一一	
加藤英夫	11	医産	朝日生命札幌支社	(4)九二三一 札幌市南大通り七丁目
大迫明徳	11	理化	ケミダイズLtd・東京都世田谷区世田谷三ノ二五六〇	
吉見一郎	11	農経	雪印乳業・東京都杉並区神戸町一一四	
高杉直幹(2主)	11	理化	札幌オルゲ	(4)一一八一 札幌市北七条西十三丁目 北海道短期大学教授
脇田代千郎(10主)	11	農化	モンサイト化成工業KK四日市工場加工部長	四日市大字赤城二ノ四
滋賀透明(11主)	12	医	大同製鋼診療所長	東京都港区芝白金三光町三六四
渋谷周平	12	農畜	日本アイスクリーム連合	東京都渋谷区代々木一ノ二二
黒沢良雄	12	農経	日本長期信用銀行	神奈川県芽ケ崎市小和田四三三三
森山武雄	12	医	国立岩木療養所長	青森県南津軽郡浪岡町
小笠原義顕	13	工電	日本電機KK玉川製造所電波工業部	川崎市宿河原二二二三
小村達夫	13	農生	岡山大学理学部教授	岡山市津島岡山大学理学部内
桶本勝登	13	農経	人事院東京地方事務所長	東京都杉並区上荻窪一ノ一九七
高井久芳	13	農畜	北海道仙美里農業講習所	北海道中川郡本別町仙美里 北海道農業研究所 改良課分室
前川静彌	13	理化	日本製鋼室蘭製作所	室蘭市茶津町同上社宅番外七九号
松平悌亮	13	農畜	日本ビール目黒工場製麦課長	東京都渋谷区景近町五六一
山下亮(12主)	13	農化	広島村農業共済組合家畜診療所主任	教授
石井昌長(13主)	13	農畜		
池内武夫(15主)	14	農畜	中央競馬場長	東京都世谷区 若林町二六六
小田晃也	14	農畜	実業	静岡県伊東市宇佐美二七八七 ホテルカスガ
中尾敦司	15	工機	住友ビル大日本鉱業KK	東京都杉並区大宮前二ノ六〇五
西村雅吉(14主)	15	理化	北大理学部助教授	札幌市南二十一条西十一丁目

氏名	卒業年度	学部学科	職業	住所
木谷清喜貞	昭15年	農実	瓦土建自営	金沢市古寺町十二
秋吉照忠	16	農林	北海道合板協会東京事務所	（中央区銀座一ノ三　新銀座ビル内）
石井和彦（15主）	16	農畜	鳥取大学農学部助教授	鳥取市湯所町い住宅二号
伊関悦郎	16	工鉱	函館水産高校	函館市宮前町二一三
河原清作	16	工土		小樽市忍路塩谷村
熊沢洸	16	農実	北東農産化学工業ＫＫ	十勝国河東郡士幌市街同ＫＫ内
関義人	16	医	関内科小児科医院	秋田県湯沢市字西松沢二九二
高木史郎	16	工鉱	県立水戸高校	茨城県東茨城郡茨城町駒渡一
中曾根賢	16	農実	道庁農務部畜産課	札幌市菊水上町四六
半沢宏	16	工機	北大工学部助教授	札幌市北六条西十二丁目
福光幸彦	17	医	福光小児科	札幌市南七条西四丁目
岡田光夫（16主）	17	工土	札幌市役所建設部長	札幌市南七条西二十二丁目
白取善之	17	農実	大成軽ブロックＫＫ取締役社長	弘前市大字薬師堂字熊本十九ノ二
山根乙彦	17	農畜	鳥取大学農学部助教授	鳥取市立川町二丁目県営アパート一号
大戸進	18	農林	三井木材工業ＫＫ名古屋支店	名古屋市南区彌次工町一ノ十二　三井木材共同住宅
平井宏知	18	工電	日本電機放送器工業技術部	東京都町田市南大谷六四一
小池栄一	18	工土	北海道電力ＫＫ土木部計画課	札幌市南十四条西九丁目
稲葉恵一	19	農化	日本油脂ＫＫ佃工場	大阪府高槻市南園町三三七
大平英夫	19	理化	日華油脂ＫＫ銀座営業所	東京都新宿区西大久保二ノ二一九
福岡邦泰	19	農畜		
小林正英	20	農畜	東京都庁経済局	東京都杉並区阿佐ケ谷北三丁目二十六番十号
羽島栄治	20	工工	国鉄大阪工事局停車場課長	兵庫県西宮市国鉄甲子園アパート
宇津見千之助	21	農畜		栃木県小山市横町二二〇六
宮崎利昭	22	工機	第一物産ＫＫ機械輸出部	在ペレー　（東京都北多摩郡狛江町和泉二六一八）

和田 隆	昭22	農畜	釧路家畜保健所長　釧路市浦見町同所内
武田裕	25	理地	国際航業KK研究室　東京都武蔵野市境南四の一四六二　同社宅
田之上冢久	26	農水	
後藤義英	28	農獣	札幌市西保健所　札幌市円山西町二ノ九七
斉藤善一	28	農畜	北大農学部教授　札幌市南五条西十五丁目
佐藤厳	28	農畜	自　営　札幌市南十六条西八ノ五八〇
下飯坂隆	28	農畜	北大日高実験牧場　北海道静内郡静内町御園
鈴木敏夫	28	農畜	美幌高校　網走郡美幌町東二条北一丁目　森方
渡植貞一郎	28	農畜	北大農学部　札幌市北二十六条東二丁目
鳶野保	28	農畜	北海道農業試験場根室支場　北海道標津郡中標津町同場内
永井重翁	28	農獣	雪印乳業KK伊保内工場　岩手県九戸郡九戸村長興軒第二ノ七〇同場内
梶谷晴男	28	農水	大阪魚市場KK　牧岡市四条町四条
古谷昌司（26主27）	28	農水	古谷製菓東京研究室　埼玉県浦和市別所西野台一二一〇
吉本正	28	農畜	宮城農業試験場　仙台市原町小田原桝江二九　同場内
福島務	29	医	北大産婦人科教室　札幌市琴似町二二五
阿部晃一郎	30	工鉱	住友金属鉱山鴻之舞鉱業所　紋別市鴻之舞　清明寮
鎌田正人（28主29）	30	農畜（獣）	鎌田牧場　北海道浦河郡浦河町西幌別
田中浩	30	工治	神戸市葺台区神戸製鋼所熔接棒事業部内
正富広之	30	理動	
岡本洸	31	農生	十条製紙KK研究所　埼玉県草加市松原団地D～58二〇四
加藤有	31	獣	虎ノ門動物病院
有藤成俊	31	農経	北海道信用農協連岩見沢支所　岩見沢市四条西五丁目　及川方
加藤昌太郎	31	理物	防大応用物理学教室　千葉県市川市市川町四の二〇六七　石井荘
千田香生	31	獣	日本中央競馬会保健研究所　東京都世田谷区弦巻町三ノ六二一
石塚和夫	31	獣	

氏名	卒業年度 学部学科	職業住所
大久保利彦(30主)	昭和31年獣	雪印乳業　天塩郡豊富町雪印社宅
小長谷善高		
荒川清	32 経	札幌トヨタ自動車KK　札幌市界川町四九五
榎本幸人	32 理植	
岡部満雄	32 農畜	道庁
斉藤実	32 経	不二越鋼材KK　福井市下北野町
宮沢寛(31主)	32 林産	日本揮発油（四日市市）　三重県四日市市　同上内
伊藤亮	33 獣	農林省中国種畜牧場　広島県加茂郡河内町入野　同場内
乾直進	33 理動	癌研究所病理部　神奈川県藤沢市辻堂北町二五五七
栗原康	33 土鉱	東京都板橋区下赤塚七六　下赤塚公務員住宅十二号
松田瓔	33 医薬	札医大法医学教室　札幌市北十四条西十四丁目
渡辺俊弘	33 応化	北海道炭鉱汽船KK　埼玉県蕨市旭町四九六二　北炭アパート
柴田久男	34 工電	北海道電力　北海道江別市対雁一番地　北電アパート
生田勝一(33主)	34 経	読売新聞報道部　札幌市南三条西一丁目　同上内
菅原照雄	34 文哲	北大文学部研究室
樋口正明(32主)	34 法	東京都人事委員会試験所　東京都世田谷区上馬町二ノ十三
千葉幹夫	34 獣	中央競馬会中山競馬診療所　千葉県市川市若宮町三の二四四　11号
土井敦	34 農畜	ホクレン農業協同組合会酪農部　札幌市北四条西一丁目同上内
山本智	34 水場	
中村美幸	34 経	東京都中野区鷺の宮六ノ七八二
村山哲	34 経	北海道電力KK北見支店営業課　北見市美芳町　北友寮
栗津健太郎	34 水場	銀座屋（製パン）　札幌市南一条西十七丁目　（六二）〇七〇一
佐伯雄二	35 農畜	森永乳業KK目黒工場製造課　東京都太田区馬込二ノ一一一三

田中紀介	昭和35	林産	富士合板　静岡県清水市宮代町六
長谷川邦夫	35	法	岩崎通信KK会計課　東京都杉並区久我山二ノ七一〇　同KK内
本橋幹久	35	農畜	Segao de Oriplagao Aoicola Cooperatiro Central Agricola —Brasil, Rna Amorico Brasiliensc 419 Sospaulc Brasil
森本悌子(34主)	35	林産	松下木材KK営業部　東京都葛飾区本立石町一六一
奥野静子	35	文英	市内北二条西二十三丁目　片山方
大場善明(35主)	36	国史	読売新聞社　東京都江東区深川三好町二ノ一六　志水方
吉田亨	36	工衛	高砂熱学工業KK技術部　東京都中野区鷺ノ宮一ノ二〇一
湯浅正之	36	農畜	伊藤忠商事KK　東京都武蔵野市西窪四一一　伊藤忠三郎寮
河原紀夫	36	地鉱	アジア航空測量　東京都目黒区中目黒四の一六四〇　阿部方
稲垣修一	36	理化	大同製鋼KK　愛知県知多郡須賀町大字加木屋字南鹿持一八　大同製鋼知多寮
佐藤典子	36	医	—札幌市北七条西十三丁目
高林嬉子	36	医	
小山毅	37	教	北大大学院　札幌市北六条西十丁目　林靖子方
玉沢一晴	37	薬	山内製薬KK　埼玉県浦和市南浦和一の一の十四　太田方
千葉祐記(36主)	37	農畜	雪印乳業KK　福岡市上呉服町二十　第一生命ビル内　雪印乳業販売課
鶴見好博	37	理化	江戸川化学KK　東京都台東区上野桜木町二三　三菱江戸川化学寮
広岡暢夫	37	農畜	全販連　茨城県西茨城郡岩間町押辺全販連中央種豚場内
森弘峯	37	工精	大隈鉄工所　名古屋市北区辻町一丁目　大隈鉄工所第一寮
四柳智久	37	医薬	札大大学院　札幌市南二十条西七丁目　上原方
伊藤公一	37	医医	北大医学部　札幌市南二十五条西十二丁目
木塚信次	37	農畜	東大大学院　神奈川県藤沢市鵠沼二八〇六五
小鳥杏介	37	水産	東京都淀橋保健所　東京都港区芝白金猿町二
市川瑞彦(37主)	38	理物	市内北三二東六　井上武志方
岡田征至	38	法法	北海道拓殖銀行　神奈川県川崎市木具町九八　拓銀　木月寮

氏名	卒業年度 学部学科	職業	住所
恩田正臣	昭和38年農畜	農林省	兵庫県竜野市揖西町土師
小出秀達	38 医医		札幌市北六条西十六丁目　稲垣方
清水洋	38 農畜	農林省	茨城県真壁郡関城町　農林省大宮種畜牧場茨城支場
田中セツ子	38 農工		東京都目黒区柿之木坂八二四
志水一允	38 林産	農林省	東京都江東区深川三好町二ノ十六
原重一	38 農農	東大工学部	東京都文京区大塚坂下町九九
堀川芳男	38 農畜	宝幸水産	東京都中野区上高田ノ九六
宮崎健	38 文露	産経新聞	三重県津市丸の内本町三重会館内産経新聞津支局
八木正己(38主)	39 理生	北星高校	札幌市北十一条西三丁目　渡辺方　(七一)六〇三八
荒太伸也	39 水遠	北大水産学部	函館市港町二五三　北大北晨寮
小島武	39 医薬	鐘ケ淵化学	兵庫神戸市兵庫区吉田町一の三二　鐘化研究所和風寮
高木佑太	39 農畜	台糖フアイザー	札幌市北十条東十丁目台糖フアイザー寮
田村雅英	39 工合	北大大学院	〃　南大通り西十七丁目　山崎方
寺江則子	39 農畜	天使女学院	〃
三浦清一郎	39 教	北大大学院	〃

特別会員

染谷五郎	札幌市豊平五条十丁目　染谷商会取締役社長（八一）〇六二三
佐合義弘	北大生協

現役部員

氏名	学生・学部学科	現住所	帰省先
大木誠示	4 理数	札幌市北七西七 山崎方	室蘭市常盤町六一
菅野弘	4 農畜	〃 北十八西六 関アパート	東京都世田谷区玉川奥沢町三ノ六一
萩原雅典	4 経	〃 北七西八 エルム荘	四国高松市兵庫町
御坊田賢一	4 工治金	〃 月寒東二ノ二 月寒寮	埼玉県浦和市常盤町一〇ー二〇
滝沢南海雄 (39生)	4 理生	〃 北七西八 エルム荘	前橋市吉神町萩北二四〇ノ二 (2)四六一三
野田行文	4 獣	〃 北七西八 エルム荘	大阪市東区大手前町
牧竜子	4 医薬	〃 南一西十九 (六二)〇五七五	同 上
水野佑亮	4 理化	〃 北十五東四 加藤方	名古屋市東区東外堀町二ノ三
松永武彦	4 電子	北大楡影寮	静岡県焼津市港町二二五
守屋正	4 工精	札幌市旭町一一ノ六三 中村方	横浜市神奈川区上友町二ノ二二ー一
横田肇	4 農化	〃 宮ノ森四三九 柳沼方	名古屋市千種区池園町二ノ二一
小栗紀彦 (40生)	3 農畜	〃 北七西十二 秋田北盟寮 (〇四)三八八七	東京都目黒区月光町一六三
梶山泰嗣	3 水		東京都世田谷区代田一ノ三六七
片寄馝	3 農化	札幌市北二十二西二 協和荘	大阪府門真市本町六の五
加藤孝志	3 医	〃 〃	秋田県南秋田郡五城目町富田
河合晴夫	3 法	〃 〃	静岡県磐田郡豊田村一言
黒沢道雄	3 工機	札幌市北十五西二 相田方 (七二)三八三三	〃 市河原町四一四三の一
近藤喜十郎	3 文	〃 北七西十二 米沢寮	名古屋市中区古渡町五ノ一六
高野文彰	3 農農	〃 〃 〃	山形県米沢市小国町二一六五
高橋昭夫	3 獣	〃 北十四西二 新居方	青森県八戸市山伏小路六
松尾英彦	3 水漁	函館市港町二三九 北大北農寮	札幌市北二十二東九
八木多賀子	3 文哲	札幌市北七西八 エルム荘	山越郡八雲町末広町二一三

氏名	学年・学部学科	現住所	帰省先
八木沢守正	3 理生	札幌市北二十西二　清風荘（七一）五九三八	東京都目黒区衾町四七
山村勝	3 農林	〃　北七西十二　米沢寮	山形県米沢市上花沢片町
東沢敏	3 理地	〃　北十八西六　閖方	名寄市西三南五
大堀慧子	3 法	〃　北十東八　（七一）六七二九	同　上
井上克彦	2 工土	〃　北二十西七　真栄荘	埼玉県朝霞町田島五五一
魚住侑司	2 農林	北大恵迪寮	砂川市西二条北五丁目
大谷洋一	2 医	札幌市北七西八　エルム荘	茨城県水戸市神崎町八六一
加藤正昭	2 工衛	〃　北五西九　青年寄宿舎	帯広市大通り八丁目十 Tel. 3-8121
首藤義明	2 工精	北大恵迪寮	大分県大分郡庄内町大字南大津留二五六
田中偉	2 医	札幌市北二十三東四　石垣方	岐阜県郡上郡八幡町尾崎
増田道夫	2 数理	札幌市北十六条西四丁目　多田方	静岡県藤枝市高柳二〇四
河部勝彦	1 教理	小樽市長橋町四五（二）八八七六	同　上
五十嵐章	1 教文	北大恵迪寮	旭川市南四条二十四丁目
池田統洋	1 教理	小樽市最上町十六	同　上
井上和彦	1 教医	札幌市北三十西六　真栄荘	東京都新宿区西大久保四の一七〇池尻歯科
小六曾泉	1 教理	北大女子寮　北六西十三	山梨県甲府市八日町三
加藤光一	1 教理	札幌市北七西八　エルム荘	埼玉県大宮市高鼻町一の三四六
志賀義彦	1 教理	北大恵迪寮	新潟県長岡市巻島町
仙波和子	1 教文	札幌市北八東三　越田方	秋田県秋田市中亀ノ町上丁八
高倉宏輔	1 教理	〃　北七西八　エルム荘	大阪府南河内郡美陵町藤井寺一〇八の六二
多田宣吉	1 教理	〃　南十三西十七　桑原方	岩手県和賀郡東和町東晴山下畑前二六〇
降旗正忠	1 教理	〃　東苗穂町八六　佐藤方	長野県東筑摩郡本郷村浅間六五八
三田新	1 教理	北大恵迪寮	埼玉県浦和市岸町七の九の十四
森田哲郎	1 教理	札幌市北十五西二　太田方	福岡市福陵町三丁目一番地

山尾明彦	1 教理	札幌市北十五西三	須藤方	東京都千代田区神田淡路町二の一三
山本紘明	1 教文	〃 南十一西二十		同 上

物故者

氏名				
辻村憲吉	元配属将校			
沢田鶴松	昭4 工鉱	佐藤誠亀	昭15 農実	
真鍋雅彦	〃5 農畜	山本義則	〃15 理化	
愛甲屡寿家	〃6 農実	佐藤誠	〃15 農実	
九鬼誠之助	〃8 農化 昭6主任	永倉寛	〃16 工土	
岩崎帰一	〃10 工電	畝崎愛男	〃16 農実	
富堅稔	〃14 農実	小林誠平	〃17 農化 昭17主将	
永田敏雄	在学中死去	福本途夫	〃17 理化	
下条規	昭14 農畜	山本亨	〃19 農農	
石川正吉	在学中死去	安達信一	〃23 医医	
菅間威	昭15 農畜	松本久善	第五代部長 元農学部教授	

編集後記

○　ようやく、発行の段階にこぎつけることができた。この「ようやく」という言葉の内容は決して単純なものではなく、この仕事にたずさわつてきた人でなければ味い尽せないと思う。二ケ月も予定がのびてしまつたのは、編集者の怠慢はさておき、主として原稿を集めるのに時間がかかりすぎたためである。今後、部報編集にあたる部員は、（実をいうと私は彼に対し、衷心からの同情を禁じ得ないのであるが）この点をよくよく考慮に入れて計画をたてるべきである。

○　原稿は全て各々、素晴しいものであつたと思う。馬に対する愛情と熱意にみちた各馬調教報告をはじめ、ユーモアとペーソスあふれる随筆など、ことに滝沢兄の「馬場馬術入門」は初心者にとり誠によいテキストと思われるので、長文にもかかわらず、全文を掲載した。残念だつたことは、去年の編集後記にもあつたように、下級生からの投稿が少なかつたことである。「ダンパーのノルマ制はきびしい」とか「上級生はえばつていて面白くない」とか、不平不満を率直にいつてほしかつた。同じ部員をんだもの、今さら照れたり臆したりすることもないと思う。

○　この辺で先輩諸兄にコマーシャルを一つ。八木兄を中心とする有志部員の努力により、「馬調教のための指針」が先日発行されました。九十頁にわたる本で、値段は一部五百円です。まだ部数に余裕がありますから、御希望の際は、当部あて御注文下さい。

○　今年度は、確かにわが北大馬術部は不振だつた。戦績をまとめていて、どうも淋しかつた。来年度はこんな言葉が編集後記に載らないよう、頑張りたいものである。

○　最後になりましたが、寄稿された方々に心からの感謝の意を表します。また広告とりにあちこち歩いてくれた部員諸兄、御苦労さんでした。

（大　谷）

部報第十号

昭和四十年三月発行

発行者　北海道大学体育会馬術部
（札幌市北八条西五丁目北大第一農場内）

編集者　部報編集小委員会

印刷所　北大生協プリント部

御会合御会食に御利用下さい。

北の菅直営

ほまれ第五

狸小路7丁目

TEL 221648

鮨　栄

大小御宴会御会合にご利用下さい

札幌市南3条西5丁目

221487

TEL 228773